東洋新報といふ新聞を、書いて居た。京橋の山下町邊に、その本社を置いて、朝比奈は、社長であり、且主筆であつた。

私の記憶する所では、陸羯南、德富蘇峰、朝比奈碌堂の三人が、政治新聞の記者としては、尤もすぐれたものであつた。一般の信用も厚く、議論は、徹底して居たし、殊に文章が良かつたので、讀んで居ても、氣がすツとする位であつた。

乍併、三人の性格は、全然違つて居て、その立場も同じではなかつた。筆の運びにも、それ〴〵の特色があり、文體は、まるで異つて居た。

羯南の本名は、實と謂ふて、人格の上からいへば、第一位であつた。原敬が、司法省法律學校時代に、同窓生であつて、陸とは同じ東北の、出身であつた爲めに、親しくして居たものだ。

福本日南、秋月左都夫、古賀廉造、國府青崖、加藤恒忠等と共に、陸は、朝征伐の事から、校長の事務を執つて居た奴と、ひどい喧嘩をはじめて、終には各級の學課が休みになる、といふ騒ぎになり、原は、その響きをうけて、同じやうに休む事になるので、手を束ねて、傍觀して居る事が出來なくなり、その仲裁を試みたが、癖癖の强い原は、校長と衝突して、終に自分から退學してしまつた。

於此、陸を始め、喧嘩の發頭人であつたものは、みな退學する事になつて、騒ぎの鬼はついたが、陸も、學校を出て、原と共に、同宿する事になつた。

それから後ち、陸は、官報局にはいつて、編輯長になり、日本新聞を起して、主筆の椅子に就てから、漸く其人格と文章が、識者の間に、廣く知られるやうになつた。

立論の正確であつた事は、固よりいふ迄もないが、陸一流の莊重な文體は、讀書子を喜ばせて、新聞の聲價は、それが爲めに高くなつた。

之に反して、德富の文章は、端麗にして流暢、思ふ所は、すべて言ひ盡して、而かも讀む人をして、毫も倦怠せしめない。從來の漢文體を、清新な歐文調に消化して、一種の文體を創始したのは、實に驚くべき力である、と、深く敬服して居る。

殊に、學問は、古今東西に渉り、苟も讀書家として、此人ほどに、和漢洋に通じて居るものは、多く在るまい。今の若い人は、誰も氣が付かずに使つて居るが、新しい熟字の一半は、殆んど此人に依つて、作り出されたといつても可いほどだ。

昨今では、佛典から捜し求めて、さらに新しい熟字を、しきりに使つて居る。どこ迄進んだら、行き留りになるか判らない。

朝比奈は、別に碌堂と稱して、これは又、攻擊的論文を書いたら、日本唯一の人であつた。

當時の論壇に立つたもので、碌堂と鬪つて、多少の傷を負はぬものはなく、句點のない、書き流しの文章で、ちよツと見たのでは、よみ難さうであつて、いよ〳〵讀みはじめると、少しも難澁の所なく、スラ〳〵と讀み終つて、よく會得のゆく、能文であつた。

今でも、私の記憶に殘つて居るのは、島田三郎の開國始末に在る、井伊大老の一節について、痛烈な論難を加へ、之れが爲めに、丸山名政と『國民之友』誌上に於て、數回に渉つて應酬した論文と、もう一つは、尾崎行雄が、文相としての演說、例の共和政治問題に關して、東京日々の紙上に、その攻擊論文を揭げて、遂に宮中を動かし、尾崎を辭職せしめた時の事である。

此の朝比奈が、東洋新報を發行して、勁健な筆を揮つて居る時、恰も條約改正の秘密を聞込み、徐々調べはじめた所へ、ロンドンタイムスが着いて、それに談判の概要と、改正條項の全部が揭げられてあつた。

日本政府が、どれほど秘密にして居ても、外國政府は、そんなことは河童の屁ほどにも思つて居ないから、平氣で

新聞へ掲載してしまつた。

其處で、朝比奈は、之れを材料として、條約改正反對の大論文を、新報の紙上へ掲げた。それが七日間も續いて、當時の大評判であつたが、實に筆端火を吐くの概があり、論鋒は一々急所を衝いて、『要之、大隈外相は實國の賊也矣』といふのが二號活字で、大きく出た。

新聞は、忽ち一週間の發行停止を命ぜられた。その頃の停止には、必ず期限を附したもので、大隈は、野に居ると冒論の解放を叫びながら、朝に立つと、斯んな馬鹿な事をする、といふて、ひどく非難された。

それに前後して、日本新聞紙上に、陸の論文が、出て來た。是れは又た、朝比奈とは、全く趣きを異にした文章で、陸の人格が、其まゝに現はれて、實に眞率なものであつたのみならず、莊重嚴肅な文體は、よむ人をして、坐に襟を正さしむるものがあり、大隈も、之れには頗る苦しかつたものか、一ケ月の間に、三回までも、停止を命じて居る。

全體、新聞の發行停止位ゐ、馬鹿々々しいものはなく、何の爲にするのか、殆んど意味が解らない。

政府が、停止を命じた時は、もう幾何かの新聞は、配布されて居るので、それを手にした人だけは、停止に不拘、その論文は讀んで居るのだから、停止の目的は、決して達せられたものとはいへぬ。少し立ち入つて考へれば、停止をうけた、と聞いてから、さらに讀み直して、物好きなものは、友達の間へ、持ち廻るやうにもなり、停止された爲めに、その論文は、却つて廣く知られる事になる。

同時に、讀んだ人の感情は、政府に對して、必ず善くないに、極まつて居る。それだけ政府は、不利益を招く事になるのだから、斯んなつまらぬ事はない。

如何に利巧な人でも、政府に入ると、此道理が判らなくなるのだから、妙なものだ。とに角、發行停止なんぞといふことは、はやく廢めてしまふがよい。

大隈の條約は、果してどんなものか、と思つて居た國民は、慕洋新報と日本新聞に依つて、漸く其眞相を知る事が

出來て、反對の氣勢は、頗る強くなつて來た。

地方の新聞は、それを轉載して、同樣の憂目に逢ふたから、一層、其熱を昂げて、條約改正反對の聲は、日を追ふて、激しくなるばかりであつた。

日本新聞に關係の深い、千頭清臣が、大學出身のやかましい連中を唆つて、反對の叫びを高くした。帝大出身の學者が、政治運動を始めたのは、これが最初である。

古島一雄は、其頃の日本新聞に、編輯長として、働いて居た。今では政界の名物男として、且つ犬養木堂の懷刀として、ひろく知られて居るが、當時は、まだ二十歳を出たばかりの、若盛りであつた。

最近に死んだ杉浦重剛の門人で、眞に杉浦の膝下で、教へをうけたものは、僅かに數人に過ぎぬが、そのうちの一人が、古島であつた。

但馬の豐岡から出た人で、祖父は、藩の勘定奉行を勤め、父は、槍術の師範であつた。殊に、母は、藩侯の世子に乳をすゝめた關係から、古島は、世子と、乳兄弟の因緣がある。

筑前の平野二郎が、生野銀山の義擧を一跌して、豐岡藩へ、囚はれた時、祖父は、平野を預けられて、幕府へ引渡すまで、平野の世話をして居た。

初め、和田垣謙三の保護をうけて、濱尾新の玄關に居たことがある。內務次官になつて死んだ、久保田清周も、同時に、玄關番であつたが、久保田は、その頃から、溫厚な性質で、敢て人と爭はぬ、といふ風があり、古島は、手もつけられぬほどに、惡戲者であつた。

濱尾は、古島に、見切りをつけて、親元へ歸れ、と云ふた。古島は、その言渡しをうけると、すぐ但馬へ歸つてしまつた。何でも十三四歳の時であつた、といふ事だ。

和田垣の父が、古島の祖父と親交があつて、和田垣は、古島の父と友人である。その關係から古島を、托された譯

で、國へ歸つた古島は、再び和田垣の所へ送られた。

於此、和田垣は、杉浦に、古島を頼んだ。杉浦は、ヨーロツパから歸つて、未だ學塾を開かぬ頃であつた。古島を膝下に置いて、遂々その性癖を矯めて、學問に親むやうにさせた。古島が、今の黨人中に稀れに見るの文章家であるのは、杉浦の仕込みであつた。

杉浦は、日本新聞の社長格であつたから、古島を引上げて、編輯長の椅子に置いた。爾來十餘年の間、日本新聞が伊東欽亮の手に渡る迄、編輯長として大過なく、さらに萬朝報に入つてからも、相當に實力は、認められて居た。

回向院の大角力を、源平盛衰記の文體に習つて、一種の戰記の如く書流した、當時の角力評判記なるものは、古島の筆に成つたもので、讀書子の間に、頗る好評を博した。

杉浦の關係から、三浦將軍に知られ、其愛護を將軍の死際迄、うけて居た。

智慧もあれば、贈もある。文章も書けば、辯舌も利く。黨人の間に、信用も厚く、只一つ金のない、といふのが瑕に玉だ。玉に瑕といふ事は、昔からいふてあるが、古島のは、瑕に玉である。

東京から出て居た、代議士のうちでは、第一の人物であつたが、昨年の總選擧には、無慘の敗を取つた。

日本倶樂部の豪傑連と、日本新聞社の間に往來して、巧みに其聯絡を取つて居たのが、歳の若い古島であつた。

自由黨と改進黨は、犬と猫の間柄であつた。殊に、大隈を嫌ひな、自由黨員は、此機會に於て、大隈を蹴落してやらう、と考へた。

自由黨の外の連中は、そんな事は、考へて居ないが、條約改正を中止させて、帝國の體面を、保ち度い、と考へて居るので、自由黨の運動にも、聯絡を取る事になつた。

全國の人氣を煽るには、どうしても演說會でなければならぬ。其處で、自由黨初め、九團體の同志が集つて、演說會が開く事になり、その第一回は、日本橋濱町の千歳座に於て、開かれる事に決した。

震災前に在つた、明治座は、千歳座の改築されたもので昔の方が大きく造られてあつたから、二千人位あの聽衆は、入れ得るのであつた。いよ〳〵開會したら、舞臺も立見場も、チヨボ床も一ぱいで、三千人位あの人は居たらしい。

辯士は、各派の粋を拔いて、九十三名といふ多數であつた。とても一日には、演說し得ない、といふので、三日間に分けて、正午十二時から、夜の十二時まで、ぶつ通しにやつた。辯士は、交々演壇に立つのであるから、休憩の時間もあり、用事の都合で、勝手に歸る事も出來るが、傍聽人は、さういふ譯にならぬ。一度はいつたら、夜まで續けて居る外はなく、厭になつて歸るものは別として、ぜひ聞き度い、と思ふものは、飯も食はずに、夜までつゞけて居たのだから、實に熱心なものであつた。

久松座の演說が終ると、辯士は、それ〴〵に組をつくつて、地方遊說に出かけた。殆んど全國の隅から隅まで、演說して廻つたから、條約改正の內容も、よく理解が出來て、到る處の演說會は、非常な盛況を極めた。

新聞の調子も、存外に整つて、議論の一致は、いふ迄もなく、雜報に至る迄、同一の書き振りで、大隈條約なるものは、殆んど完膚なき迄に、叩きつけられた。

五

初め大隈の入閣に就ては、改進黨のうちにも異論があつて、頗る面倒が起つた。其頃の大臣は、政黨に籍を置く事を許されず、入閣に先ちて、政黨の關係を、斷つ事になるので、大隈は、改進黨を、脫するの外なかつた。之れに對する、黨員の意見は、全く反對するものが多く、それを繼めるのには、頗る苦しんだのである。

『大隈は、普通の黨員と違つて、黨の總理ではないか、何を苦んで、今更ら脫黨して、たゞ一つの椅子を得んとするのであるか、馬鹿々々しい……程度がある。我々が、今日まで苦境に立つて、大隈を總理に戴いて居るのは、もツと遠大な理想に、生きんと思ふたからである。また、一面から見れば、藩閥の軍門に、降るものゝ如く、甚だ

不快極まる事で、我々は、此屈辱を忍び得ぬのである』と、いつて、却々やかましく、議論を爲るものがあり、容易に治まらなかつた。

けれども、大隈は、既に黒田と、約束して來たから、若し黨の方で、之れを認めぬとなれば、形式丈けでなく、眞に脱黨する外はない、といふのであつたから、在京の黨員にして、幹部と稱される人々は、どうかして、此折合をつけ度い、と思つて、しきりに奔走をはじめ、地方から出て來た、黨員を說きつけるのに、力を盡した。

『純理からいへば、大隈の入閣は、確かに不都合であるが、世間の事は、純理のみで解決し得るものでなく、實際論としては、多少の讓合ひも、必要である。殊に、來年は、議會も開けるので、初めての總選擧に、我黨から、大臣が出て居るのは、甚だ便利な點もあらうから、此事は、成行きにまかせるのも、決して惡くあるまい、と思ふ。若し、大隈總理が、眞劍に脱黨して、今後も、黨に關係が無い、となつたら、それこそ、由々しき大事である』と、いつて說き廻つたので、漸く地方の黨員も、不精無性に承認する、といふ段取りになつて、大隈は入閣したのであつた。

所が、大隈は、條約改正にひツかゝつて、四方塞がりの窮境に陷り、どうにも斯うにも、動きが取れなくなつた。就中、黨の幹部では、非常に心配をはじめ、何とかして大隈を救はねばならぬ、となつたが、反對派に先手をうたれて、如何ともしようがなく、しばらく形勢を觀望して居るうちに、反對派の勢力は、ます〳〵盛んになつて、殆んど全國を席捲するの有樣であるから、兎に角、之れに對する、運動を開始しようといふ事に決した。

それに就ては、東京に於て、先づ演說會を開き、大隈の條約案は、決して反對派のいふが如き、國辱的のものでない、といふ理由を、極力唱へる事が、最も必要である、となつて、新富座を借受け、これも三日間に渉り、黨の雄辯家を集めて、大に宣傳する手續を、取る事になつた。

澁石に、或澁黨は、敵かつた。壯士の名を刑らねるものが、百名に上り地方からも上京して、大に聲援を與へる、といふ黨員も、少なからずあつた。

反對派が、此事を聞き込むと、それ〳〵に會合して、之れに對する態度を、決する事になつた。

『東京に於て、彼等の演說を、無事に通過させては、我々の權威に關するから、一言も云はせるな』といふのが、各派の意向であつた。

斯うした事情から、推して考へれば、此演說會が、無事に終り得る譯はなく、どうせ混亂の狀態に陷るのは、知れて居るから、警視廳の連中は、頗る心配をはじめた。

新富座の在る所は、京橋警察署の管轄に屬するが、迚も此取締りは、一つの警察署ぐらゐで、爲し得るものでないとあつて、芝、神田、日本橋の三警察署長にも、應援として出掛ける事を命じ、全市の非番巡査の狩上げは勿論、交番所の巡査も、たゞ一人だけ殘して、その他のものは、總て新富座へ、差向ける事になつた。

反對派の中堅は、自由黨であつたから、演說妨害の役廻りは、多く自由黨で、引受ける事に、相談が纏つた。

當時の自由黨には、斯うした場合に、無くてならぬ壯士が多く居たので、どうしても、自由黨が、此役目を引受けるのが當然であつた。

早見久五郎、長谷川逸刀、北村熊三郎、北山作次郎、三浦龜吉、氏家直國、篠崎有一郎、菅原孫次等の連中を初め、其他にも多くの壯士が居たが、今は記憶を逸して居る。

早見は、栃木縣小山町の娼家の主人で、歳も三十を越えて居たが、壯士の群れに入つて、力自慢の腕を、揮つた居た。

長谷川は、千葉縣の生れで、大井憲太郎の配下として、借金掛りをして居た男であるが、前年の議會に於て、大連の阿片問題が、國民黨の鮎川代議士に依つて論議され、遂にあの疑獄を惹起すに至つたが、其材料を提供したものは、長谷川であつた。憲政會の關和知は、此人の玄關番をして居たのである。

桑道の達人、篠崎は、小久保喜七の乾兒で、北村は、敏捷な男。北山は、少しぼんやりして居たが、力の強い人であつた。

氏家は、仙臺の生れで、身長六尺を越え、膂力十人に敵し、大阪國事犯に關係して、長く入獄して居たが、赦免されてから、大阪角力の仲間入りをして、幕にまで入つた、といふ剛の者である。

是等の壯士中、殊に異彩を放つたものは、三浦であつた。初めは、根津の遊廓に、俥夫をして居て、その後ち、大井や大江卓の抱俥夫になり、いつか理窟を覺えて、政治運動に、首をつツ込み、駿河臺のニコライ堂の傍へ、俥宿を出した頃は、相當の顔役にもなつて、いつも曳子の五人や十人は、轉がつて居るやうになり、仲間からは『小龜』と呼ばれて、評判の男になつた。

體が小さいので、此綽名をつけられたのであるが、それでも、足の疾いのでは、東京の俥夫のうちで、五人組の一人であつた。喧嘩の上手な事は、實に無類であつて、文身をした、肌を拔いて、得意のタンカを切つた時の調子は、何ともいへぬ、痛快なものであつた。大井に抱へられて居たので、自由黨の壯士は、多く出入して、よく世話になつた。宮に壯士ばかりでなく、黨内の有力者も、屢しば遊びに出かけて、喧嘩の呼吸などを、聞いては、喜んで居たものだ。

竹内綱、栗原亮一、植木枝盛、奥宮健之、勝山孝三、和田稻積、池澤萬壽吉、宮崎夢柳、加藤平四郎、林包明、宮部襲、井上敬次郎、山口熊野、長鹽亥太郎、河野參一、井上平三郎、貞方至信、長阪喜作、その他數へ來れば、隨分多くの名ある人が、彼の意氣を愛して、出入したものであつた。彼も亦た、是等の人から、自然に導かれて、一人前の有志家になりすまし、自由黨の事といへば、生命がけで、働くやうになつたから、いよ〳〵其俠名は、ひろく知られた。

（昨今では、福州上田の柳天町に隱居して居る）

其の頃の井上角五郎は、未だ元氣も壯んであり、喧嘩好きの所から、此演說會を、ぶち毀しについて、壯士の指揮と、會計を引受け、梅林といふ座附の茶屋に、控へて居た。その外に、小久保喜七や新居章吾も、之れに加はつて居た。

六

三浦梧樓は、陸軍中將で學習院長、殊には、東宮殿下の御教養を申付けられて居たので、政治運動をする事は出來なかつた。平生は、日本倶樂部へ出掛けて、同人の間に、氣焰を吐いて來る位が、關の山であつた。條約反對の運動が、追々に激しくなるにつれて、自分も、何かやつて見たい氣はするが、それの出來ない爲めに、不快で堪らなかつた。

或日のこと、杉浦の門人、古島一雄がやつて來た。

『改進黨が、いよ〳〵演說會を開きますぜ』

と、言ひ乍ら、輕く頭を下げた。古島は、その時分からあまり、行儀のよい方でなく、いけぞんざいな男であつた。

三浦は、ヂロリと、古島の顏を見て、

『左樣か』

と、言つた切り、あとは默つて居た。

『この演說を、無事にやらせるのは殘念ですな』

『殘念だと思つたら、うち毀してやれ』

『やツつけませうか』

『うむ。今の若い奴は、みな腰拔けぢやから、そんな醫當は出來ない』

『イヤ、出來んことはありません』
『出來るならやツて見ろ』
『ハイ』。
『己れなぞの若い時分には、天下國家の事に當るものは、すべて命を差出してかゝつたものぢや。今の奴等は、口の先ばかりで、少しも眞劍味といふものがない。見て居ても、齒痒くなる位ぢや』
『さうばかりは云へません。今の有志家中にも、其位の覺悟を持つて居るものは、幾らもあります』
『馬鹿な事をいふな。今の有志家と稱する輩に、そんな氣の利いた奴があるものか。その證據には、國辱的條約の辯護をする演說會を、手を束ねて、見て居るではないか』
『それですから、ぶち毀してしまはう、と云ふて居るぢやありませんか』
『そんな事は、相談する迄もない』
『相談して居るのではありません。これから毀しに出かけるといふ、話をして居るのです』
『左樣か、それは豪い』
『それでは、行つて來ます』
『歸りに寄つて、その模樣を聞かせろ』
『歸りには寄れるかどうか、そんな事は受合へません』
『なぜか』
『どんな騷ぎになるか、その狀況に依つては、無事に歸ることは出來ますまい』
『その覺悟があれば、大丈夫ぢや。ちよつと待つて居れ』
古島が、立ちかゝるのを留めて、三浦は、紙幣を五十圓、紙に包んで渡した。

『これは、若い奴等の辨當代ぢや』
『頂戴します』
『しつかりやれ』
『心得て居ります』
是れから古島は、新富座へ出かけた。其時代の五十圓は、壯士の身に取つて、却々の大金であつた。三浦といふ人の氣分も面白いが、後ちに代議士として、廣く知られた、古島の昔にも、斯ういふことがあつた。
新富座へ押かけて、さかんに演說の妨害を、やつて居るうちに、懷裡の短刀を、巡査に見付けられて、すでに拘引されようとしたのを、自由黨の壯士が、救ひ出して、事なきを得せしめた。
橫濱の有志者としては、藤井訓二郎、福井茂兵衞、關貞吉、丸山宇之吉、岩城戸八百吉、乘田彌吉、皆川廣濟、等の連中が在つた。
藤井は、辯護士をして居て、體格の小さい男であつたが、多少の氣魄もあり、漢學の力があつて、英文も讀み得るといふ重寶な人であつた。議論も強いが、時に腕力も揮ふ。皆川も辯護士であつたが、藤井とは、性格が違ひ、何事も積極的に、出て、やる事のない方で、因循家の如く見えたが、古い自由黨の一人として、生國の讃岐では、藤野政高等と共に、早くから政治運動に關係したといふ、經歷を持つて居た人である。丸山は、疊屋の主人で、歲の若い、元氣な肌合の人であつた。關は藥屋、岩城戸は煙草屋で、いづれも政治運動の好きな人達で、此時には却々活動したものである。
福井は、今、役者になつて、京阪地方では、其道の人として、相當に知られて居る、すでに老境には、入つて居るが、生粹の江戸ツ子で、負けぬ氣の面白い男だ。連鎖劇の山崎長之助が、惡い病に罹つて、終に發狂した、と聞いて、何等の因緣もないのに、仲間の人達を說付けて、數百圓の金を纏め、之れを見舞ひに送つた、といふやうなちよいと

任侠の風のある所が、彼の特長である。

乗田は、初め大和田と稱して、外國商館の番頭をして居たが、其後ち、増島六一郎の出張所を管理して、專ら外國人對手に、訴訟の事務を、執る事になつて、別に時事新報の通信を、引受けて居た。其頃に、例のムト金は、乗田に使はれて、事務員をして居たのである。先生の乗田は、事志と違ひ、晩年は落魄して、旅から旅を、渡り歩いて居るうちに、肺を病んで、此世を去つたが、乾兒のムト金は、どうか斯うか胡麻化しつけて、政務次官になつて死んだ。

此一列を、世間では、横濱壯士と稱して、可成り恐れたものだが、大隈條約に對しては、眞ッ先きに反對運動を起して、演說會を開くやら、中止の建白書を持つて、政府に迫るやら、しきりに騒いで居た。

改進黨の演說會が、いよ〳〵新富座にあると、聞いたので、臨時に集會を催して、演說會を蹂躙しよう、といふ事を決め、鈴本稻之輔、黒部與八等の同志から、旅費を出させて、東京へ出かける事になつた。

政治運動をせぬ人が、斯ういふ事を見て、何と思ふだらう。他の聞いて居る演說會を、わざ〳〵毀しに出かけるとは、物好なものである、と思ふに違ひない。

けれども、本人等の心では、これが愛國心の發露で、立派な政治運動と、考へて居たのである。

新富座の表木戸には、嚴重な木柵をつくり、巡査の數は、百人に近く、押寄せて來る、傍聽人を瀬切つて、身體檢査を行つて居る。一度にどッと入らうとしても、それはさせないのである。

會場の内も、同じやうに青竹を以て、中央を仕切り、舞臺に近い方へは、素性の知れた味方の外は、一人も入れまい、とするほど、嚴しい警戒をして居た。

演壇の左右から、辯士の控所も、多くの巡査が、守つて居る。恰かも戒嚴令を布いた時のやうであつた。

犬養毅は、大同團結が破れて、後藤象二郎に逃げられたので、此時には無關係であつた。茶に、其生格が、改進黨

の人々と、全然異つて居た。で、犬養は、多くの場合、黨の人とは、斯うした運動を、一つにやつた事は、絶對に無かつた。島田三郎も、開國始末を書いて、井伊家から得た金で、洋行中であつたから、出席しなかつた。尾崎行雄が此列に入らなかつたのは、どういふ理由か知らない。

それにしても、辯士の數は、百に近かつたのだから驚く。改進黨中の、名あるものは、すべて出席する事になつて會主は、角田眞平であつた。

場内の騒擾は、開會の趣旨を、演說する時から始まつて、登壇する辯士は、片端から野次られて、一人も滿足に、やり得るものがなかつた。

辯士が『諸君ッ』といへば『何だ』と答へる。笑ひ聲が、一時にどッと湧いて、後は『默れッ』『畜生ッ』『馬鹿ッ』『殴るぞ』『殴れ』等の呶聲が、罵聲と交換された。

そのうちに、二三ケ所で、組打が始まつた。忽ち傍聽人は、總立ちになつて騒ぐ。それを制止しようとして、正服と私服の巡査が、二三の傍聽人を捕へると、之れを見た壯士が、巡査に飛びかゝつて、思ひ切り殴りつけた。

巡査は、之れが爲めに、壯士の方へ掛かつてゆく。外の壯士が、壯士に應援する。場内は、巡査と壯士の、叩き合ひになつた。

それが宮に一組でなく、場内の各所に起るので、何とも取締りのしやうがない。一人の警部は、巡査に命令を發した。

『抵抗するものは縛れ』

巡査の勢ひは、急に強くなつた。二三人の壯士は、鞠の如く縛られて、場外へ擔ぎ出される。巡査の手から手へ渡されて、場外へ、送り出されるのであつた。

多くのうちには、私服の巡査が、壯士と間違へられて、縛られた上に、ひどく叩かれた。本當の巡査だ、といふ事

が判明つて、縛つたり叩いたりした巡査が、しきりに謝罪つて居るのもあつた。

此騒ぎの鎮まる迄は、演壇に立つ人もなく、演說は、自然に、中止の形ちであるが、初めから解散せぬ方針で、臨監して居る署長は、どう騒いでも、解散は命じないから、どこ迄も此騒ぎは、續けられる事になる。

場外の騒ぎは、場内にもまさつて、實に物凄いものであつた。遲れて入場し得ぬものが、築地橋の方面から、萬安の邊り迄、みツしり詰めて居て『わツ〳〵』と吶喊をつくりながら、巡査と押合つて居る。少しでも巡査の力が負ければ、表木戸を破られるので、一生懸命になつて、巡査は、押寄せる群集を、瀨切つて居るが、動もすれば突破されさうになる。

改進黨にも、地方から上京して來た、田舍壯士は居るが、東京馴れぬものだから、一向に用をなさぬ。それを指揮して居るものは、田中正造であつた。

座の前に、猿屋といふ茶屋があつて、之れを本陣にして、巡査と共に、群集と鬪つて居た。田中は、破鐘の如き、聲をふり絞つて、猿屋の二階から、號令をかけて居た。

群集の一人が、田中を眼がけて、石を投げた。之れを巡査が取抑へようとしたのが、混亂の始めて、各所に、叩き合ひが起つた。繩にかゝつて拘引されるもの數十名、疵を負ふて、血を流すもの無數、とても收拾し得ぬ、狀況に陷つた。

横濱から押出した一團は、會場へ、はいつたものは僅かに十數名で、跡は入口で拒まれてしまつた。そのうちに福井が居て、さかんに群集を、煽つて居た。

昔の芝居町に生れ、座附の丸鐵といふ、茶屋の悴であつた。早く落語家になつて、五明樓玉輔の門人になり、玉若と稱して、十七歳の時、眞打の披露をしたほどに、天才肌の男であつた。後の圓右が、その時に、眞打の披露して、本格の眞打には、どちらが先きになるか、といはれて、それ〴〵に贔屓が肩入れをして、はげしい競爭をした。玉若

の福井が、寄席の囃りに、俥を引ツくり返へされて、足を打つたのが原因で、強いリウマチスに變じ、終に片足が曲らなくなつた。高座で、足を投げ出して居る事は出來ないから、落語家を廢めてしまつた。

江戸ツ子の通人が集まつて、六二連といふ劇評團をつくり、梅素黨、富田砂筵の二人が、その牛耳を取つて居た。黑表紙で、横開きの小册子を發行して、芝居の評を書いて居た。明治十年頃が、此連中が、最もさかんな時であつた。

丸鐵の悴は、富田の世話になつて、學校へ通ひ、多少の文字が解るやうになると、自由新聞社の雜務掛りになつた。富田が、横濱の商館番頭になつた時、福井も、伴はれて來た。それ切り、横濱へ居坐つた。

江戸ツ子の喧嘩好き、足は、自由が利かなくても、手は、却々はやく、ぢきにポカリとやる。島田三郎へ、決鬪を申込んで、裁判所へ引ツ張られたのも、其頃の事であつた。

猿屋の二階から、巡査や壯士を、指揮して居る、田中の姿を見ると、持つて生れた、癇癪玉が破裂して、猿屋の表口へ押かけた。

『田中正造を出せ、福井茂兵衞が對手になつてやる。さあ、田中を出せ』

と、すばらしい聲を張上げて、啞鳴つて居る。その後から、群集は、わツ〳〵といひながら、福井に、聲援して居た。

七

足尾銅山の問題で、義人の名を殘した、田中正造は、初め自由黨側の人であつたが、後に改進黨へ轉じて、それから代議士になつて、議會の名物として、よく世間に知られ、晩年には、鑛毒問題について直訴までやつたが、議會の演壇に、獅子吼した雄姿は、今も猶ほ、眼に遺つて居る。一旦斯うと、思ひ込んだ事は、どこまでも、やり通してゆく、その志操の堅い點は、多くの代議士中、稀れに見る所であつた。生一本な黨人氣質が、未だ旺んであつた頃の彼

は、何時も眞劍に働いて、反對黨を見ること、恰も國賊の如くで、阿修羅王の暴れたやうに、暴れ狂ふて、猪突猛進する狀は、實に凄まじいものであつた。

猿家の二階に、那の大きい體を現はし、破鐘の如き聲をふり絞つて、配下の百姓や、壯士を指揮する、その熱烈さには、誰れも皆な感心した。

遲れて入場し得なかつた、横濱の壯士が、一團となつて鬪ふ狀も、また勇ましく、改進黨の參謀本部は、猿家に設けられてある、と知つて、之れを襲ふこと、數回に及んだが、どうしても、打破る事は出來なかつた。

於、此、福井は、先づ田中と、一騎打ちをなす可く、群集を押分けて、猿家へ乘込み、田中に、面會を求めた。

『我輩に面會し度い、といふのは、貴樣か』

『左樣だ』

『何の用事か』

『大隈の條約は、國家の體面を損するから、吾々は、斯く反對して居るのである。然るに、君等は、腕力を以て吾々に對抗しよう、とするのは、どういふ理由か、それを聞き度くて、面會を求めたのだ』

『そんな事は、聞く必要がないから、歸れ』

『歸れとは、何事だ、無禮千萬な事を吐かすな』

『貴樣等に、面會する必要はないから、歸れといふのだ』

『何を吐かすかツ、此百姓奴ツ』

と、いふや否、福井は、田中に飛びかゝつて、ゴツンと一つ打つた。

『小僧が、生意氣な事をするな』

田中の手は、福井の首筋にかゝつた。それから二人は、組打ちをはじめた。

双方の壯士と、彌次馬が飛出して、どちらを援けるともなく、毆り合ひが起る。福井は、體の小さい丈けに、あまりに力が無く、殊に、片足が自由にならぬ。一騎打ちでは、田中の敵でなかつた。

警戒の巡査は、忽ち猿家の前へ押かけて、双方を引分けようとしたが、彌次馬が多いので、どうする事も出來なかつた。

田中の配下に、氣の利いた奴があつて、猿家の表戸を下ろした。不運な福井は、そのうちに取籠められたから、壯士の爲めに亂打された。

『それツ福井を救へ』

とあつて、横濱の壯士は、どツと吶喊をつくりながら、猿家の表戸を打破り、トウ〳〵福井を救ひ出して、今度は、改進黨の壯士を、メチヤ〳〵になぐりつけた。

此騷ぎがあつたので、群集は、一しほ殺氣立つて、新富座の木戸を破りにかゝつた。巡査は必死になつて、之れを喰ひ止めよう、として、茲に巡査と、群集の格鬪が起つた。

福井は、此毆り合ひで、ひどく體を痛め、終に病院へはいるやうになつた。今では役者になつて、政界の事には、何の關係もなくなつて居るが、昔の福井には、斯うした事もあつた。著者は、福井とは親しくして居たのみならず、同じ横濱組の一人であつたが、此時には、新富座の中へはいつて居て、少しも此騷ぎを知らなかつた。

其日の事がすんでから、くはしい事を聞いて、如何にも憤慨に堪へず、此復讐は、是非とも仕なければならぬ、と考へて、其歳の暮に、宇都宮へ出かけた。栃木縣會の議長は、田中がなつて居て、改進黨の勢力は、いつも自由黨を凌いで居た。横尾輝吉といふものが、その牛耳を握つて縣會の事は、横尾の思ひ通りになつて居たので、いつも自由黨の議員は、血眼になつて爭ふが、どうしても勝てなかつた。

私は、宇都宮へ着くと、辯護士の中山丹次郎の家に泊つた。烏山といふ所に、黨の演說會があつて、中山は不在。

其他の黨員も重立つたものは、多く居らなかつた。

翌日、縣會議場へ行くと、自由黨の議員では、岩崎萬次郎が、たツた一人居たばかりで、外のものは皆な、改進黨の議員であつた。私は、先づ議長室へ入ると、田中が椅子にかゝつて居た。その傍らには、山口信二といふ議員が居て、何か知らぬが、しきりに話込んで居た。私の姿を見ると、二人は話を止めて、ヂロ〳〵私の顏を見て居た。

『田中君』

『何ですか』

『僕は、横濱の伊藤仁太郎であるが、君に少し談判があつて來たから、室外へ出て貰ひたい』

『今、忙しくて對手になつて居られない』

『イヤ、ちよツとの時間でよろしい』

『面會は出來ぬ』

『どうしても、出て來ないか』

『出ない』

『卑怯な奴だ。福井の復讐に來たのであるから、室外へ出て、勝負をしろ』

『貴樣等の相手にはならぬ』

『腰拔け奴ツ』

『何が腰拔けだ』

『馬鹿野郎ツ』

『馬鹿といふたな』

『馬鹿といふたら、それがどうだ、といふのだ』

『苟も縣會議長の我輩に對して、馬鹿といふたのは、勸辨相成らぬ』

『勸辨相成らぬ、といふのは、勝負をする氣か、どうだ』

『何を吐かす、生意氣な小僧がツ』

私は、田中の怒るのを見て、先づうまく行つたと思つて、一歩先に、室外に出よう、とするのを、山口が突然立つて、私の腕を捉へた。

『待てツ』

『何だ』

『議長を馬鹿といふたのは、議員を侮辱したのであるから、貴樣は、警察署へ引渡す』

『腕づくで連れて行け』

と言ひながら、私は山口を、力まかせに突くと、捉へて居た手を放して、尻餅をついた。之れを見て田中は、立上つて來た。

『亂暴をするかツ』

『亂暴は、彼奴の方から仕たのだ』

『もう勸辨せぬぞ』

田中は、斯う言ひ乍ら、室外へ出よう、とした。私は二つほど毆つて、田中へ組付いた。田中は、それを振りもぎつて、室外へ駈け出し乍ら、

『巡査々々』

と、大聲を上げて、廊下をかけてゆく。此時に岩崎が、やつて來た。

『君、どうしたといふのか』

『田中と山口が、亂暴を働くから、それに對抗したのだ』

『まアいゝから、はやく君は歸れ、あとは我輩が引受ける』

『それでは、賴む』

著者は、橋本政次郎といふものと、一しよに出かけた。その外に、同志の柏原勇藏が居て、三人は連れ立つて、議場の外へ出た。

中山の家へ歸つて、一と息吐いて居ると、巡査がやつて來て、警察署へ同行を求めた。私は、橋本と柏原に送られて、警察署へ出頭した。一應の訊問があつて、すぐ裁判所へ送られた。檢事の調べがすむと、拘留狀を示されて、監獄署へ廻され、未決監へつながれる事になつた。議會議員保護律といふ法律に觸れた、といふのである。私は、田中を『馬鹿野郎』と云ふたのが惡かつた、との事であつた。

其前年に、横濱の市會で、著者は、両井等と相談して、大暴れに暴れた事がある。その結果として、此法律が發布された。それに自分が引ツかゝつたのだから、因果應報とでもいふ所であらう。

當時の横濱市會は、地主派と商人派の二つに別れて、議員が鬪つて居て、いつも紛擾の絶え間がなく、市會の紛擾とさへ云へば、また横濱かと云はれるほどに、面倒な市會であつた。

地主派は、伏島近藏が率ゐて、自由黨に屬し、商人派は、小野光景、原善三郎、茂木惣兵衞、渡邊福三郎、來栖莊兵衞等が、之れを指揮して、改進黨に屬して居た。

三級の議員は、地主派が獨占し、一二級は商人派の手に在つて、數の上では、とても地主派が及ばなかつた。その代りに、鬪將は、地主派に多く、議場の爭ひは、常に勝目が地主派に在つた。

併し乍ら、頭數で採決するのであるから、鬪ひに勝つても、結局は、商人派に勝利を得られるのが例であつた。地主派は、關外に地盤が在つて、商人派は、すべて關内から出て居るのであつた。

横濱の中央を流れて居る大岡川の内外に依つて、此稱が別れて居た。開港の始めに、此川を境にして、關所が立てられてあつた。それが名稱の起りで、關内は、はやく開けて、貿易商が居り、富豪は、皆な此方面に住んで居た。人口の殖えるに從つて、土地は川の外側へ擴がり、田や沼を埋めて、宅地をつくり、家を建て、追々に繁昌してゆく。けれども、此方面には、中産階級の人が多く、關内の富豪には、比ぶべくもなかつた。そこで、市會が開けてからも、利害の關係は、關内と關外で、全く相違して居たので、常に爭ひは絶えなかつた。

著者の家は、關内の中央に在つたけれども、政黨の關係から、地主派に屬して居た。選擧の時分にも、地主派の爲めに、必死の應援をして居た。

地主派の議員が、どれほど奮鬪しても、結局は、數の上で負けるから、此上は、市會の議事を、不能に終らせ、解散の命令に依つて、改選の際に、死力を盡して、多數の議員を、得る外はないとなつて、いよ〳〵市會を蹂躙する、暴擧を企てる事に決した。豫算市會が開けるので、此機會を逸してはならぬと、同志のものは相談の上で、市會へ臨む。川村三郎、福島辰次郎、黒部與八等は、議席に着いて、さかんに商人派の議員と、論爭して居る。その潮合を謀つて福井は、瓦斯を消す役になり、著者は、議席へ、椅子を投げ込み、その他のものは、之れを合圖に、議員を片端から、毆りつける事になつた。瓦斯は消えて、眞ツ暗になつたから、敵か味方か、それさへ能く判らぬ。その時の騒ぎは、慘にひどいものであつた。

今の田健治郎が、警部長をやつて居て、急報を得て、多くの巡査を率ゐ、漸くかけつけた時は、既に亂暴したものは、逃げ去つて一人も居なかつた。

之れが爲めに、市會は解散されて、地主派の目的は達したが、選擧の結果は、矢張り商人派が多數であつた。

此事が原因となつて、議會議員保護律なるものは制定された。つまり著者等が、亂暴した爲めに、此法律は出來たのであるが、著者は、最初の違犯者として、所罰される事になつた。

宇都宮の裁判所では、佐久間長四郎といふ辯護士が、私の爲めに骨を折つてくれたが、重禁錮二ケ月の刑を受けた。著者は控訴して、東京の裁判所へ廻され、利光鶴松、山田泰造、高橋安爾の三人が、辯護の勞を執つてくれたが、原裁判を認められた。田中と山口は、證人として、裁判所へ出た。辯護士に難詰されて、二人の苦む狀を見て、氣の毒だと思つた。

それから二十年ほど經つて、田中が、代議士を罷めて後ち、社會主義者の福田英子が、訪ねて來て、斯ういふ事を申込んだ。

『田中正造さんが、ぜひ一度御目にかゝり度い、といふが、逢つてくれようか』

『逢ふも逢はぬもない、いつでも面會はするが、その用事は何でせう』

『實は明治廿二年の一條で、田中さんが今になつて、考へると、那んな事で、君を煩役にやつたのは、如何にも惡い事であつた、と思ふから、君に逢ふて詫たい、といふて居るのです』

『それは、意外の事だ、田中君が、さう思つてくれたら、僕は、面會するには及ばない。田中君は、實に立派な人だ、と敬意を表するまでの事で、逢ふ必要はないでせう』

『併し、田中さんが、さういふのですから、逢つて見たらどうです』

『逢ふことに差支へはないが、そんな他人行儀でなく、只だ逢ふて笑はうぢやありませんか』

『それでは、田中さんへ、その旨を通じます』

『宜しい』

福田は、それで歸つたが、二三日すると、

『田中さんは、谷中村の一條で、國へ歸つて居られるから、上京されたら案内します』

と、いふて來た。

然るに、著者は、九州へ行く、用事が出來て、終に田中に面會する、機會を得なかつた。

九州から、歸つて來ると、板垣退助翁から、使をうけたので、すぐ行つて見ると、矢張り福田の話と、同じ事であつた。田中は、よほど心がかりになつたか、板垣へも、此事を申込んだのである。所が、谷中村の一條が、ます〳〵切迫して、田中は、上京し得なかつた。著者も、多用の爲めに、田中を訪ねる事がならず、思ひつゝも日を過すうちに、田中は、終に死んでしまつた。

まことに惜い事をした。と、今でも思つて居るが、同時に、田中といふ人は、純眞な人間で、立派な心を持つた人だ、と思つて居る。

八

却說、新富座のうちは、鼎の沸くやうな騷ぎで、辯士が、演壇に立つとすぐに、妨害がはじまる。それを押付けようとして、改進黨の壯士が大喝するから、忽ち喧嘩になる、巡査が、之れを制止に出ると、喧嘩は、一層ひどくなり、滿場總立ちになつて、亂鬪が起るので、その度毎に、反對する壯士は、場外へ引出されるのであつた。

大概な演說會に、之れ位騷げば、中止解散を命ぜられるのであるが、此日の演說會は、兎に角、やり通させる、といふ方針で、警察官は、臨監して居るので、容易に解散を命じない。そのうちに、反對派の壯士は、或は引出され、或は疲勞し、とても最後まで、此妨害を、續ける事はむづかしい。三浦、氏家を始め、重立ちたるものは、棧敷裏の庭へ出て、相談をはじめた。

『どうしたものかな』

『これぢやア、仕やうがない』

『何とかして解散させなけりやア、我々の面目がない』

『何しろ、演壇へ、飛上る事が、どうしても出來ないのだから、解散には、なるまい』
『それでは、演壇へ飛上がらせようぢやないか』
『誰れにやらせよう』
『横濱連のうちに、誰れかあるだらう』
『我々では、顔を知られて居るから、那の青竹の手摺のうちへは入れないから、駄目だ』
『とに角、横濱連へ相談して見よう』
と、相談の末、三浦が、著者を呼びに來た。
著者は、早く場内に居て、騒いで居たので、三浦に連れられて、氏家等の居る所へ行くと、演壇へ飛上るものはないか、といふ相談をうけた。
『藤野はどうだらう』
『うむ、彼れならよからう』
『たゞ本人が、果して引受けるかどうか、判らない』
『まア兎に角、相談して見る事にしよう』
『それでは、すぐ呼んで來よう』
埼玉縣の生れで、藤野富之助といふ壯士があつた。文字の非常に巧い、岩谷一六の書風を其儘に、綺麗な字を書くので、同人の間には、よく知られて居た。
色の白い、見た所の柔和な、誰れも壯士と見るものはない。只だ酒を飲むと、亂暴になつて手がつけられなかつた。
一同から藤野へ、いろ〳〵と頼み込んだ。
『宜しい、やツつけよう』

『そりやア有難い。ぜひやつてくれ』
『その代り、一升ばかり飲ませてくれぬか』
『何とか都合しよう』
『酒でも飲まなけりや、ちよツと飛上り難いからな』
『道理ぢや』
話は纏まつて、三浦は、客扱ひの出方に、懇意のものがあるを幸ひ、酒を、一升、手に入れて、藤野に渡した。
晝飯も食はずに、二三時間は叩き合ひをつゞけて、居たので、充分に空腹になつて居た所へ、冷酒を一升、一と息に引ツかけたのだから、忽ち醉は出て來た。
演壇には、飯塚某といふ男が立つて、さかんに起る野次と應戰しながら、自由黨を罵詈して居る、舞臺際には、澤山の巡査が垣をつくつて、警戒して居るのに、其間を一人の壯士が、飛鳥の如く、かけ上つた。
演壇に飛上ると、飯塚を逆落しに、突落した。
『わツ』
と、吶喊が起つて、滿場は總立ちとなつた。
辯士を突落したのは、例の藤野であつた。テーブルを取ると、一と振り振つて、臨監席へ投げつけた。同時に、横手の門へ、氏家が、怪力を現はして、大きな石を投げつけたから、貫抜は折れ、錠前は飛んで、扉は、左右へ開いた。
今迄、入れずに居た群集は、なだれを打つて込み入る。そのうちに、壯士が入つて來て、煉瓦や石を投げながら、亂闘をはじめたので、如何に巡査が、ふむ張つても、もう防ぐ事は出來ぬ。
藤野は、高手小手に縛られて、巡査に擔ぎ出される。それを奪ひ返さう、として、巡査に打つてかゝつた。會場の内外は、修羅の巷にひとしく、負傷するものも少なからず有つた。事態、茲に至つては、もはや如何ともなし難く

臨監の警部は、

『中止解散』

を命じた。どこともなく『自由萬歳』の叫びが起り、わツ〳〵といふ騒ぎであつた。

辯士の歸途を襲ふて、毆らうとして待合せるものがあり、巡査と叩き合つて、つれて行かれるものがあり、解散後の新富座前は、猶ほ潮の如く群衆が、押しつ返しつして居た。

九

演說會が解散されて、すぐ聽衆が歸つてしまへば、それまでの事であるが、敵も味方も、非常に興奮して居るので、會場の附近は、群集で、揑ね返へして居る。數百の巡査が、高壓的に解散させよう、とするので、それに對する反抗から、各所に搏鬪がはじまつた。

改進黨の連中は、追々に引上げて、新富座の樂屋には、演說掛りのもの丈けが、殘つて居た。會主の角田眞平も、無論殘つて居た一人である。角田は、駿州沼津邊りの出身で、沼間守一の玄關番から、代言人の試驗に及第して、先づ横濱に開業し、それから東京へ移つて、その頃では、人氣者の代言人であつた。男振りもよく、辯舌にも巧みで、小手先きの利く、才子肌の人であつた。女にかけては、一流の凄腕を、有つて居て、相應に艶聞を唄はれたものである。

『先生、座外は大變です。とても無事には出られません』

と、角田の書生が、忠義振りの報告をした。角田は、少し考へて居たが、書生に向つて、

『汝へ、裸體になれ』

『えツ、裸體になるンですか』

『その衣物を脱いで、我輩に貸せ』

『ヘイ』

先生のいふ事であるから、書生は、强て拒むこともならず、すぐに着物を脱いだ。そのうちに、角田も、洋服を脱いで、書生のと着替へた。

『どうだ、似合ふだらう』

『ヘヽヽヽヽヽ』

『我輩は、之れで歸るから、汝へは、我輩の洋服を着て、那の俥で歸れ』

『ヘイ』

書生の冠つて居た、汚ない麥稈帽を冠ると、その儘に樂屋口から、出て行つた。

角田は、斯うした變裝で、無事に、敵の包圍を脱して、引上げる事を得たが、後に殘された書生は、今日の騒ぎで、思ひ設けぬ洋服姿になり、而かも、先生の俥に乘つて、歸れる嬉しさに、意氣揚々として、新富座の横手まで來ると、群集を、押分けて出た、四五人の壯士が、はやくも俥を取卷いた。

『貴樣は、角田眞平だなツ』

『イエ、僕は異ひます』

『馬鹿ツ』

『ヒヤー』

俥が引つくり返へされると、書生は癇叩きになつた。巡査が駈けつけた時には、壯士の姿は、既う見えなかつた。

新富座の前を、北の方へ行つて、すぐ左りへ曲ると、例の萬安といふ、料理店が在る。その少し手前に、鴨南蠻と

書いた、看板を揭げて居る、可成り古い蕎麥屋が在つた。氏家、三浦、早見、北村、北山等の壯士は、之れへ引上げて、吸種か何かで、一ぱいやつて居る。彼是れ十五六人も居るのだから、その賑やかさは一と通りでない。少し遲れて、其家へ、はいつて來たのは、井上角五郎であつた。今日の騷ぎに、自分が、會計をやつて居たので、梅林から引上げるのが、一番遲くなつて、歸りがけの空腹に堪へられず、大急ぎで駈け込むと、氏家等が居たので、惡い所へ來合せた、とは思つたが、今更ら逃げ出す事もならずに、ちよツと躊躇つて居た態を、はやくも見付けた一人が、

『やア、井上先生ッ』

と、聲をかけたので、もう遁れぬ場合と覺悟して、

『豪傑揃ひで、御壯んですな、ハツハ、、、、、』

例の顏で、相格を崩して笑つた。

氏家は、井上から、吉原行きの金を、せしめようとして、搜し廻つたけれど、混雜の際とて、井上の姿が見えなかつたので、止むを得ず、蕎麥屋へ引上げて來たのだ。所へ、井上の方から、飛込んで來たのだから、もう何んな事があつても遁さない。一列の眞ん中へ、席を設けて、井上を取卷いてしまつた。

『どうです、今日の騷ぎは……』

『諸君の奮鬪で、到頭解散になつたのは、實に痛快だ』

『それさへ認められたら、我輩等は大滿足ですが、井上先生の指揮も、頗る宜しきを得たのです』

『さう云はれては、却つて恐縮する』

『時に、先生へ賴みがあります』

『何ですか』

『少しばかり願ひ度い。これから北廓へ行かう、といふのですから、然るべく御手加減を、願ひ度い』

『宜しい』

井上は、手提の小カバンを開き、紙幣の束を出して、氏家に渡した。誰れか知らぬが、頓狂な聲を張上げて、

『萬歲ッ』

と叫んだ。

所へ、バタ〳〵と駈込んで來た奴がある。それは三浦の配下に屬する、壯士の一人であつた。

『今、加藤政之助が、歸る所です』と、いふのを聞くと、一同に立上つた。

『それッ、やッつけろ』

井上を、一人殘して、皆な駈出した。

加藤は、抱車に乘つて、猿屋を出かけた。それを見付けて、はやくも三浦に報告したので、一同は、戶外へ出ると、散々になつて物蔭にひそんだ。

永い夏の日もくれかゝつて、夕雲の深く垂れる頃であつた。群集は、すでに四散して、稀れに物好きな輩が、ブラブラして居るのみであつた。

俥の後からは、加藤の弟が、兄の身を氣遣ふて、從いて來る。物蔭から飛出したのは、北村と北山であつた。

『待てッ』

と、聲をかけて、俥の幌に手をかけた。加藤は、身を跳らして、俥から飛降りたが、すぐ前の荒物屋へ、靴穿きの儘かけ込んだ。北村と北山が、その後を逐かけよう、とした時、加藤の弟が飛付いて、之れを遮ぎつた。之れを見ると、早見が左の手に、其奴の首筋を、引ツ掴んで、右の手に持つた、樫齒の下駄で、力まかせに頭を打つた。

『ウーン』

後頭部から血が、、、さッと噴き出した。

其間に、加藤は、どこかへ逃げてしまつたので、一同も引上げた。巡査が駈けつけたけれど、一人も捉まらなかつた。

蕎麥屋から、出て來た壯士だ、といふので、警部や巡査が、蕎麥屋へはいらう、とする時、井上が勘定をすませて、出かける所であつた。

『ちよツと、おまちなさい』

『何ですか』

『あなたは、井上先生ですな』

『左樣です』

『今、此家から出た壯士は、あなたが、連れて來たのですか』

『イヤ、さうではない』

『併し、一しよに飲食はして居たのでせう』

『左樣です』

『然らば、連れでせう』

『連れといへば、連れです』

『みな、自由黨の壯士でせう』

『どうだか、よく知らない』

『あなたほどの御方が、なぜ曖昧な事をいふのですか』

『別に曖昧な事はいはぬ』

『然らば、壯士の氏名をいふて下さい』

『それは知らぬ』

『一緒に飲食までもしながら、氏名を知らぬ、といふのは可怪しいぢやありませんか』

『知らぬものは、知らんのです』

『それでは、御同道を願ひませう』

『どこへ行くのですか』

『京橋警察署へ……』

『えツ、警察署へ行くのですか』

『あの壯士が、加藤政之助氏の令弟を打つて、重傷を負はせたのです』

『ふふーむ』

茲に於て、井上は、頗る窮した。自分の關係しない事ではあるが、さう聞いて見れば、いよ〳〵以て氏名をいふ事は出來ぬ。それが判然しなければ、連れて行く、といふのも無理はない、と思つた。迷惑千萬ではあるが、どうも止む事を得ぬから、とに角、警察署へ行つてから、辯疏しようと極めた。

加藤と井上の事について、少しく云ふて見たい、と思ふ。大正十年の總選擧には、加藤が落選して、井上が當選して居る。其次の總選擧には、井上が落選して、加藤が當選した。その對照が、頗る面白い。殊に、此二人は、古い人として世に知られ、どちらも、六十の坂を越えて居る。實を云へば、此二人が、代議士になると否とが、國家の上に、何の影響も持つて居ないのだから、どうでもよいやうなものではあるが、一時は相當に、活躍した時代もあつて、古き政客のうちでは、屈指の人であつた丈けに、少し云つて見たい氣もするのである。

井上の鄕國は備後であるが、加藤は、武州の生れだ。どちらも慶應義塾の出身で、加藤が、報知新聞の記者であつた頃、井上は、すでに朝鮮へ渡つて、金玉均や朴泳孝に附いて、明治十七年の變亂を、惹起して居る。

私が、加藤を知つたのは、明治十五年頃、西洋穴探し、といふ書物を著して、極めて淺薄なものではあつたが、ヨーロツパの風俗を、内面的に知らせてくれた時代であつた。其頃の加藤は、新聞記者としても令名があり、相當に青年の信者を、有つて居たが、大阪の新聞社へ移り、再び東京へ舞戻つた頃、あの美しい妻君を、連れて來て、それから後、青年の間に、非難が起つて、餘り持囃されなくなつた。はやくから代議士にはなつたが、議會の政客としても、左迄に珍重されず、たゞ古い人として、埼玉縣内には、多少の信用を維持して居た。

近年、頓に意氣も衰へ、舌の人でもなければ、筆の人でもなく、況して手腕の人とは思はれず、單に議會に、列するに過ぎなかつた。

加藤の平凡に比べると、井上の經歷には、頗る浮沈があり、同時に、毀譽が伴つて、よほど面白い所がある。前にも云ふた朝鮮京城の變は、有名な天津條約の原因になつたほどの事件で、井上の生涯を通じての大活動であつた。

此事件について、井上が、伊藤博文等を、攻擊した爲めに、官吏侮辱罪に問はれて、市ケ谷監獄に、一年の苦役を勤めた事などは、今の人の多くは知るまいが、當年の井上は、實に憂國の志士として、洽く知られたものである。著者が、最もよく彼れを知るやうになつたのは、その頃からであつて、殊に、大隈條約に對する、中止運動をやつた時分には、一しよに演說もしたり、遊說にも出かけたりして、相應に親しくして居たゝ、議會が開けるやうになつてから、彼は、いつしか政府黨になつてしまつたので、自然に遠ざかつた。

けれども、彼は加藤と異つて、才氣縱橫の人であつたから、政府黨で終始するやうな、馬鹿な事もなく、民吏兩黨の使ひ分けは、鮮かにやつたものである。殊に、頭腦は明晰で、辯舌には一種の力があり、議會の演壇に、二日續きの長廣舌を揮つて、吏黨の爲めに、萬丈の氣を吐いた事は、今も猶ほ、記憶に存して居る位だ。

伊藤博文が、新政黨をつくりにかゝつた頃から、伊藤の傘下に、走せ參じて、政友會の一人としても、相當に力を示した。自由黨が、政友會になる前、國政黨と稱した時代がある。その頃に、田鶴治郎も、兵庫縣選出の代議士とし

て、黨の一人であつた。

北海道の炭礦鐵道に、手を出して、巨萬の富をつくつた彼は、ひそかに田と結び、東北の重野謙二郎を引入れ、關東の石坂昌孝を、之れに加へて、黨中別に黨を樹てよう、と企てた。それが、計畫の半ばに顯はれて、三人共に、除名處分をされた事がある。それから後ちの彼は、政友會員として、長く代議士の椅子を保つて居たが、信用は、餘り香しくなかつた。

それから數へても、殆んど二十幾年、彼の政治生活は、決して短いとはいへぬが、ムト金輩の後塵を拜つて、碌々として居た。最近に至つて、政友會の分裂に際し、吏黨の本性を現はし、脫走組に加はつて、足輕の役目を樂まうとしたが、それも水泡に歸して、落選の憂目に逢ひ、初期以來、つゞけ來つた議席を、失ふに至つた。いづれにしても、現今の時代は、加藤や井上を、必要としない。井上の落選は、寧ろ當然の事で、利口な井上は、是れを以て、潔よく政界から退くであらう。加藤の當選は、是れも最後でなければならぬ。

京橋の大根河岸に在る、今の警察署へ、新富座から連れて來られたものは、彼是れ二百人に近く、狹い拘留所に、それ丈けの人數が、はいれる筈はない。素門を締切つて、裏門から出入するやうに、なつて居た。

構内一ぱいに、詰まつて居るものは、興奮し切つて、事毎に、巡査と衝突する。巡査も、手を束ねて、彼等の怒罵嘲笑するに、任かせる外なかつた。最後に、連れて來られたのが、井上角五郎であつた。一般の拘留人と、同一の取扱ひはせぬつもりでも、何しろ署内一ぱいの拘留人で、殆んど空地もない位であるから、特別の取扱ひを、爲ることは出來なかつた。

一同は、井上の姿を見ると、どツと吶喊をつくつて、誰れか分らぬが、

『萬歲ツ』

『井上君、萬歳ッ』

と、叫ぶものがあり、之れに相和して、拍手が起つた。

警戒の役に當つて居る、一人の巡査が、

『これツ、萬歳なんて何だ。そんな事を云ふては、いかんよ』

警察署の拘留所で、後から連れて來られたものを歡迎して、萬歳を叫ぶなどは、勿論よくない事だが、かゝる場合に、そんな事を、彼是れ云ふて制止しようとしても、駄目な事は、知れ切つて居る。

『何だ、何が悪い』

『萬歳をいふたのが、何故悪いか』

『馬鹿巡査ッ』

『萬歳々々、大萬歳、ハツハ、、、、、』

例の巡査は、烈火の如くなつて怒つた。

『そんな、不謹愼な事をいふのは、誰れか』

『我輩だ』

『我輩とは、誰れだ』

『我輩とは、我輩のことだ』

『ハツハ、、、、、』

『これへ出ろ』

非常識な巡査は、斯ういふ騒ぎの中で、騒ぐものを捜し出さう、とするのだ。

柔道二段の篠崎が、その巡査の背後から、喉を扼して、ぐツと締めつけた。巡査は、呼吸が塞つて、ぐたりとな

つた。篠崎は、ニヤ〳〵笑ひながら、しづかに巡査を寢かした。ワツ〳〵と騒ぐものを制して、篠崎は、

『願ひます〳〵』

『何だ』

『急病人があります』

『急病人は、どこか』

『こちらです』

別の巡査がやつて來た。

『此人が、急に倒れました』

『ふふーむ』

よく見れば、同僚の巡査だ。

『これは大變だ』

と云つて、駈けてゆく。大勢は、また吶喊をつくつて、どつと笑つた。

吉原へ繰込んだ、氏家等は、翌朝になつてから、井上の拘引された事を知つたので、とに角、表神保町の本部へ引上げて來た。

『さア、どうする、井上を、其儘にして置いては相すまぬぞ』

氏家が、先づ口を切つて、それから各自に、意見を吐いた。

『どうせ、誰れか犧牲になる外はない』

『まさか、早見を出す譯にもゆくまい』

『さうだとも、妻子のあるものをやることは出來ぬ』
『誰れにしようか』
『誰れでも行けば、よいぢやないか』
『それだから、誰れにしようか、といふのだ』
『しばらく行かなかつたものが、行くことにしたら、よからう』
『御無沙汰して居たものは、誰れだ』
之れを聞いて居た、早見は、苦笑ひをしながらいふた。
『北村と北山が、しばらく行かないぢやないか』
當然、行く可き筈の本人が、斯ういひ出したので、一同は、手をうつて、笑ひ轉ける。
北村と北山は、頭をかきながら、早見の方を見た。
『オイ、仕方がないから覺悟しよう』
と、北山がいひ出した。
『うむ』
北村が、輕く首肯いたから、それで自首するものは、決まつた。流石に、早見も、氣の毒に思つたか、
『己れが一ぱい買はう』
と、いふた。
『此處で飲むよりか、牛屋へ行かう』
『よからう』
『兩人とも、腰に拔けるほど飲め』

一同は揃つて、牛肉の松本へ、行く事になつた。
其晩、北村と北山は、京橋警察署へ、自首して出た。一應の訊問がすんで、すぐ檢事局へ送られた。井上は、同時に放免される事になつた。裁判所へ、廻された兩人は、僅に二十五日の重禁錮に處せられたが、直に控訴の申立をして、保釋を許された。
控訴裁判では、北山丈けが有罪で、北村は、無罪になつた。
北村も、北山も、數年前に死んだ。氏家も早見も、今は故人になつた。
昔の政治運動には、斯うした面白い事があつた。今の政治運動とは、大分趣きが異つて居る。
新富座の演說會が、騷擾の爲めに中止解散された、といふことは、地方へ強く響いて、條約中止の運動に、一層の氣勢を添へた事は、固よりいふ迄もない。

一〇

新聞の勢力は、頗る强いものではあるが、未だ明治廿二年頃は、昨今のやうに、其勢力は普遍的のものでなく、一般の人の新聞慾も、極く狹く、且淺いものであつたから、獨り新聞の力のみで、輿論を引起す事は、些とむづかしかつた。殊に日本新聞の陸羯南は、一代の文豪で、その人格も、立派な人ではあつたが、一般の俗受けをするやうな、卑近なものは書かなかつた。知識階級を、動かす力は、充分に有つて居たけれど、低級の人には、頗る不向であつた。
東洋新報の朝比奈碌堂も、陸と相並んで、一世の文豪ではあつたが、之れも却々にむづかしい、文章で、誰れにも讀める、といふ低いものではなかつた。
其他の新聞にしても、單に論說のみの力に依つて、世を動かすといふ事は、甚だ頼み少なき事であつた。どうして

も低級の人に向く、雜報の記事に依つて、煽りつける外はなかつた。

久松座の演說會が、三日間も續いて、空前の盛會であつたといふ事、それから、新富座の演說會は、僅に一日丈けで、叩き潰されてしまつた、といふ事、此二つの記事がいづれも相當に誇張されて、面白く且壯烈に書いてあつたのは、少なからず地方の人心を唆つて、大隈條約の評判のよくない事は、實にひどいものであつた。

今の法學博士、花井卓藏といふ人は、その頃、未だ駈け出しの辯護士で、餘り廣くは、人にも知られて居なかつた。私立大學の出身から、法學博士になる、といふ事は、昨今でこそ珍らしくもないが、昔は、ナカ〳〵容易な事ではなく、小河滋次郎といふ人が、監獄の事について、博士に拔かれた外、あまり多くは居なかつた位である。

花井の法學は、どれほど深いものであるか。それは能く知らないけれど、兎に角、刑法學の權威として、博士の肩書を得た事は、實に私立大學の誇りであつた。法廷の辯論は、長いので評判になつたが、一辭一言 苟もせぬ所が彼の特色であつて、徒らに長い時間、辯論に堪へる事のみが、彼の得意ではないのである。

大隈條約で、世間の騒がしくなつた時、淺草の井生村樓に於て、法律經濟專門の若い人達が演說會を開いた。その際に、花井も辯士の一人として出席したのであるが、演題は條約改正斷行論、といふのであつた。

『どうです、馬鹿な奴もあるものですな、此花井といふのは、全體どういふ奴ですか』

『何でも、代言人だといふ事ですよ』

『へへー、代言人ですツて、どうせ、ヘボ代言なのでせう』

『三百に毛の生えた位のものですからな』

『今度の條約を斷行しろ、といふのですから、大隈の廻し者でせう』

『まア、さうでせうな』

『那んな條約を斷行されては堪りませんが、此花井といふ奴は、日本の國家を、どう思つて居るのか、實に怪しからん事です』

『さうですとも、怪しからんです』

『演壇へ立つたら、叩き落してやりませう』

『それが宜しい』

聽衆は、それ〴〵に話合つて、花井の演壇に、立つのを待つて居る。斯んな場合に、うつかり出たら、どんな目に逢ふか知れぬ。辯士は四五人、すでに演說を了つて、やがて花井の出る番になつた。

頭髮は、割合に長く、櫛の齒の入らぬほど、ムシヤクシヤになつて、色の黑い、口の大きい男が、衣物の襟は、無造作に擴げて、見た所、甚だダラシのない風采であつた。それが花井である、と判つたから、聽衆は一時に騒ぎ立つた。

『諸君、我輩は、花井卓藏であります』

『ノウ〳〵』

『我輩は、花井……』

『ノウ〳〵』

『花井であると、いふのに、ノウ〳〵とは何ですか』

『ノウ〳〵』

『馬鹿ツ』

『引ツ込め』

その騒ぎは非常であつたが、花井は、少しも屈せずに、猶ほ辭をつゞけた。

『演題は……』

『ノウ〳〵』
『條約……』
『ノウ〳〵』
『斷行論といふのであります』
『ノウ〳〵』
『引ツ込め〳〵』
『馬鹿ツ、だまれツ』
流石の花井も、演壇に、立往生の態であつた。發起人側の或者が、之れを見兼ねて、飛上つた。
『諸君、ちよつと靜かにして下さい』
『なんだ〳〵』
『花井君は、新進の代言人であります。何か深い考へがあつて、此演壇に立つたものと思ひますから、とに角、一應は其說を聞く事にしたら何うですか』
『その必要は認めない、外の辯士を出せ』
『まア、さう云はずと、花井君に、五分間を與へて下さい。それでも諸君の意に充たねば　すぐ發起人側から、中止させます』
此時、聽衆のうちから、一人立つて、
『發起人側の、穩當な相談に應じて、花井に、五分間やらせて見ようぢやないか』
と云ふものがあつた。
『ビヤ〳〵』

『贊成々々』
これで騷ぎは、一と先づ鎭まつて、花井は、しづかに聽衆に向つた。
『諸君の宏量を以て、我輩に、五分間を割愛して下された好意を、玆に感謝いたします。
諸君、我輩は、現在の條約を以て、甚だ不對等なるものと見て居るのであります。かゝる條約は、速かに改正して對等の條項にしなければならぬ、といふ事を確く信じて居るものであります。然るに、條約の期限が、滿了して居るにも不拘、覆幕時代の不對等條約が、今日まで、行はれて居たのは、如何にも遺憾千萬の儀と存じます。我輩は、玆に改めて斷言いたします。現行條約は、不對等のものでありますから、速に對等の條約に、改正をなす可きものである、と信じて居るものであるから、從つて、大隈條約の如き、不對等極まるものには、斷じて贊成は出來ないのであります。條約改正は、斷行す可きものであるが、不對等の改正であるならば寧ろ爲さゞるを以て可なりとするものであります。此意味に於て、我輩は、大隈條約に對して、反對せんとするものでありますから、先づ其意見を述べる事にしませう』
聽衆は、片唾を嚥んで、花井のいふ所を、聞いて居たが、いつか其辯舌に引付けられて、靜かに傾聽するのであつた。約一時間餘りの演說は、無事に了つて、壇を降る時の喝采は、會場が、搖ぐほどであつた。
『どうです、うまいもんですな』
『大した辯士だね』
『私も、大概は、斯う出るだらうと、察しては居たが、何しろ演題が、那の通りだから、少し變だと、思つた』
『歲も、未だ若いやうだが、彼れは賣出しますぜ』
『何か事件があつたら、持ち込んでやりませう』
初めの騷ぎに引換へて、跡の評判は、頗る良かつた。花井が、人に知られたのは、全く是れからであつた。多少は

奇矯を衒つた傾きはあるが、それにしても、上手な、やり方であつた。

一こ頃は、墺國大使にまでなつて、外交官のうちでも、毛色の變つた人として、相當に知られた、秋月左都夫がその時代に、ベルギー公使館に、勤めて居た。ロンドンタイムス紙上に、大隈の條約案が、載せられたのを見て、非常に憤慨の餘り、政府の許可を得ずして、日本へ歸つて來た。

外務省へ出ると、大隈外相に面會して、條約改正中止の意見を述べた。大隈も、初めのうちは程よく扱らつて居たが、秋月の議論が、却々強く、大隈の方が、受け太刀になつて來たので、

『君は、誰れの許しを得て、歸朝したのであるか』

と、急所を衝いて、論鋒を避けようとした。

外國へ、派遣されて居る役人が、政府の許可を得ずに、勝手に歸つて來るといふやうなことは、殆んど例のない事で、懲戒處分せらる可きほどに、不都合な事である。

『誰れの許可も得ません』

『何故、さういふ不都合な事をする』

『國家の大事に際しては、そんなことを考へて居る暇がありません』

『始末書を出して、退りなさい』

『宜しい。始末書は出すが、條約の方はどうなりますか』

『さういふ事は、答へぬ』

『ハツハ、、、、、大臣も弱つたな』

『何といふか』

『まア、宜しい』

秋月は、ぷいと立つて、室外へ出ると、すぐに辭表を出してしまつた。斯うした事情から、秋月の免職は、殆んど極まつて居たのであるが、大學以來の親友であつた、牧野伸顯が、しきりに盡力して、辭表を撤回させ、且つ大隈を宥めて、遂に事なきを得せしめ、秋月の首をつないだ。

當時の法制局長官は、井上毅であつた。單に學者としても、世に立つ事を得る人で、今迄に、此椅子に倚つたものは、誰れ一人として、井上を凌ぎ得るものはなく、後には文部大臣になつて、劃合にはやく故人になつたが、啻に文章が巧かつたばかりでなく、憲法の制定についても、非常に功勞の有つた人である。

憲法の第十九條には、明かに『日本帝國の臣民にあらざれば、官吏になる事を得ぬ』と記されてある。所が、大隈の條約案に據ると、『外國人を、大審院の法官にする』といふ事があるので、たとへ、其條約は締結されるとしても憲法に抵觸する點は、どうしても實行されぬ事になるのだから、甚だ不都合な條約案であつた。井上は、此點について深い研究をした後、大隈外相へ、遠廻しに注意をしたが、さらに大隈は反省しさうもなかつた。

何事にも眞面目な人であつたから、大隈の冷然たる態度に對しては、甚だ不滿を抱いた。此上は、自ら大隈に向つて、所信を述べ、此一項は案文のうちから、削除させるの外はないと、考へた。

憲法が制定されたのは、明治天皇の大命に依り、伊藤博文、末松謙澄、金子堅太郎、伊東巳代治等の人々が、長い間かゝつて、研究した結果であるが、其文章は、主として井上の書いたものである。從つて、憲法に對する、井上の態度は、平生から忠實なものであつた。殊に、斯くの如き、大切な問題について、井上は、相手が外相だからといふて、沈默して居る事は、どうしても出來なかつた。

『閣下の條約案に、外人を法官に任用する一項があるのは、どういふ次第でありますか』

『治外法權を撤回し、領事裁判を廢めさせるには、此位の事は、止むを得まい』

『我國家の體面は、それが爲めに立派なものにはなりませうが、外人を法官に任用する事は、憲法に抵觸しますから

實行不能になりますが、此點は、どうお考へになりますか』

『歸化權を與へて、法官になる外人を、日本人として扱へば、少しも差支へはない』

『併し、歸化權を、外人に與ふるには、少なくも十年以上、我國に定住して、風俗習慣言語すべてがことが、日本人と同樣になつて、我政府の政治法律に、心服したものといふ見込みが立つて、さらに本人には、我國民として、我國家の爲めに、忠實なる可き旨の宣誓を、爲さしめてからでないと、歸化を許さぬ事になるから、閣下のやうな事を仰せられても、すぐの間には合ひますまい、從つてその改訂した、條約の效力も、疑はれる事になりますのみならず、その條文が、既に憲法に牴觸する以上、如何に談判を進められても、何の甲斐はありますまい』

『イヤ、それは、君の見解であつて、我輩には、別に意見もあるから、此儘談判は、進めるつもりぢや』

『憲法牴觸の一項は、どうなさる御覺悟か』

『君のいふ所は、法律一點張りで、外交の事は、左樣いふものではない』

『たとひ、外交の事でも、條約と憲法の牴觸は、實に容易ならぬ事でありますから』

『もう宜しい、それで解つた、君と議論するのは、詰まらぬ事ぢや』

『此上は、何も申しませぬ』

『我輩も、聞き度くない』

誠意を以ての忠告も、終に容れられなかつたので、眞面目な井上は、之れで本當に怒つてしまつた。

彼が、一篇の奏文を認めて、辭表を捧呈しようとしたのは、此時の事であつた。それは、伊藤の爲に、抑へられて中止はしたけれど、大隈に對しては、死ぬまで信用を、有つて居なかつた。

條約反對の九團體は、それ〴〵に手分けをして、地方遊說に出かけた。到る處の演說會は、實に盛況を極めて國民

の憤慨は、殆んど頂點に達した。大阪の小田垣哲夫郎が、櫻之宮に大運動會を催して、張拔きの大きい熊をつくり、その首に繩をつけて、市中を引廻した上、火刑に行ひ、大喝采を博したのは、全國へ評判になつて、その眞似をするものが追々に、多くなつて來た。

小田垣は、既に故人になつたが、今の大阪朝報といふ新聞は、彼の力で興されたものである。日野國明が、未だ若い頃で、その雄辯を、大阪人に知られたのも、此時の事であつたが、辯護士としても今も猶ほ、人氣を集めて居るのは、さすがに偉いものだ。

政府を建白攻めにして、條約を中止させよう、としたのも、頗る面白い考案であつた。地方の有志が、その受持ちを定めて、條約改正中止の建白書をつくり、之れに委任狀を添へ、澤山の人に、署名捺印させて、總代のものが携へて、東京へ出かけると、外務省へ、出頭して、大臣に面會を求める。一日に幾組となく押掛けるのであるから、役人の方では、之れを五月蠅い、と思つても、止むを得ず相手になる。是等の人を、ほどよく取扱つて、逐ひ歸すことが、頗る面倒な仕事の一つであつた。

熊本縣の建白書には、五萬人以上の署名があつて、委任狀は、長持に容れて運ばれた。恐らく我國に、建白書の事があつて以來のことであらう。地方の都會から、實業家の建白書が、出て來た。農民の政治思想は低級でこそあつたけれど、相當に熟の高いものであつたが、其他の所謂、實業家なるもの、政治思想は、更に振はなかつた。その實業家でさへ、建白書を提出するやうになつたのだから、條約反對の氣運は、可成りに熟して來たものと見てよからう。

大隈は、どことなく茫漠として、捉へ所のない、大きな型の政治家ではあつたが、すべて斯ういふ風の人には、矛盾の多いもので、自由解放を唱へながら、存外に壓制もやれば、自己の都合によつては、思ひ切つた束縛も、やる事がある。

條約反對の氣勢が、一日々々と高くなるにつれて、激しい議論をするものが、漸く殖えて來たのを見ると、言論の

壓迫をはじめた。

平生の主張からいへば、言論の自由が、大隈の生命とも、いふ可きであるのに、却てひどい壓迫を加へたといふのは、驚く可き事ではあるが、其處は、大隈の得手勝手で、よく此人の性格を知るものは、別に不思議ともして居なかつた。新聞の發行停止、演說の中止解散、その度數からいつても、また其遣口から見ても、此時代が、一番、ひどかつた。

當時の集會條例は、ずゐぶん壓制なものであつたが、それにしても、婦人の傍聽は禁じてなかつた。然るに、婦人が政談演說を聞く事を禁じたのは、彼が二度目の外相の時であつた。

その事は、大隈の心から出たのか、どうかは判らないが、とに角、大隈が外相として、內閣に列して居た時に、此事が行はれたとすれば、其責任は、免れ得ぬものと思ふ。

然るに、その後になつてから、大隈は、『婦人に政談を聞く事を禁じたのは、甚だ非文明の事であつて、怪しからぬ』と、いふて居る。實は自分が、內閣に居た時、之れを決めたのであつて、恰も他人の爲したる事の如く、いふて居るのだから、無責任も甚だしい。

どれほど、言論の壓迫を、行つた所で、之れまでに高くなつた、反對の氣勢は、とても、挫き得るものではない。全國を通じて、津々浦々の端に到るまで、條約反對の聲は、漸くさかんになつて來た。殊に秋月や、井上の事が、どこからともなく、知れて來たので、一般の反對は、彌が上にもはげしくなつて來た。

それにも不拘、大隈は、飽迄もやり通さう、とするので、不穩の企てをするものが、壯士の間に、起つて來た。要するに、大隈を、暗殺しようとするのであつた。暗殺の善事でないことは、誰れも知つて居るが、強い權力を、有つて居るものが、民意を容れないで、飽迄、我意を、押通さうとする時には、どうしても是れより外に、方法はないもの、とされて在る。殊に、議會は、未だ開けて居ない時の事とて、血氣の壯士が、此逆手を取つたのも、實は止むを

得ない事として、先輩も、許して居たのである。

警視廳には、斯ういふ事についての搜索機關があつて、少なからぬ機密費も、使はれて居るのであるが、割合に手拔かりが多く、世間で思ふほどの、搜索の手も屆かぬのが、その平生であつた。

演說會や、示威運動の邪魔をするのと異つて、此方面の仕事は、並大抵の智慧や分別では、ちとむづかしいものである。

一一

條約改正は、國家的問題であつて、政黨の立場や、個人の感情から、その是非を論ず可きものではない。國民一般の問題として、公正な見地から、取扱ふ可き筈のものである。

けれども、世間の事は、多く感情に依つて支配される。若し單純な理論にのみ囚はれて、問題を取扱はう、とした、ら、必ず失敗を取る。

大隈の條約案に反對したものは、改進黨員を除いて、國民の全體ではあつたが、そのうちには、之れを利用して、改進黨に、大きい傷をつけようとしたものもあつた。大隈と板垣の感情が、極端に、スレ〳〵であつた事や、自由、改進の兩黨が、恰て仇讐の如き、關係であつた事や、一個の政黨として、見る事は出來ないが、保守的思想の持主たる、國權派の連中が、平生から改進黨員の、ハイカラ振りに、業を煮やして居た事も、慥かに、大隈反對の氣勢を、高めた原因の一つとして、之れを見るのが、當然であらう。殊に、自由黨員が、非常な努力を以て、之れを問題にした働きは、實に大いものであつた。反對聯盟は、九つの團體から成立したのであるが、そのうちでも、自由黨の力は一番に強く、全國に三十萬の黨員を、有して居た丈けに、都歸到る處、其活動は目覺ましく、反對運動の中堅勢力であつたことは、何人と雖も、否むことは出來なかつた。

演說會や親睦會が、各所で開かれる時、いつも自由黨員の顏が、見えぬ事はなかつた。議論は何うであらうとも、その意氣は、國權派の人と、頗る似通ふた所があつたので、殊に、此運動には、良き道伴れであつた。

外國人に、土地を所有させるとか、內地雜居を許してやるとか、或は鑛山採掘の權利を與へる、とかいふやうな條項は、その頃の國情からいへば、頗る危險な事であり、況して、外國人法官任用の一項の如きは、國民を擧げて、憤慨して居た所であるから、大隈の評判が、惡いことは一と通りでなかつた。

それであるから、改進黨の演說會は、どこの地方でも、開會の始めから混亂して、辯士の說などは、聞く事を得なかつた。每日新聞と、報知新聞が、必死になつて辯護の筆を揮つたが、些の效能もなかつたのみならず、隨所に、不買同盟が起つて、紙數の減ることは、氣の引けるほどであつた、と聞いて居る。

初め、大隈の入閣については、黨內にも、非常な反對があつて、容易に纏まらなかつたのである。けれども、大隈は、黑田に會見した時、輕々しく入閣を承諾してしまつたのであるから、黨員に拒まれたから、といふて、今更ら入閣を斷わる事もならず、頗る面倒な立場になつた。

明治廿年の政變が原因で、伊藤內閣の瓦解した後を引受けて、黑田淸隆は、總理大臣になつたのであるが、萬事の切盛りは、伊藤が、黑幕のうちから行つて居たのである。

民間の論客が、さかんに薩長藩閥の攻擊をして、薩閥の黑田を、推上げて見たが、結果は、矢張り同じ事であつた。を投げて、世評の惡いのを、緩和する爲めに、薩長に對する人氣が、甚だ宜しくない。伊藤、井上、山縣が、匙

其處で、伊藤は、智慧袋を絞つて、維新の功臣を網羅する、といふ名義で、先づ大同團結から、後藤象二郎を引拔いて、第一着手に成功したので、次ぎは、大隈に眼をつけて、之れを引拔かう、としたのである。大隈は、明治十四年に、職を辭して以來、長い間の浪人生活に、頗る弱つて居た時であるから、黑田の勸說を容れて、すぐに入閣の承諾を與へた。此時には、立憲改進黨の總理である、といふ身分を、考へる暇もなかつたらしく、黨內の諸れにも相談

はなかつた。

茲に於て、黨の重立ちたるものは、しきりに大隈の不都合を鳴らして、其入閣を拒まうとした。

『たとへ、名義はどうであらうとも、長い間、藩閥を攻擊して居た、政黨の首領が、無條件で、其內閣へ入るといふことは、何としても、同意が出來ぬ。

殊に、入閣する以上、政黨との關係は絕たなければならぬのであるから、つまり政黨の首領が、藩閥の陣營へ、降伏した事にもなり、不面目此上もなき次第である。

また、苟も政黨の首領が、かゝる狀態の下に、入閣する場合、豫め黨員の了解も求めずに、內諾をするといふ法はない。大隈總理の態度は、甚だ不當である』

といふのが、多數の意見であつた。

其頃の政情は、現今の政情と、全く異り、政府者が、政黨の首領と會見してさへ、むづかしい問題の起る時代であつたから、大隈が入閣するとなれば、改進黨の總理を、罷めるのは勿論、黨籍から、脫退しなければならなかつた。

併し乍ら、當時の大隈は、長い間の浪人生活に、すつかり疲れ切つて、もう是れより外に、甦へる道はなかつたのであるから假りに黨員のすべてが、之れに反對しても、自分は、飽迄も入閣する考へであつた。

大隈は、黨員の反對するものに對して、百方辯疏して、その諒解を得よう、としたが、どうしても、黨員が承知しないので、大隈も、さすがに弱つて、いろ〳〵考へた末、犬養を呼んで、打明け話をした。

『それは、あなたが、宜しくなかつた』

『宜しくない事は、わしも、能く知つて居る』

『知つて居るなら、なぜ、然ういふ事をなさる』

『どうも、事情止むを得んのぢや』

『その事情とは、どういふ事情でありますか』
『まア、さう云はずに、何とか考へて見てくれ、たのむ』
『どうも困りましたな』
『わしも、困る』
『あなたの困るのと、我輩の困るのとは、困りやうが違ひます。全體どうしてくれ、といふのですか』
『黨員の方を、うまく纏めて貰ひたい』
『黨員をまとめるには、あなたが入閣をやめるのが、一番に宜しい』
『黒田に、承知した旨を答へて來たのぢや』
『なぜ、さういふ事をなさる』
『……』
『どうしても、斷りは言へぬのですか』
『斷りは、いへぬ』
犬養の眼玉が、ギヨロリと光つた。
『宜しい。それぢや入閣なさい』
『えツ、入閣してもよい、といふのか』
『斷われなければ、致し方がない』
『黨の方は、どうなる』
『それは、判らぬ』
『そりや、困る』

『困つても、仕樣がない』
『どうして、呉れる』
『一應は、相談して見ませう』
『どうか、賴む』
『宜しい』
それから犬養は、黨員の重立ちたるものを集めて、例の鋭い辯舌で、說法をはじめた。
『親爺は、どうしても、入る事にきめて居る。强つて拒んだら、脫黨するだらうから、いつそ除名處分をやつたら、どうか』
『えツ、除名處分をしろ』
『黨規紊亂の廉を以て、除名する外は、あるまい』
意外の事に驚いて、しばらくは沈默がつゞいた。
『まさか、總理を、除名する事は……』
『然らば、脫黨を待つか』
『それも、困る』
『それぢや、どうしよう、といふのか』
先づ急所を刺して、ぐん／＼と突ツ込んでゆく。犬養一流の舌鋒は、實に鋭いものであつた。
『事、此に到つては致方がないから、入閣は認めてやるがよい。その代り、今迄に、我々の唱へて來た、政策を支持させる、といふ、條件を附けるのだ。表面は脫黨しても、鎖は繫いで置く事にして、外部から助けながら、どこ迄も逃さぬやうに、するのぢや。殊に來年は、初期の議會で、總選擧も行はれる事であるから、老爺の內閣に居る事

は、いく分の强味にもならう。どうぢや、入閣の承認をして、やつたら』

痛し痒しの間に立つて、强い議論はして居ても、損得は、能く知つて居る。斯ういふ風に、はつきりいはれると、それに反對し得るものはなく、終に犬養の說を容れて、大隈の入閣を、認める事になつた。斯うした事情から、入閣する事になつたので、大隈は、二三の政綱を書いて、それを黑田に示し、豫め內諾を求めた。

黑田は、輕く首肯いて、政綱書を受取つたが、それは、ストーブへ投げ込んでしまつた。黑田は、政治家といふ人物ではなかつたが、さうした所に、よい味を、持つて居た人である。

條約改正は、大隈が、入閣する時からの、政綱の一つであつた。假りに其事がない、としても、井上の失敗した始末が、まだ附いて居なかつたので、いづれにしても大隈は、此問題に、手を觸れる筈ではあつた。

地方の反對派が、條約改正中止の建白書を携へて、續々上京して來る。それが、外務省の玄關へ乘込んで、理窟を揑るので、その煩はしさは一と通りでない。それから元老院にも押しかけて中止論を高唱するので、之れに應接する議官も、頗る手古摺つた容子であつた。海江田信義と、安場保和が、多く應接の役をつとめた。どちらも頑固で、保守思想の人ではあつたが、有志家に對する應接は、非常に巧かつた。海江田の弟は、有村治左衞門といふて、井伊大老の首を執つて、立腹を切つたので有名なものだ。安場の婿が、後藤新平である。朝鮮總督の齋藤實も、此人の御蔭で、今日の位地を得たのである。

建白書の眞價が、どれほどの力を、持つて居たか知らぬが、とに角、毎日のやうに元老院へ、三組も四組も押かけて、火を吐くやうな反對論を唱へるのだから、幾分の刺戟にはなつた。

一二

外務省は、問題の當面の役所だけに、一層の面倒が多い。押かけてゆく有志家は、普通の駄論ぐらゐで引取るものはなく、時には鐵拳を揮つて、巡査の厄介になる事もある。ハイカラ攝ひの役人は、ビク〳〵もので、日を送るの有樣であつた。新聞には、發行停止の逆手を用ひ、演說には、中止解散の威壓を加へ、建白書は、唯だ受付けるだけの事で、別に答辯をする必要はないのだから、存外に、大隈は、平氣で居た。

輿論尊重は、民間に居る時の主張で、自身が當局者になれば、輿論を、輕く取扱ふ事になり、いかに反對論が喧しくなつても、そんな事は、知らぬ顏の半兵衞で、飽迄も條約改正は、思ひ通りにやつて退ける、覺悟で居た。

然にる、大隈の身に取つて、容易ならぬ事の起つた、といふのは、遞信大臣の後藤象二郎が、正面に立つて、反對を始めた事である。閣臣の一人が、之れを、內閣の問題として、正面から反對して來た、といふ事は、大隈の爲めに頗る不利であつたのは、言ふ迄もなく、談判の結了して、奏請の場合に、若し調印を拒むやうな事があれば、それこそ取返しのつかぬ失體になるのであるから、これには大隈も、非常に當惑した。

後藤の入閣は、大隈と同じやうに、甚だ不純なものであつたが、此問題に依つて、其不人氣は回復して、頗る評判が良かつた。

大石正巳、犬養毅、三宅雪嶺、肯了法等の人々を參謀として、大同團結を唱へ、天下を席捲するの勢ひを以て、進んで來た時、黑田から入閣をすゝめられ、同志を置去りにして、內閣へ飛込んだ早業は、當時の政客を、アツと云はせた程であつたが、大隈と共に、變節改論の大臣として、評判は甚だ惡かつた。

後藤の背後には、フランス歸りの憲法學者、光明寺三郎が控へて居て、大隈案の缺點を指摘して、議論の材料を、供給して居たのであつた。

大隈の辯舌は、天下の雄としてひとしく人にも知られて居たが、後藤が、討論の天才は、また格別のものであつた。大隈の辯舌には、無駄が多く、議論も、極めて大摑みであつたから、缺點を拾つて、一つ〳〵急所を抑へられると、割合に弱い所があつて、討論は、存外に脆かつた。

光明寺が、一時間も說明をすると、後藤は、之れを引延して、三時間ぐらゐの材料にする。朗々として明晰な、士佐一派の辯舌で、反對論の缺點を捉へて、ギユツ〳〵と突ツ込んでゆく調子は、多く其比を見ないほどであつた。

後藤の地位と、辯舌を利用して、大隈案を遮ぎらうとした。光明寺の賢は、多くいふに及ばぬ、と思ふが、其爲人は、傳へて置く必要がある。

フランスから、歸つた當時、彼の人氣は非常なものであつた。明治法律學校の講壇に立つて、得意の憲法論を、その明快な辯舌を以て、講ずる際には、どんなものも引付けられて、只だうツとりと、聞惚れてしまふのであつた。

それは、單に彼の博識である、といふばかりでなく、また辯舌の明快なる爲めばかりでもなく、その風采の貴公子然として、而かも、些しの厭味がなく、態度から調子までに、どことなく氣の利いた所があり、聞くものに與へる感じのよいことは、今に到るまで著者は、彼の如きものに、接したことが無い。

高島炭礦の問題から、犬養毅が、松岡某といふ人から、決鬪狀を寄せられた事がある、其立會人として署名したのが、三宅雪嶺であつた。

此事は端なくも、天下の大問題となり、政府の大官は、膽を寒うして、決鬪禁止の法律を、出す事になつた。於此、決鬪は許す可きか、それともに禁止す可きか、との論爭が、朝野の名士に依つて、大に起つて來た。

光明寺は、學校の講壇に立つて『決鬪は文明の花なり』と題して、決鬪の公許す可き理由を、力說した。其の演說は全國に傳へられて、當時の青年は、光明寺を、神の如く、尊敬するに至つた。

初期の議會に、鄕里の山口縣から選出されて、衆議院の議席に着いた。やがて議會が開かれると、彼の演說が、またもや天下の問題となつて、新聞雜誌の上に、論戰の花が咲いた。

東京府下選出の森時之助といふ代議士が、背任罪に依つて、拘禁された爲めに、議會へ、出席する事が不能かつ

た。彼は、之れを以て、不當の拘禁とし、速に釋放して、議會へ、出席せしむ可し、との說を述べた。

『苟も、代議士である以上、現行犯以外の罪を以て、拘禁する事は不法である。どうしても、拘禁する必要がありとするならば、一應は、衆議院議長へ申出。その承諾を得てからでなければならぬ。

森の拘禁については、衆議院へ、何等の照會もなく、裁判所の獨斷を以て、之れを爲して居るのであるから、不法の拘禁といふ可きである。此故に、裁判所は、速に森を釋放して議會へ臨ましむ可く、また衆議院は、正々堂々の決議を以て、裁判所へ、森の釋放を、要求す可きである』

之れに對しては、さかんな議論があつたけれど、結局は、彼の主張を正當なりとして、森は釋放されたのである。

それから後ちは、議會の開會中に、代議士を、拘禁し得ない事になつて、今でも、其通りになつて居る。

先般の總選擧に依つて、大阪の田中讓といふものが、裁判所の召喚に應ぜず、はやくも身を匿して、臨時議會の開けてから、裁判所へ出て行つたなどは、此制規を惡用したもので、卑劣此上もなき事ではあるが、代議士の身分を、それほどに重く、取扱はせるやうにした力は、光明寺の演說からである、といふ事を、國民は、深く記憶して置くがよい。

彼は、代議士に、打つて出る時、末松と姓を改めた。被選擧權に、缺くる所があつて、末松家の養子になつて、資格を整へたのであつた。

酒も飲めば、女にも引ツかゝり、道樂は一と通りやつた。學友としては中江兆民があり、骨肉の如き交りを結んだ。女道樂には、畿部四郎といふ良友があつて、さかんに柳暗花明の巷に、出沒した。

日本橋の芳町に、米八といふ藝妓があつた。洋裝して座敷へ出る、といふ變物であつたが、いつか彼と相許し、終に落籍されて、その邸へ入込んだ。

彼は、未だ獨身者であつたから、米八を、引ツ張り込んだのである。さすがの彼も、此女には、ヒヨロ〳〵になる

ほど、惚れ込んだ。家事向きは一切まかせて、書生には、米八を、奥様と呼ばせたが、眞面目な友人の抗議で、正式の夫人には爲し得なかつた。

けれども、彼の死ぬ時は、米八の溫い腕に、抱かれて居たのである。死後の始末も、米八が、身を以て當つた。此女の晩年が、例の千歳米坡である。

世論の囂々として、反對するのには驚かなかつたが、後藤の反對には、大隈も、しば〳〵苦められた。改正談判は進んでも、之れが爲めに、條約調印は、少しむづかしくなつて來た。所へ、法制局長官の井上毅が、上奏しても反對する、といふ態度で、大隈に中止を迫まる、といふやうな事も起つて、ます〳〵大隈は、窮境に立つ事になつた。

井上馨は、磯部の溫泉に、浴して居たが、中央の政情が、漸く嶮しくなつて來たので、伊藤博文と打合せて、東京へ歸つて來た。

大磯の滄浪閣は、未だ小田原に在つた時で、伊藤は、井上よりの電報を得て、すぐに上京した。

此事を知ると、後藤は、先づ兩人を尋ねて、内閣の模樣を語り、大隈と討論の内容を打明けた。同時に、井上毅もやつて來て、憲法違反の點を、力説した。

反對論が、起つて居る事は、兩人も、能く知つて居たが、東京へ出て、各方面のものから、詳く聞いて見ると、驚く可き不穩の氣が流れて居る事も、明かに判つたので、いよ〳〵打捨てゝ置けぬ、といふ考へから、先づ、黑田を訪ふて、兩人の意見を、述べる事にした。

斯うした事情は、よほど祕密にしても、すぐ漏れるもので、各新聞の調子は、一齊に筆を揃へて、伊藤、井上を煽て揚げた。兩人の力に依つて、條約中止をなせしめよう、とのつもりからであらう。

時局は、漸く迫つて、茲に逸及んだ。風が吹くか、將た雨が降るか。

一二

國民の輿論は、條約改正中止といふのであるが、大隈外相は、それを、輿論と認めないのであつた。

改進黨は、全力を擧げて、條約改正の斷行を唱へ、大隈の擁護に努めた。國民の多數が、たとへ何といふても、二大政黨の一たる、改進黨が、斯の如くである以上、國民の輿論は、いづれとも決しかねる。從つて、自分は飽迄も、所信に據つて、進む外はない、と豪語して、大隈は、更に反省する樣子がなく、すでに二三の公使とは、覺書の交換もすませた、といふ事が洩れて來た。

全國の新聞雜誌は、大部分が反對で、演說會の如きは、中止派に非ざれば、無事に、開會し得ざるの有樣であつた。外務省の玄關には、條約改正中止の建白書を携へた、地方の總代なるものが、五月蠅ほどに詰めかけた。平生は政治問題に遠ざかつて居る、實業家までが、中止を叫んで居るほどであるにも不拘、僅に改進黨の應援を得て、『天下の輿論は、必ずしも條約改正を否認せぬ』と頑張つて居るのは、大隈にも、不似合の事であつた。殊に、新聞の發行停止と、演說會の中止解散は、頻りに行はれて、言論の壓迫は、此時ほどに、酷しい事はなかつた。

斯うした大隈の態度には、どんなものでも、眉をひそめて、其頑冥を指彈せざるものはなく、昂憤の餘り、不穩の事を、口走るものさへあつて、時局は、漸く嶮惡になつて來た。

其頃の有志家は、昨今の有志家と、全く異つて居て、一身の利害から打算して、問題を取扱ふものは、絶えて無く況して、損得を考へて、政治を弄ぶものなどは、殆んど無かつたのであるから、此問題なども、眞面目に考へて、どこまでも眞面目に、取扱つてゆくの風があつた。それ丈けに、昂憤すれば何をするか判らない。一身を抛げ出して天下の問題を解決しよう、とする位ゐの覺悟は、大概な有志家は、持つて居たから、

『大隈が、無理を押通して、どこまでも條約改正をやり遂げる、といふのなら、どうも致し方がないから、最後の手

段に訴へるまでの事である』

といふ聲が、漸く高くなつて來て、各所に秘密の計畫が、企てられるやうになつた。

最後の手段、といへば、どうせ碌な事ではない。生命を的に、血を流す、といふ事の外に、所謂最後の手段なるものは無い筈だ。

形式の上から見て、暗殺といふ事は、まことに卑怯な行爲である。人が油斷をして居る、その隙を襲ふのであるから、決して勇敢な所爲とは言へぬのみならず、單に死ぬ覺悟を以て、事に當つた、といふ丈けでは、偉いともいへぬ譯である。けれども、斯ういふ事は、單純な理窟一方からのみは言へぬのであつて、それには、時代の背景も、よく見て、且つ殺す人と殺される人、双方の立場や、境遇も考へなければならぬ。もう一つ、問題の性質も、知る必要がある。

舊幕時代の如き、武斷專制の行はれて、如何に正しい道理でも、その人の位地が低ければ、何事も用ひられぬ、といつた樣な、世に在つては、どうしても、此手段に出づる外はなかつたのであるから、善惡の批評は別として、弱者の强者に對する、唯一の反抗手段と見てやるのも、或は當然であつたらう。

櫻田の快擧として、水戸の浪士が、今に猶ほ、義烈の二字を以て、賞揚されて居るのも、赤穗の大石等が、忠臣の龜鑑とされて居るのも、理窟は、いろ〳〵に附けられてあるが、とに角、あの時代として見れば、相當の手段として世間に容れられて居るのも、固より當然の事である。

現代の如く、一般のものに對して、人としての權利が認められ、言論の自由もあれば、參政權も與へられてある以上、もう暗殺の必要はあるまい。

けれども、大隈外相が、少しでも自分に不利な言論は壓迫し、どこ迄も、國民の輿論に反いて、其我意を押通さうとするに至つては、實に沙汰の限りであつて、殊には、未だ議會も開けて居らぬ、明治二十二年の事であるから、

多くの志士のうちには、死を以て、之れを拒まう、とする者の出て來るのも、實は止むを得ざる結果であつて、一面から見れば、大隈が、さうした危險に、自分から踏み込んで、行つたものとも云へる。

『オイ、川澄君、君は、どうしよう、といふのか』

『さア、どうしたら、宜いかな』

『そんな曖昧な事をいつて居ないで、はつきりした考へを聞かせて、吳れたまへ』

『君は、それを聞いて、どうしようといふのか』

『どうしようにも、斯うしようにも、君の考へを聞かなければ、僕にだつて、覺悟は決かぬさ』

『他人の意見を聞くよりは、先づ君の覺悟から、いふて見たら、どうだ』

『……』

『僕には、僕の覺悟がある、けれども、君の覺悟は、君が決けなければ、いかんぢやないか』

『そりや、道理です』

『君は、どうするといふのかね』

『……』

是れで兩人は、しばらく默つて、互に顏を、見合せて居るばかりであつた。

明治十七年の秋もくれて、もう冬の初期に入らう、とする頃愛知縣下に、國事犯の一大疑獄が起つた。

名古屋の自由黨員に係る、政府顚覆の陰謀といふ嫌疑で、捕へられたものは、百名に近く、實際の被告人として、監獄へ繫がれたもの丈けでも、五十名に達したほど、大きい事件であつた。

大島渚、久野幸太郎、塚原九輪吉、祖父江道雄、岡田利勝、大島宇吉、游谷良平、富田勘兵衞、奥宮健之、廣瀨重

雄、湊省太郎、村松愛藏、川澄德次、八木重治

是等の人々は、いづれも自由黨員にして、奥宮は、東京から連れて行かれ、湊は、靜岡から引張られたのであるが、あとの人は、みな愛知縣人であつた。此うちで、岡田、祖父江、澁谷、大島宇吉、湊は、豫審免訴になつたが、村松、川澄、廣瀨は、別に事件が起つて、その方で處分される事になつた。大島は、今の新愛知の社長で、澁谷は、東京へ移り、今では立派な紳士として、晩年を氣安く送つて居る。村松等四人は、信州松本へ送られ、別個の國事犯として取調べをうけた。是れが有名な飯田の國事犯事件である。

川澄は、五年の禁獄に處せられて、出獄の後は、東京へ移つて居た。政治運動は、此事件限りで、止める覺悟であつたが、偶ま大隈の條約問題が起つたので、同志の會合にも、ちよい〳〵顏を出すやうになつた。

飯田事件の首魁は、誰れも知る、村松であるが、擧兵の後は、參謀の格で、村松を、扶ける事になつて居たのは、川澄であつた。村松は、古き自由黨員で、露語に通じ、シベリア探檢もやつて來て、熱烈なニコライ信者であつた。黨内に於ても、人格者として重用されて居たのに、例の日糖事件に躓いて、入獄の身となつたのを愧ぢ、今では、政界に念を斷つて、救世軍の人になつて居る。

川澄を、訪ねて來たのは、村松の最も愛して居た一青年で、三州田原の出身、鈴木金太といふものであつた。眉目清秀の美少年として、はやくから同志の間には、評判された才物であつたが、今は名を清節と改めて、一と頃は、大阪毎日の名古屋支局長を、勤めて居た人である。

兩人の相談は、遂に進んで、大隈暗殺の事に決したが、どういふ手段に依つて、目的を果さうか、といふ一段になると、川澄は、聲をひそめて、

『それには、爆烈彈の力を借りるに限る。匕首を以てするのは、如何にも立派であるが、大隈も、相當に警戒して居るであらうから、匕首は容易に、實行し得まい、と思ふ』

『しかし、爆烈彈は、どうして手に入れるか』

『自分で、つくる外は、あるまい』

『その材料は……』

『僕の知つて居る奴に、井上といふものが在つて、横濱で藥種商をして居るから、それに賴んで、材料は、手に入れよう』

『井上といふのは、どういふ人です』

『君も、名前は知つて居る筈だ。例の仁太の事さ』

『うむ、彼れですか、そりや可いでせう』

『とに角、これから横濱へ、行く事にしよう』

『それがよいでせう』

是れから兩人は、横濱へ出かけた。

自分の事をいふのも、少し恥かしいが、此井上は、卽ち著者の事である。

私の家は、横濱に於て、最も古く藥店をして居て、西洋の藥品は、丸善か、私の家で、多く賣つて居たのである。私は、家の相續人であるから、藥劑師の免狀を得る可く、東京へ出かけて、神田岩本町の藥學校へはいつたが、もう其頃は、自由黨員の一人として、さかんに政治運動もやつて、演說などをやつて騷いで居たので、學校へはいつても他の生徒と異つて、少しは理窟も揑る所から、教師の氣受けも、餘り良くなかつた。

化學の教師と、或つまらない事から衝突して、其教師の排斥運動を始めた。それが、校長に知れて、終に退學を命ぜられたので、家に歸つて、店に坐るやうになつた。

或時は、病院廻りをして、藥品の註文を取り、また或時は、父にかくれて、演說會へも出る。斯うして居る間に、

多くの友人も出來て、黨内の青年としては、少しく幅が利くやうになつて、政治運動の面白さも、一だんと深くなつて來た。川澄とは、二三度逢つた事があるばかりだが、その劇合には、互ひに能く知り合つて、手紙の遣取りは、しげくして居たのである。川澄に比べると、村松は、ずつと先輩であつて、著者とは、大分に位地の隔りもあつたが、川澄とは、互角の附合をして居た。

殊に、著者が、明治十八年の夏、名古屋へ行つて、獄に投ぜられた時、それと入れ違ひに、村松等は、信州へ送られたので、著者は、出獄すると直ぐに、湊と連れ立つて、村松等を慰む可く、木曾路を經て、松本へ、行つた事があり、著者の名入をしたので、川澄の記憶には、よほど深く殘つて居たものか、自分が出獄して、東京へ來た時も、すぐ著者を、横濱に訪ねて來て、いろ〳〵と話合つた事もあるので、爆彈の材料も、著者の手に依つて、整へ得るものと思つたに違ひない。

時の外相を、暗殺する爲めに使用する、爆彈の材料を、著者に需める、といふほど、兩人から信用されたのは、まことに有難いやうな事でもあるが、實は迷惑千萬であつた。

幸ひに著者は、其時家に居なかつたので、兩人に逢はなかつた。著者は、兩人と入違ひに、東京へ出て、千葉縣の方へ、行つて居たので、遂に此相談は、受けずに濟んだ。

其後、川澄に逢つた時、

『お前も、仕合せであつたが、己れも、お前の居らなかつた爲めに、生命拾ひをしたよ』

と言つて、川澄は、ニヤリ〳〵笑つて居た。鈴木も、昨今の事を繰返して、恰で夢のやうだ、と言つて居る。

斯うした計畫は、宮に此二人ばかりでなく、到る處に、企てられて居た。

土佐生れの濱田三孝といふ志士があつた。其同志が五六人で、同じ計畫を立て、高知に於て、爆彈の製作にかゝりすでに二三發は出來て、これから東京へ出ることになつたが、もう二三發、豫備に作つて行かう、といふ者があつて

また製作にかゝつた時、西内正基の持つて居たのが、突然破裂して、西内は、いふ迄もなく、傍に居た三四人が、重傷を負ふた。

これが爲めに、上京不能となつたばかりでなく、一同捕はれて、目的は、全く果せぬ事になつた。

幸德事件の時、奥宮健之に、爆彈の製作を教へたのは、この西内であつた。けれども、西内は、事件に關係なく、たゞ聞かれたから打明けた、といふ丈けの事で、罪に連坐する事は免れた。

後には、貴族院議員の椅子に依つて、政界の經緯には、殆んど關係がない、といつたやうな顔をして、平然しては御座つたけれど、其實、矢張り深い因緣があつて、政友會の内部には、鬱然たる勢力を、有つて居たのみならず、反對黨の人々にも、少なからず尊敬されて居たのが、例の村野常右衞門である。

長い間の知人として、村野の人格を、よく知つて居るが、實に立派な人物であつて、各政黨を通じて、稀れに見る純潔な人であつた。

八王子近くの、田舍育ちで、長い間の政治運動に、殆んど資産は、傾け盡した。幸ひに實弟の、連太郎といふのがよく働いて家運の挽回はした、と聞くけれど、昔の村野家ほどになつたか、どうかは知らぬ。

其弟も、曾ては選擧の事から、若氣の癇癪を起して、裏切りした奴を、一刀に斬殺した。けれども、未丁年の爲めに、死刑は免かれて、無期徒刑に處せられて、長く北海道の獄に居た事がある。

誰れにしても、村野の名を聞けば、森久保作造を聯想するだらうが、昔は、石坂昌孝の配下として、兩人の關係は管鮑の如きものであつた。

村野は、ヌーボー式の默り屋で、森久保は、口も八丁、手も八丁の活動家で、其性格の如きは、全く異つて居たけれども互ひに深く信じて、相容して居たから、石坂を守立てゝ、三多摩の青年を結束させ、いつも自由黨の中堅として、關東派の爲めに、氣を吐いて居た。森久保の八面玲瓏は、有名なものであつた。而かも、應酬の間に、一種の魅

力を有つて居て、どんなものでも口說き落してしまふ、といふ、不思議な力は、何人も認めて居た。從つて、一と頃の東京市會は、全く彼の力で、左右して居たものである。

市會に現はれ來る問題は、大小難易の別なく、森久保の手に依つて、みな裁かれてゆく。各派の交渉から、個々の不平を、慰諭する事まで、すべて彼の裁量を以てせられ、市長は、只だ手を束ねて、彼の報告を、待つ丈けの事であつた。されば、當時の市政は、まことに能く運ばれて、治績は、頗る擧つた。市會にも、見苦しき紛爭は無く、何時も、スラ〳〵とすんで居た。

その代り、弊害は、また漸く之れに伴ひ、彼の統率する常盤會の議員が、專恣橫暴を、極めた事も少なからずあつて、甚だ評判は宜しくなかつた。

抑も、常盤會の興つたのは、星亨の死後であつた。星には、何等の關係はなかつたのであるが、事情を解せず、歷史を無視する、演說使ひの輩は、常盤會を以て、星のつくりたるものとして、死者に鞭打つ事が、往々にして在る。

星の死後、彼は市政の上に、一種の勢力を有し、其勢力を、保持する必要上、新たに興したものが、則ち常盤會であつた。此一事に就ての功罪は、俱に彼の負ふ所であつた。星には、何等の因緣もなき事である。

常盤會の專恣橫暴、それは正に其通りであつた。同時に、常盤會の力に依つて、完全に速成される事も、甚だ多くあつたのである。一般の非難が、體り甚大しくならぬ時、村野は、彼に向つて、頻りに市政から手を引く可き事を、勸說した。

『東京市の事ぐらゐ、さう苦勞してもつまらないから、もう大概にしたらどうだ』

『イヤ、もう少しやつて見たい』

『何故か』

『星然の計畫した事が、大分遲つて居るから、せめて其眼鼻だけでも、附けてから止めたい、と思ふ』

『然うか、それぢや仕方がないけれど、あまり手を擴げて、世話をやかせぬやうにしなさい、評判がよくないぜ』

『それは、我輩も、よく知つて居るが、まア暫く見て居てくれ』

それから年を經て、常盤會攻擊の叫びが、全市に漲つて、總改選の時、彼は落選してしまつた。

村野は、彼の敗北を聞いて、

『己れが言ふた時、やめればよかつた。骨を折つて惡く言はれる、馬鹿々々しい事だ』

と、言つて、笑つたといふ事である。

些と、餘談に涉つたが、兩者の關係は、斯ういふ風に密接なものであつた。

條約改正の反對運動が起つても、村野は、相變らず陰の人で、森久保のみが、表面に立つて、中々働いて居た。

一日、村野は、突然、彼に逢つて、

『これを、しばらく預かつて置いてくれ』

と、いひ乍ら、小さい風呂敷包を出した。

『何だ、之れは……』

『例の彈だ』

『えツ』

彼は出しかけた手を、急に引つ込ませた。

『三つばかり、はいつて居るから、しばらくどこかへ、匿して置いて、貰ひ度い』

『斯んなものを、匿して置いて、どうするつもりか』

『どう斯うといつて、今は差當り必要もないが、さアとなつた時、急の間に合はぬものだから、大切に匿して置いたら、また何かの便利にもならう』

『左様か、それぢや、確かに預つた』

此うちの一發が、來島の手に渡つて、那アした事にならう、とは、想像して居なかつたのだ。

人を斃す目的を以て、爆彈をつくり創めたのは、自由黨が、最初であつた。明治十七年の加波山事件に關係した、鯉沼九八郎が、ロシアの虚無黨傳を讀んでから、不圖思ひついて、三島縣令を、嚐殺する爲めに、之れをつくりはじめて、幾多の苦心の末、辛うじて完全な物が出來た。それが、漸次に傳へられて、其頃の黨員中、死を以て、政府と爭ふ覺悟のあつたものは、大概は、製作の仕方位、知つて居たのである。

大井憲太郎一派の朝鮮事件、世間からは、大阪國事犯事件と名づけられて居るが、その事件には、村野も、森久保も連坐して、獄窓の苦辛を、嘗めて居る。

富山縣の稲垣示が、向島に、別莊を有つて居て、其處を製造場にして居た。出來上つた彈を、築地の有一館へ、運ぶ役目が、影山ヒデといふて、年若き婦人であつた。後の社會主義者、福田英子の前身である。

彈につくるブリキ罐は、田代季吉が、本所の松倉町に、鍛冶屋をやつて居て、白晝でも公然つくつて居た。その子僧になつて居たのが、霜島幸治郎といふ青年で、一と頃の本所區長が、則ち其人であつた。

霜島は、村野や森久保の後輩で、共に大井の陰謀に、加はつて居たのである。さういふ關係から、村野も、森久保も、爆彈をつくること位ゐ、心得て居るのだ。

新たに、つくりはじめて、失敗したものも多くあるが、古くからつくつて、持つて居たものもあつて、それが、皆な機會を狙つて居たのであるから、大隈の生命は、風前の殘燈ともいふ可く、眞に危いことであつた。

一四

福岡と博多は、脚一と筋を界にして、その稱へを、異にして居るのだ。福岡には、黑田侯の城郭があつて、士族を

中心に、町の形をなして居るのだが、博多の方は、全く町人ばかりで、商業の盛んな所である。

今では福岡市の博多であるが、その富を、基礎とした實力は、博多に有る。現に物産の上からいふても、博多織や博多人形はあるが、福岡の名を以て、世に知られて居るものは、殆んど無い位である。

但し、政治の事に關しては、それと反對に、福岡の名が、響いて居る。昔から藩の城が在り、多くの士族が居たので、明治になつてからも、其士族が、乘出して來て、天下國家を論ずる。從つて政治の事には福岡人に限られたやうになつて、博多の町人は、依然たる町人として、偏に金を儲ける外、何の餘念も無かつた。風俗も違へば、習慣も異なつて、人としての調子が、全で一つにならぬのが、いかにも妙である。

玄海の荒浪を吸ひ込む、雄大な博多灣は、恰も巨人の眠つて居るやうにも見える。朝に晩に、其れを眺めながら育つ、福博人に、一種の氣魄の有るのは、決して無理ではない。

明治十年前後、舊藩の士族を中心に、反政府の運動は起つた。先づ國會開設から、自由民權の叫び、單に福博といふ、せまい地區に囚はれず、ひろく筑豐の二州に跨つて、種々の團體が生れた。そのうちに於て、最も有力にして、世に知られたのは、どういふ團體であつたらうか。

最初に起つたのが、矯志社であつた。社長には、武部小四郎が推されて、箱田六輔、頭山滿、進藤喜平太、宮川太一郎の四人が、之れを輔佐する事になつた。次は、越智彦四郎の起した、堅忍社で、之れには川越庸太郎、吉田眞太郎、大島太七郎等の壯士が、社員として加入した。それから後ち、箱田六輔を、社長に仰いで、奈良原至、來島恒喜、月成功太郎、中島翔、山中茂等の壯士が、堅忍社なるものを起した。

當時の縣令は、渡邊清であつたが、是等の團體を、ひどく恐れて、可成り壓迫は加へたけれど、いづれも決死の志士であつて、官憲の威力位に、凹垂れるやうなものは、更に居なかつた。

彼是れして居るうちに、西鄕隆盛を擁して、薩南の健兒が、いよ〳〵旗擧に及んだ。西鄕に對しては、平生から尊

敬して居るのみならず、政府には、極度に反感を、持つて居た人々であるから、みな西郷の味方を、爲る事になつた。

乍併、その計畫は、はやくも破れて、大概は、中途にして抑へられ、或は獄に繫がれるものがあり、或は斬られたものもあり、之れが爲めに、是等の團體は、すべて潰滅してしまつた。

西郷の事件が、略ぼ片付く頃から、自由民權の叫びは、漸くはげしくなつて來た。國會開設の請願運動は、それから後ちがさかんになつたのである。

此運動の中堅は、土州の板垣派であつたのは、改めていふ迄もないが、西南戰爭の餘波をうけて、立志社の志士は、多く獄中の人となり、僅に殘つた、片岡健吉の如きも、林有造の陰謀事件に連座して、入獄の身となつた。

板垣の左右には、極く歳の若いものばかりで、何事も皆な、新規にやり直す外はなく、眞に板垣は、一大決心を以て、全國の遊說を、始る事になつた。

時勢の進展は、板垣の豫期した以上に、その勢力を植付け、同志を得る事に、最も便宜であつた。其結果は、明治十二年の愛國社の大會と、なつたのである。

筑豐の志士は、多く先輩を失つて、今は、如何とも致しがたく、それ〴〵に、生活の道を求むるの外なかつた。食ふと食はぬの堺に立つては、天下も、國家もあつたものではない。しばら〳〵、雌伏して、時機の來るのを待たう、といふ事になつたが、此時代の福博の壯丁は、見るも憐れな有樣であつた。

明治十年の九月になつて、頭山は、漸く無罪放免の言渡をうけて、福岡へ戻つて來た。同志の罪は、箱田が引受けて、外のものは無事に、歸る事を得たのである。

『オイ、進藤ッ』

『何ぢや』

『若い奴等を、斯うして置いては、つまりが共倒れぢや。何とか工夫をしようぢやないか』

『己れも、考へては居るのぢやが、別に是れといふ良策もないのでな』

『それに就いて、好い事がある』

『どうするのか』

『向濱の松林を貰はうぢやないか』

『えッ、あの松林を……』

『あれだけ、そつくり貰つたら、若い奴等の腹も減るまい』

『政府の方で、承知するかな』

『承知するもせぬもあるか、縣令の渡邊さへ諾といへば、それで決まるのぢや』

『その縣令が、どう言ふか』

『お前と二人で行つて、一と睨み睨んだら、否も應もあるまい』

『成る程、そりや良策ぢや、睨んで來ようか』

『さア、出かけよう』

頭山は、もう立ちかけて居る。進藤は笑ひながら、

『すぐ行くのか』

『善は急げぢや、ハッハ、、、、』

向濱の北に續いて、約十萬坪の松林が在る。昔は、海の中道と稱して、風景の佳いのと、澤山の松樹が、まるで森のやうに立列んで居るのとで、有名な所であつた。

縣令を、一と睨みして、こんな處が手に入るなら、睨み甲斐もある、といふものだ。運動費を使つたり、哀訴嘆願したりして、お情に縋つて、拂ひ下げよう、とするのぢやなく、威張つて貰ひ下げよう、といふのだから面白い。

その睨まれる縣令、渡邊といふ人の身元を洗へば、維新の際に、戰場を潜つて來て、相當の經歷も、持つて居るのだ。昨今のやうに、大學を出て、郡長や內務部長をやつてから、順に昇つた、といふやうな、人間味の薄い上に、腰のフラついて居るのとは、大分ちがつた所のある人物だが、頭山の如き、一種の怪物に出會つては、どうにも逃げやうが、無かつたとみえる。

驚くべし、十萬坪の松林は、忽ち貰ひ下げる事になつて、これから五十名ばかりの配下を集め、向濱塾なるものを興して、伐木を始めた。

斯ういふ風に、スラ〳〵と書き流してしまふと、頭山や進藤の歳が、いかにも老けて居るやうに思はれるだらうが、實は未だ廿二か三の若さであつたのだから、現代の靑年に比べて、あまりの相違に驚く。

頭山は、塾から離れて、平尾山の麓に、別の住居をつくつて居た。塾の方には、進藤が大將で、宮川や奈良原が、相談役の格で、その下には、大原義剛、月成勳、藤島一造、來島恒喜などが居て、伐つた松は、木材として賣るのもあり、普通の薪として捌くもあつて、一同の奮發は、大したものであつた。

朝の一としきりは、劍術や柔道に努め、夜は讀書を怠らず、ひとへに人格の修養に盡して、他日の風雲を、待つて居たのである。

人が、單に人を崇敬する、といふ事は、純理から見て、甚だいかがはしいものではあるが、各人の頭腦から、感情といふものを、取除くことの出來ぬ以上、それを惡い、といふた所で、如何とも致方なく、矢張り人が人を崇敬するのは、よい事として、取扱ふ外はあるまい。

茲に、純理を離れて、之れを實際問題として考へても、人が人を、崇敬する事に依つて、一家の平和も保てるし、

一國も靜かに治まつてゆくのである。

けれども、それが、極端に走ると、却て爭鬪の緒となつて、互に崇敬する人の爲めに、生命を捨て、爭ふやうな事にもなる。その點から考へると、英雄崇拜にも、自から局限する所がなくてはならず、人を崇敬する場合にも、面倒ながら各自の深い考慮を、拂ふ必要はある。

西鄕を崇拜するものには、熱情の人が多く、理性の人は少なかつた。稀れには、理性の人も在つたが、その大多數は、熱情の人であつた。

西鄕は、全體どちらの人であつたか、それは能く判らない。時には熱情の人の如く、また時には、冷靜水の如き事もあり、まことに不思議な人であつた。

全國を通じて、西鄕を崇拜する人は頗る多く、殊に石川縣の士族には極く少數でこそあつたが、却々熱烈の信者があつて、西鄕の擧兵を聞くと、すぐに、應援に出かける覺悟を有つものが、各所に集つて、その準備にかゝつたけれど、種々の障害が起つて、その企ては、みな破れてしまつた。

そのうちに、西鄕の討死と聞いて、その連中が、要路の顯官を斃さう、といふ計畫をはじめた。

島田一郎、長連豪、脇田功一、杉村文一、淺井壽篤、杉本乙菊の六人が、先づ大久保內務卿を殺すつもりで、東京へ出かけた。その背後には、陸義猶、松田克之等の連中が、十數名控へて居た。

終に、明治十一年五月十四日、麴町の紀尾井坂に於て、大久保を暗殺してしまつた。その顚末は、大久保遭難の條に、くはしくいふてあるから、茲には省略する。

頭山と進藤は、此事を聞くと、すぐに東京へ乘出す事になつた。

『オイ、進藤ッ』

『何ぢや』

『大久保が、殺られたさうぢやよ』

『うむ』

『これで、天下の形勢は、少し變るぢやらう』

『さうさな』

『どうぢや、東京へ、行つて見ようか』

『よからう』

其翌日、兩人は、東京へ出かけた。

出發に臨んで、塾のものを五六人呼んだ。來島と大原も、そのうちの一人であつた。

『東京から電報をうつたら、すぐ出かけて來るやうに、支度して置け』

といふのであつたが、詳しい事は聞かずとも、二人の意中は、よく解つて居るから、一同は『承知』の旨を答へた。

大久保が殺られて、動搖しかけた形勢は、忽ち落付いて、何事もなく過ぎた。

東京へ着いて、しばらく宿屋に居た二人は、やがて牛込の佐内坂に、一軒の家を借りて、同志の集合所に宛てた。

的野半介、月成勳、藤島一造、伊地知迂吉を始め、いづれも筑前のものばかりで、相談する所は、政府改造の一事であつた。

此時に、頭山は、左の中指を切り、進藤は、前齒を一枚折つて、互ひに盟を立てた。

『一身を犧牲にして、國家の爲めに盡す』

といふのであつた。

政府の內部は、大久保を失ふて、いよ〳〵堅くなつた。伊藤博文は、大久保の跡を襲ふて、內務卿の椅子に就いた。

その頃から、藤人の勢力は、漸く衰へて、長州人の勢力は、頗る強くなつて來た。

けれども、藩閥の勢力を維持する、といふ點に於て、薩人も、癇癪を抑へて、長州人の後から、尾いて行くので、政府の內部から、毀れてゆくやうな事は、どうしても無い、と見るのが當然であつた。

そこで、頭山の一派は、廣く同志の結束を求めて、外部から破壞してゆく事にきめた。その手順としては、頭山が自ら地方へ出張して、同志を尋ねる事を第一として、先づ東北地方へ、出かける事になつた。

彼が、河野廣中と、深く相知つたのは、此時のことである。それから一旦、東京へ歸り、更に東海道を經て、四國へ渡つた。

丁度、此時に、板垣は、高知へ歸つて居たので、頭山は、板垣に就いて、だん〳〵意見の交換をして見たが、

『政府の內部は、存外に堅く、且つ今日の如く、兵備も充實して來ては、單に悲憤慷慨の議論のみでは、とても倒し得まい。況して、腕力に訴へて、いかに迫るも、その力は及ぶものでないから、此上は、全國に反政府の氣運をつくり、國民協同の力を以て、當るの外はなく、それには、鞏固なる團體を組織するのが、差當つての急務である』

といふ事に決した。

箱田が、獄を出て、福岡へ歸る頃、頭山も、東京から歸つて來て、博多の本町に、向陽義塾なるものを興した。

時に、高知の立志社から、楠木枝盛や、北川貞彥が、遊說にやつて來たので、之れを迎へて、政談演說會を開いてさかんに反政府の氣を吐いた。

頭山は、鹿兒島へ乗込んで、大いに同志を求め、さらに熊本へ引返して、反政府黨の糾合に、その赤誠を吐いた。

けれども、頭山の努力した割合に、反響はなかつた。

所へ、福岡から急使が來て、箱田の一派と、平岡浩太郎の一派が、漸く反感を抱いて、互ひに軋轢を事として居るといふ事を傳へたので、急ぎ旅裝を整へて、福岡へ歸つて來た。

そこで、頭山は、先づ平岡に逢つて、

『かゝる時局に面して、鄉黨、互ひに反目するは、甚だ不可である』

との意見を唱へて、平岡が箱田と折合ふべきを說いた。

平岡も、終に頭山の說を容れて、箱田との會談を承知したので、今近の感情は一掃されて、兩派の合同は、實現した。

此結果として生れたものが、玄洋社であつた。社長には、平岡を推し、箱田と頭山は、顚問の格で、一切が平和のうちにすまされた。

皇室を敬戴す可し
本國を愛重す可し
人民の權利を固守す可し

右の條々、各自の安寧幸福を保全する基なれば、熟望確護し、子孫の子孫に傳へ、人類の未だ此世界に絕えざる間は、決して之を換ゆることなかる可し。

若し、後世子孫、之れを苛戾せば、粹然たる日本人の後昆に非らず矣。嗚呼服膺す可き哉此憲則。

是れが、玄洋社の精神であり、且主義であり、之れに仍つて、社員のすべてが結束されて居たのである。

その後ち、平岡は、筑豐の炭山に手をつけて、實業界の人となつた。その跡を引受けたのが、箱田であつた。箱田の死後、頭山が社長に推されて、爾來二十年の長きを、彼の力に依つて、維持された。頭山が、東京へ移り住むやうになつてから、進藤が社長として、今日に至つたが、進藤も、今では隱居して、玄洋社は、依然として殘つて居る。

大隈條約の際は、未だ頭山が、社長になつて居て、その配下には、慓悍決死の志士が、頗る多く在つて、玄洋社の名を、聞いた丈けで、政府筋のものは、身慄ひをする位であつた。

的野半介は、頭山と、最も古い關係があり、社員中の先輩の一人であつた。來島も、また其頃は、的野姓を、名乘

つて居て、半介とは、殊に親交のある間柄であつた。

半介は、二三度も續いて、議會へ出て居るので、よく人に知られて居たが、殊に、江藤新平の爲めに、十數年の苦心を以て、其履歷を調べ、且功績を擧げ、或時は、議會の演壇に、那の怪氣焰を吐き、また江藤南白といふ、書物を編纂して、江藤の偉大なる功績を稱し、終に贈正四位の恩典に浴させる迄、江藤の爲めには、よく闘つて、長閥の山縣等を往生させた、といふやうな事も、やつて居る。

半介が、若松に居るのを、恒喜が尋ねて來て、

『急に東京へ行かう、と思つて、けふは相談にやつて來たのぢや』

と、いふを聞いて、半介は、ぢつと、恒喜の顏を見つめた。

『何の用事でゆくのか』

『頭山が、行つて居るから、ちよつと尋ねよう、と思つて』

『イヤ、さうぢやなからう』

『えツ』

『目的は、外にあるのぢやらう』

『……』

『立派な覺悟ぢや、男らしくやつて見ろ』

『ふーむ解つたか』

『それ位の事が解らんで、どうする』

『さうか』

急に、半介は、四邊を見廻して、聲をひそめた。

『大隈を殺ツつけよう、といふのぢやらう』
『さすがに、よく當りをつけたな』
『君の覺悟は、實に立派ぢやが、是れは容易な事ぢやないから、しつかり考へてゆけ』
『我輩も、充分に考へてからの覺悟ぢや。必ずやつて見せる』
『何か言ふことがあるなら、聞いて置かう』
『實は、此覺悟はしたけれど、一つの心懸りがあるのぢや』
と、恒喜は、眼を伏せて、考へに沈んだ。
『親の事か』
『うむ』
『可し、引受ける、決して心配するな』
『それさへ引受けてくれたら、此世に思ひ殘すことは無い』
『頭山や進藤も居るが、己れは己れで、力の及ぶ限り保護するから、安心しろ』
『そりや有難い、何分頼む』
條約問題の起つて、輿論がやかましくなる時分から、玄洋社の連中も、しきりに反對の運動を、つゞけて居たが、どうしても大隈が、輿論に聞かずして、不利の條約を結ぶ、とあつては、國家の爲め、之れを看過すことが出來ぬ、といふ說は、社內の一致した意見であつた。
全國の同志から、條約改正中止の建白書が、續々出て在るのみならず、其他の方法を以て、反對の意見を表示して居るのであつて、新聞の議論も、殆んど反對に傾いて、僅に三四の新聞が、改正案を、支持して居るに過ぎなかつた。
前回にも、一と通り其次第を述べてある如く、官吏のうちにも、公然反對するものさへある勢ひであるのに、大隈

は、頑として反省しないのであるから、此上は、逆手を用ひて、中止せしむるの外はない、といふのが、玄洋社の一致した、意見であつた。
恒喜の覺悟は、社員の意見を代表したものであるが、さればといふて、決議の上の事でもなく、誰れと相談したのでもない。恒喜が、獨りで考へて、獨りで決心したのである。身を以て、國に許す、志士ではあるが、さすがに兩親の老後が氣懸りになつて、之れが爲めに、決心が幾分は緩む、そこで多くの友人中から、半介を見立てゝ、兩親の身の上をたのむつもりで、若松へ出かけたのであつた。
八月十七日の夜、博多丸に乘つて、恒喜は、いよ〳〵東京へ向ふ事になつた。半介は、よく事情を知つて、之れが一生の別れとしての見送り、大原や月成は、恒喜の平生から考へて、また昨今の言行から推して、何か深い覺悟を持つての上京と、只だ其れだけのことを、思ふての見送りであつた。
半介は、門司まで送つて別れた。それからは恒喜が、只た一人になつて、狹くるしい船室のうちに、默然として考へ込む。風光の美しい瀨戸內海も、彼の爲めには、一顧の價値すらない。
『風蕭々易水寒、壯士一去還不歸』の故事を、坐ろに想ひ出て、只管に考ふる所は、唯だ決行の刹那の事ばかりであつた。

一五

頭山を初め、玄洋社の同志は、東京にも澤山あつた。けれども、來島の上京が、どういふ目的であつたか、といふ事を、よく知り得たものは、ほんの五六人に過ぎなかつた。
條約改正に對する、非難が高くなつて、反對運動が、はげしくなるにつれて、警視廳の役人が、眼を光らし始めた。今は、どういふ風になつて居るか知らぬが、昔は、注意人物帳といつたやうなものが、高等課に備へて在つて、い

つも二三千人の氏名が、書き込まれてあつた。

その氏名の上には、赤丸や、黑丸が、附いて居て、蛇の目のついて居るのが、見込みの最も惡いのだと、聞いた事がある。

何か事變が起ると、その帳面が開かれて、大凡の見當は、それに依つて定まる。すぐに偵吏は、見込みをつけた人に、張込みをかけて、證據を得ようとして、焦るのであつた。

其時分から、警視廳の慣用手段として、よく使つたのが、スパイであつた。政治運動を、常業のやうにして居るものを、金の力で引付けて居るのもあり、然うでなくして、全くのスパイ營業者を、使つても居た。

舊幕時代に、岡ツ引が用ひた手段で、惡い事をする奴を、助けて置いて、それを手先に使ふ、といつた遣方は、明治になつてからも、傳統的に、用ひられて居る。

どうせ、金が欲しさに、人の秘密を捜つて、こつそり官廳へ訴へる、といふのだから、人間としての品格を、持つて居る奴ではないが、それにしても、同志のやうな顏をして、友達の秘事を、密告するのを商賣のやうにして居る奴は、實に卑むべきものであつて、人間の風下にさへも、置けない輩である。

昨今になつて、問題を惹起したのは、警視廳のスパイ政策とかいふものであるが、私等の眼から見る時は、何も珍らしい事ではなく、古い頃から行つて居た事で、疾くの昔に、そんな手段は、廢めて居なければならぬのであつたが、スパイを、使つて居ると、あまり頭腦を惱ませずに、樂々と仕事が運ぶので、相變らず古い手を、その儘に行つて居たのである。

警視廳には、澤山の機密費といふものがあつて、その使ひ拂ひは、誰れにも說明せずにすむ所から、質のよくない役人が、幹部にはいり込むと、公務の外の遊興費に、使ふ事もあり、極く品格の下等な奴になると、自分の小使錢に使ふて居るのもあつた位で、つまり、機密費の多くあるのが、躰然の根元になるのである。

政治運動をして居るものゝうちにも、極めて卑しい奴があり、その金を欲しさに、何等かの機會を捉へては、役人に近づき、種々の口實を設けて、いくらかの金を、貰つて來るものもある。

始めは、小使取り位の心持で、斯うした事を、やつて居るうちに、いつか本物のスパイになつて、それを常業の如く爲るやうになる。役人の方でも、左樣なつて來るのを、待つて居るので、何かの働きをした時には、存外の褒美をやる事にして、いよ〳〵深海へ、引ツ張り込むのだ。

警視廳が、公然使つて居る役人を、目指した方面へ、入り込ませて、それの力に依つて、秘密をたぐり寄せるのは決して惡い事でない、と思つて居るが、役目の上に、何等の責任も無い、スパイを使ふ事は、もう大概にして、廢めた方がよい、と思つて居る。

古い時分の有志家で、今は立派な代議士に、なつて居るものにも、スパイを、やつて居た奴のある事を、著者は能く知つて居る。

自由黨や改進黨のうちにも、さうしたスパイが居て、黨内の機密をさぐつては、警視廳へ密告して、いくらかの金を貰つて居たものが、可成りに多く居たことを、今から考へて見て、遠島事件や、小橋事件を、聞いた時、私は、ひそかに苦笑を、禁じ得なかつた。

來島が、東京へ着いてから、しきりに旅宿を變へて居たのは、スパイの尾けるのを、避ける爲めであつた。

警視廳の眼は、啻に來島ばかりに、光つて居たのでなく、各方面の所謂危險人物に注がれて居た。注意人物帳は、いくたびか、くり返し〳〵しらべられては、怪しいと思ふ人に、偵吏を、尾けて置いたのである。

玄洋社、盈進社、此二つには、殊に注意を拂つて居た。それから、自由黨の壯士には、深い注意を怠らなかつた。

盈進社は、金澤の壯士團であつた。遠藤秀景といふ豪傑が、之れを率ゐて居たが、玄洋社と、並稱されたほどに、

はげしい人物の集團であつた。

伊藤は、大磯から出て來た。同時に、井上は、磯部から歸つて來た。それから二人は揃つて、黒田總理大臣を訪ねた。

『餘りに輿論がやかましいから、條約改正は、一時中止して置いて、世論の鎮まるのを待つてから、更に談判を、再び開くやうに致したら、どうであらうか』

といふのが、二人の意見であつた。

けれども、黒田は、すぐ其れに、同意はしなかつた。

『つまりは、外務大臣の所管の事であつて、殊に、外相の身に取つては、重大な問題であるから、たとへ總理大臣と雖も、隨意の取計ひは出來ぬ。併し、貴意の在る所を、一應は大隈へ取次ぐ事にしよう』

『併し、君は、どう考へるか、それを聞いて置きたい』

『我輩には、別に是れといふて、語るべき意見はない』

『どうも此儘、談判の進行をしてゆくと、容易ならぬ事態になりはしまいか、と思ふから、斯ういふ事も言ふのであつて、その點は、深く御諒解を願ひたい』

『兩君の誠意の存する所は、よく解つて居るから、それを、彼是れ思ふのではないが、何しろ大隈の決心はなか〳〵強いものがあつて、容易に思ひ止まるまい、と推察される』

『それは、困つたものだ。政治家の覺悟は、そのくらゐ強くなければならぬが、國民の輿論も、少しは考へる必要があらう』

『新聞や演說の事は、よく知つて居るが、國民一般の意見も、それと同じやうには思へない』

『しかし、國民の意見は、新聞と演說に依つて、代表的に、現はれて來るのであるから、氣して輕んずる事は出來ぬ』

『成る程。よく解りました』

それから雜談に移つて、二人からは懇々と、民論のある所を說明して、その日は引取つた。

二三日經つと、黒田から、使ひが來た。

『今晩は、大隈も來る事になつて居るから、ぜひ揃つて來てくれ』

といふ事であるから、二人も、行く事にして、其晩は、黒田の立會で、大隈と會談をする事になつた。

黒田といふ人は、元來が、政治家でなく、軍人肌の豪傑氣分を、持つた人である。政治といふ事に就いては、深い理想もなく、格別の意見は、持つて居なかつたが、然諾を重んじて、人を信ずるの風があつた。

維新の際に於ける、各人の經歷からいへば、大隈が、一番の後輩である。世間の人は、歷史の事實を無視して、大隈を、維新の元勳と謂ふて居るが、それは出鱈目であつて、維新の元勳ではない。大隈は、明治政府が出來てから、中央の舞臺へ乘出して來たので、その前には、長崎に居て、大局の運動には、少しも關係のなかつた人である。

その點になると、井上や伊藤の方が、遙かに先輩であつて、此二人は、安政の昔から、國事について奔走して居る。イギリスへ密航したのは、文久三年の春であつた。

井上の祖先は、毛利と覇を爭ふた名家で、毛利の家臣になつてからも、特別の取扱ひをうけたほどである。伊藤の出身は、元來が百姓であつたから、門閥や系統を、やかましくいふた時代の人としては、あまり重く見られて居なかつたけれども、安政の當時、まだ一青年にして、士分に取立てられたほど、熱心に働いたものである。

大隈は、それに比べると、ぐツと遲く出て來たのであるが、長崎に起つた、ヤソ退治に關係があつて、之れが國際問題になつた時、當面の責任者として、京都へ呼出され、イギリス公使のパークスを對手に、談判の衝に當つた。

その際に、大久保や、木戸に知られて、初めて參與の職に就いたのである。井上と同列になり、伊藤よりは一枚上

になつて、中央の政治に關係を有つたのが、立身の初めであつた。

政府が、東京へ移つてから、大久保は大藏卿になり、井上は、大藏少輔になつた。薩長の權力を、片寄らせぬ爲め、大久保は、井上の少輔たる事は許したが、しかし、井上を信用して居るのではない。井上は、武士に似合はず、算勘のよく解る男で、利害に依つて進退するといふ風のあるのを、大久保は、頗る嫌つて居たから、井上に對しては、少しも油斷をしなかつた。

岩倉大使に從いて、洋行する事になると、大隈を引上げて、大藏事務總裁といふ役に着かせ、之れを、井上の目付格にして、置いた位である。

大隈が、後に大藏卿になつたのは、全く是れが原因であつて、いつか知らず、井上や伊藤と、立並んで行くやうになつた。

井上には、自我の念が強く、敵も少なからず有つたので、一般の批評は、あまり良くなかつた。伊藤は、八面玲瓏の性質で、物事に凝滯せず、存外に、公平な所があつて、人の世話も能くしたけれど、強ひて乾兒にしようといふやうな事はなく、折角に育て上げたものでも、厭になれば直ぐ捨てゝしまふ、と、いふ風があつた。其點になると、山縣や大隈とは、大分に違つて居た。

斯うした二人を相手に、大隈は爭つて來たのだから、水際立つて、偉いやうにも見えたのである。

井上は、大隈に對すると、先輩面をして、押付けようとするが、伊藤は、どこ迄も、議論で爭つて行く。大隈は、また那アした氣分の人であるから、『何の糞ツ』といつた風で、三人が寄れば、すぐに火花が散る。

黑田邸の會合は、大隈と伊藤の議論で、夜を徹した。大隈の決心が強くて、井上の怒聲も、劃合に利目がなかつた。黑田は、單に立會人といふ格で、結局は、大隈の主張を、抑へ付け得なかつた。

大隈が歸ると、伊藤は黑田に向つて、

『どうも、那アいふ風に、氣ばかり強くては、致方がない』

と、呟くやうにいふた。

『議論な、強かのう』

『自分の議論ばかり突ツ張つて、他の說を、耳に入れぬから、困る』

『行る丈け行らせる外は、あるまい』

『併し、人心の歸向も考へねば、取返へしのつかぬ事になるから、我輩は、それを憂へて、言ふて見たのぢやが、とても不可ん』

『己いどンからも、猶ほいふて見よう』

『どうか、左樣して貰ひ度い』

井上は、橫合から口を入れて、

『まア行らせて見るさ、慫々する眼に逢つてからでないと、彼れには判るまい』

といふた。

大隈の剛情には、さすがに二人も匙を投げて引取つた。

小久保喜七といへば、古い自由黨の一人として、相當に人にも知られて居る。今では貴族院議員になつて居るが、貴族院に居たのでは、手も足も出せまい。

利根川の流れに沿ふて、長い堤が築かれ、堤の下に、栗橋といふ町が在る。それから少し離れた所に、中田町といふ所があつて、小さい土地ではあるが、女郎屋の在る爲めに、多くの人に知られ、茨城縣の管轄に屬して居る。

小久保は、女郎屋に生れて、それをひどく、恥ぢて居たやうだ。けれども、彼の友人は、誰れ一人として、之れが爲めに、彼を卑しめるものはなく、その正直な氣性に對しては、却つて同情する位であつた。

西洋の書物は讀めないが、漢學は少しばかり修めて居る。あまり巧くはないが、漢詩も作り、文章も書く。

演說は、彼の最も得意とする所で、未丁年の頃から、しば〳〵演壇に立つて、先輩を感心させた。その割合に、進歩の跡はなく、昔も今も、演說振りは同じ事で、明治十七年頃の、古い型を其儘に、手振りなり、口調なり、全く舊套を守つて居るので、昨今は、餘り他からの批評も、受けぬくらゐになつてしまつた。

下館の有爲館と、聯絡を取つて、中田町にも、文武館なるものが出來た。その館長になつて居たのは、小久保であるが、實際の仕事は、淵岡駒吉が、やつて居た。

淵岡の名は、小久保の如く、一般には知られなかつたが、同人の間には、却つて重きをなして居た。歳の若いのに、沈着な質で、多くの場合、只だ默々として、人の發言を聞いて居るのみであつた。

けれども、自分が一たん斯うと決めて、何事かを、いひ出した時は、必ず押通してゆく、といふ風があり。訥々として語る說には、一種の威力を、持つて居て、終には對手のものを、抑へつける丈けの熱が有つた。

明治十九年の九月下旬に、加波山事件なるものが起つて、自由黨の志士が、僅に十八名、加波山に本部を設け、山下の警察署へ、爆裂彈を投じて、政府の大官を戰慄せしめたことがあつた。

事の起因は、栃木縣廳の移轉式を、宇都宮に於て催し、三條相國を始め、大臣參議を迎へる、といふのを、漏れ聞いて、大暗殺を行はう、としたのであつたが、製造中の爆裂彈が、破裂した事から、忽ち發覺して、先づ鯉沼九八郎が縛られた。

其處で、殘黨が下館へ遁れて來て、富松正安の一派と共に、加波山へ登り、政府顚覆の檄を飛ばし、革命の詩を唱ひつゝ、警察署の破壞をはじめたのであつた。

當時の縣令、人見寧が、之れを聞いて、狼狽の餘り、『自由黨の壯士三千、加波山へ集りて、政府顚覆の暴擧を起す』といふ意味の電報をうつて、物笑ひのたねを蹈したのが、此時であつた。

茨城と栃木の二縣へ跨り、自由黨員の大多數は囚はれて、獄中の人となつた。鯉沼の家から、下館へ落ちてゆく、志士の一部は、中田町へ、立寄つて居るので、文武館の連中にも、嫌疑の雲は掩はれて、續々拘引された。

小久保や、淵岡も、此時には、一番に捕はれて、下館へ送られ、拷問にひとしい取調べをうけたが、幸ひにして罪は遁れた。

之れが爲めに、有爲館も、文武館も、解散の外なく、殘る同志は、多く東京へ出る事になつた。小久保も、淵岡も、それから後ちは、東京に定住する事になつた。

根津八重垣町に、小久保が家を持つて、淵岡は、同居して居たのである。

淵岡の友人に、葛生玄晫といふものが在つた。之れも淵岡と同じやうに、あまり口數を利かず、さアとなつたら、死を顧みず進む、といつた風の男であつた。

『オイ、淵岡ッ』

『やア、葛生か』

『少し話がある、ちよツと、出てくれんか』

『うむ、宜しい。どこへ行くのか』

『まア、どこでももよいから出て來い』

葛生は、上り口の土間に、立つて居る。廣くもない家であるから、ちよツと座敷へ通つてもよいのに、不精な葛生は、土間に立ちながら、呶鳴つて居るのだ。

『さア、行かうか』

淵岡が出て來た。葛生は、一足さきに立つて、ズン〳〵ゆく。

『オイ〳〵、人を引ッ張り出して、どこへ行くのか』

淵岡が、聲をかけるのを聞き流すやうにして、尻目にかけた儘、

『だまつて、尾いて來れば、判る』

と言つて、矢張り急ぎ加減にゆく。

寺や墓場のつゞいて居る、細い小路を、右に左に拔けて、谷中の天王寺へ、出て來た。

『此邊が、よからう』

と言つて、右側の松の下に在る、大きい石に腰を下した。すぐ眼の前に在るのは、赤井景韶の碑である。大臣暗殺の計畫者として囚はれ、石川島の監獄を破つて遁れ、その晩、千住の田圃中で、俥夫を殺して逃げたが、遂に靜岡縣の島田で押へられ、東京へ送り返されてから、死刑になつた人である。

『葛生、用事といふのは、何だ』

『これだ』

と言つて、赤井の碑を指した。

『えツ、これだ？』

『結局は、これだ』

葛生は、謎のやうな事を言ふて、獨りニヤ〳〵笑つて居た。

『僕には、よく解らないが、全體、どういふ事なのか』

『もう理窟では駄目だ。非常手段の外に、方法はないと思つて、我輩は、すツかり覺悟してしまつた』

『さ、それが僕には解らない。何をどうしようといふのか』

『貴樣も、ずゐぶんボンヤリだな』

『なぜか』

『條約中止の一件だ』

『うむ、さうか』

『解つたらう』

『大隈を、やツつけようといふのか』

『さうさ』

『どうして、やツつけるつもりか』

『其處で、貴樣に、相談があるのだ』

『うむ、よろしい、どんな相談でも、うける』

『彈を、一つ欲しいのだ』

『彈を……』

『貴樣から、村野へ話して、一つ分けて貰つて〻れ』

『村野の手に、極製の彈が在る、と聞いて居るから、貴樣から頼んでくれといふのだ』

『その彈は、誰れが使ふのか』

『玄洋社の來島といふ男に渡すのだ』

『來島……』

淵岡は、まだ來島の事を知らなかつたので、しばらく考へて居た。

『頭山先生の率ゐて居る玄洋社の事を知つて居るだらう』

『そりや、知つて居る』

『玄洋社のうちでも、有力な一人で、來島といふ志士が、その實行に當らう、といふのだ』

『そんな立派な人物か』
『まア、我輩を信じて、諸と言へ』
『お前のことは、能く知つて居るから、それは、何處までも信ずるが、來島といふ人には、まだ逢つたことがなく、實は、名も聞いて居なかつたのだ』
『それは無理もないが、何しろ立派な人物だ、一度逢つて見ろ』
『是非、逢はせてくれ』
『しかし、一件の方は、どうだ』
『それは、宜しい』
『早速運んで貰へやうか』
『村野が、何といふか知れないが、我輩は、たしかに說きつけるつもりだ』
『それでは、來島に逢はせよう』
『さうして貰ひたい』
『貴樣の都合で、今明日のうちに逢はせよう』
『よろしく、頼む』
『それぢや、出かけよう』
『話は、それ切りか』
『是れで、もうよろしい』
『これから何處へゆく』
『飯でも食ひながら、もう少し話さう』

『さう仕よう』
二人は、これから公園を拔けて、山下へ出た。
『雁鍋がいゝだらう』
『うむ』
今では、『世界』といふ牛屋になつて居るが、一頃は、上野の名物のやうに、なつて居たのが、この雁鍋であつた。

一六

淵岡が承知すれば、村野に交渉がつくから、其處で、爆裂彈は、葛生の手に、入る事になるが、葛生は、初めから左樣考へたのではなく、淵岡と、加波山事件の關係を、知つて居るから、爆裂彈の製造法位は、必ず心得て居るに違ひない、と思つて、相談をしかけたのであるが、淵岡は、葛生からの話を聞いて、とに角、引受けて置いて、之れを村野に、相談して見たのである。後には、貴族院議員になつて、そんな事は知らぬ、といつた風で、すまして御座るが、古い自由黨の歷史を、くり返へせば、村野常右衞門の名は、自然に出て來る。

著者が、未だ肩上げの取れぬ、少年時代に、村野は、既に神奈川縣會議員であつた。寡默重厚の紳士で、昔から左樣した風の人であつた。

大井憲太郎、新井章吾、小林樟雄等の志士が、朝鮮の獨立を策し、金玉均、朴泳孝を扶けて、支那政府の干涉の手から、朝鮮を引離してやらう、と考へたのが、大阪國事犯の起因であつた。名は、大阪國事犯であつても、實は、朝鮮の獨立運動であつた。自由黨の壯士、約百名が、それに從つて、朝鮮へ乘込まう、としたのが露見して、捕縛になつたのである。

いよ〳〵朝鮮へ乘込んで、獨立運動を始めれば、支那を相手に、一と戰ひせねばならず、假りに其事はないとして

も、朝鮮政府の大官が、必ず兵力を以て、それを拒むに違ひないから、多少の武力は、持つて居なければならぬ、といふ所から、爆裂彈の製造にかゝつた。それと同時に、軍用金の調達をせねばならぬ事になつて、金を得る道が無く止むを得ず、强盜を始めた。

『切取り强盜は、武士の習ひ』といつた樣なことが、昔から傳へられて居る。それから、『目的の爲めには、手段を選ぶな』といふやうなことも、自然に敎へられてある。

尤も、國事犯に强盜は、殆んど附物の如くなつて、どの國事犯にも、少し大がゝりな事件になれば、皆やつて居る。生命を捨てる覺悟のあるものに、名譽を顧みぬ位の、決心はつく筈だ。そこで、斯ういふ企てになると、金を得る爲めに、强盜を働くことは、殆んど茶飯事の如く、見られて居るのが、常例であつた。

村野は、それの指揮をして、奪つて來た金を、それといはずに、大井の手元へ、屆ける役を、受持つて居た。晚年の村野を見て、さうした前科のある、といふことを想ふものは、恐らくあるまい。那の純潔な志士に、そんな履歷のある筈はない、と誰れにしてもいふであらうが、實は、それが事實なのだから、面白いではないか。

出獄の後ちも、村野は、憂國の志士として、鄕黨の間にも、重きをなして居た。

三多摩の壯士といへば、全國に鳴響いたものであるが、それは、石阪昌孝に德望のあつた爲め、堅い結束が、出來て居て、自由黨の中堅勢力になつて居たが、石阪の背後には、村野が居て、よく之れを扶け、別に森久保が、村野と相並んで、壯士の指揮役をして居たのである。

村野と森久保は、管鮑の如き交情であつて、影の形に從ふやうに、いつも兩人は、一しよであつた。

乍併、兩人の性格は、非常に異つて居た。村野は、前にいふたやうな人物であつたが、森久保は、全くそれと違つて、よく辯じもするが、またよく働く、といつた風の人であつた。

村野の德は、森久保には無い。けれども、森久保のそれと嫌は、村野の有せざる所で、兩人の性格には、大分の隔り

があつた。

どうしても、仕事を多く爲るものには、どうしても敵のあるもので、之れは止む得ざる事である。森久保には、ナカ〳〵に敵が多くて、其死後に及んで、猶ほ非難するものが、有る位だ。けれども、其非難は、政敵が爲めにするの非難であつた。多くは中傷する爲めの非難であつた。森久保には、稍や遺過ぎたことはあるが、吹聽されるほどの惡人ではない。

東京市會へ出て、勢力を有つて居た時代にも、專橫といへば、それに似た事はあつたが、その代り、市會の大勢は森久保の盡力で、いつも綺麗に、纏りがついて居た。昨今のやうな醜體は、藥にしたくもなかつた。さうした點に就ては、偉い所のあつた人である。

市會の事を論ずるものが、多く昔の常盤會をいふけれど、事實を知らずに、いふものばかりで、出鱈目も甚大しい。常盤會は、星亨の死後につくられたものであるのに、星のつくつたものゝ如く、いふ人もある。猶ひどいのになると、政友會を攻擊する、材料に使ふものもある。所が、常盤會の幹部には、肥塚龍も居たし、また丸山名政も居たのだから、可笑しいぢやないか。

肥塚や、丸山は、改進黨以來の人で、自由黨系の政友會には、何の關係もなく、却つて反對の立場に、居た人達である。其頃の市會には、昨今の如き、政黨の色彩が、甚だ薄かつた。森久保が、肥塚や丸山と、一團になつて、市の仕事をして居たのでも、よく判る。

然るに、獨り森久保のみを、攻擊して居たのは、頗る不當であつて、常盤會が惡ければ、肥塚や丸山も、惡いといふ事になるのだ。

島田三郎などは、深川區に於て、森久保を攻擊して、すぐ其足で、赤坂區へ行つて、肥塚の頌德演說を、やつて居たものだ。矛盾も甚だしく、正義の使ひ分けも、極端といふべきである。

村野は、市や府の政治に關係なく、只だ政友會の代議士といふ丈けであり、殊に、森久保の如く才人でないから、どの方面にも向く、といふ人でなく、また辯舌に、拙なる所から、多くの場合、沈默して居るので、絶えて敵がなかつた。自分の長所と短所を、よく知つて居て、苟も僭上沙汰のなかつた爲めに、尙更ら衆望をつなぎ得て、どの方面の人にも、氣受けのよい人であつた。

曾て、大臣に推された時にも、自分の任でない、として、堅く辭退してしまつた。衆議院議長に、推された時も、同樣の態度で、やはり受けなかつた。最後に、貴族院議員に推薦されて、是れは澁々ながら受けた。八王子の選擧で八並某の爲めに負けたが、これは八並が勝つたのでなく、村野を推す人に對する、反感の投票が、多く八並に、入れられた結果である。

村野は、良い人として、八王子邊のものは、今でも、左樣思つて居る。捨てられた村野に罪なく、捨てた八王子の人が、間違つて居たのである。

村野は、いつでも、爆裂彈の用意位は、して居た。二つばかり持つて居たのを、森久保に渡して、保管を依頼した。

森久保は、それを受取つて、鄕里の或所に、埋めて置いた。どんな人にしても、此兩人を見て、さういふことをする人だ、と思ふものはあるまい。

淵岡は、村野を、小さくした型の男で、村野の淵岡を信ずることも、ナカ〳〵深かつた。

葛生から、話を聞いて、淵岡は、堅い決心をした。

『宜しい。一發丈けは引受けて、都合してやらう』

『どうか、何分たのむ』

『その前に、一度でよいから、來島といふ人に、逢はせてくれまいか』

『承知した。明日にも打合せておいて、紹介しよう』

『それぢや、君の便りをまつ事にする』

『宜しい』

葛生と淵岡は、それで別れた。

來島の風格は、古武士を其儘であつた。淵岡は、たつた一度で、深く信じてしまつた。併し、此相談は、考へるほど至難しい。誰れに話してもよい、といふことでないから、相當に苦心はしたが、遂に村野へ話すべく、すつかり覺悟をきめた。

『ねえ、村野さん、さういふ事情から、引受けて來たのですが、何とかして一發だけ作る、工夫はありませんか』

『左樣さな』

『加波山事件の時、僕は、誰れからも製造法を、聞いて置かなかつたので、實は困つて居るのです』

『……』

『あなたは、大阪事件の際に、それについても、研究したと聞いて居りますが、もし御承知ならば、敎へて戴きたいのです』

『製造法は知らないが、彈なら持つて居る』

『えツ、持つて居られる、といふのですか』

『うむ』

淵岡の膝は、思はず進んだ。

『そ、それを讓つて戴けますまいか』

『宜しい、ゆづりませう』
『有難い、どうか讓つて下さい』
『承知した。明日來て下さらば、取寄せて置く事にしよう』
『手元には、無いのですか』
『うむ、外へ預けてある』
『それぢや、明日來ます』
『來島といふ人は、本當にやる氣かな』
『大丈夫、請合ひます』
『さうか、それぢや承知した』
其翌日、淵岡の手へ、村野から彈は渡された。淵岡の手から葛生へ渡したので、來島の目的は、果し得る事になつた。

一七

警視廳の眼は、疾くから光つて居た。高等課の警部や巡査は、少しの油斷もなく、各方面の有志家に注意して、密偵の苦心は、一と通りでなかつた。

昨今の警視廳は、その執務事項も、頗る多岐に亘つて、科學的に執務方針が、分れて居るので、非常に複雜なものになつて來たが、昔の警視廳は、甚だ簡單な組織だつた。

そのうちに於て、稍や進んで居たのは、高等課であつた。これは元來が、警視廳の設けられた原因が、國事犯に、備へる爲めであつて、一般の常事犯の如きは、全く舊式の刑事掛りに任せて、あまり力を入れたものでなく、突發した大事件は別として、平生は、どうでもよい、と云つた通方であつた。

明治二年の頃、鹿兒島縣の山下房親といふ人が、國事犯の取締りに、獨立した官廳を設けて、自ら指揮をした。それが警視局といふのであつて、引つゞき川路利良が、大警視となつてから、その規模も大きくなり、鍛冶橋内に、本局を置いて、追々に改革されてゆく、と同時に、執務事項も、擴張されるやうになつたのである。

帝都が東京に移り、明治政府も、東京へ置かれるやうになつて、二年から六年頃迄は、國事犯が、頻に起つて、どことなく不安の狀態に在つた。

德川幕府が倒れて、明治政府の起つたのは、時勢の推移から起つた、自然の結果とはいへ、實は、薩長の二藩が、相當に無理な芝居もうつて、否應なしに、押付けた傾きがあり、各藩に對する遣方にも、偏頗や我儘の限りを、行つて居るから、不平を抱くものも、全國に通じて、少なからず在つた。

雲井龍雄の事件とか、愛宕通旭の謀叛とか、中央に起つた事件も多く、地方も、可成り面倒な事があつて、少しも油斷のならぬ狀態であつたから、それ等の事に備へる爲め、警視局は設けられたのであつた。

巾着切や、淫賣の尻まで、逐ひ廻すといふやうな考へは、初めは有つて居なかつたが、國事犯の跡も、追々に消えてゆくし、世間が平穩になると、屁のやうな事件も、眼について來るので、自然と、其方へ力が延びてゆくのは、必要に迫られて、止むを得ぬ結果であつた。

それにしても、警視局の起りが、前にいふた事情からであつて、國事犯に備へるのを、主として居たから、どうしても高等課の働きが、局の中樞勢力になつて居た。

從つて、高等課には、敏腕の人が、多く居る譯で、頭腦の良い人が居た。昨今のやうに、頻繁に交迭も行はれず、役人も、居心地よく長勤めをするから、事情にも精通して、人と人との關係も、詳しく知ることが出來た。

同じ人が、同じ所に、長く勤めて居る爲めに、多少の情弊も生ずるのであらうが、その代り、總ての事情に明くな

つて、いざといふ時には、當りをつけることも疾く、事件の仕上げが、手際よく運ばれる、といふ利はあつた。

其頃の高等課に、長谷川守三といふ警部が居た。痩ぎすな體で、神經質らしい所はあつたが、存外に物判りのした他の世話もよくすれば、職務にも、熱心な人であつた。

數年前に辭職して、近頃では、大森邊に、氣樂な晩年を送つて居ると、聞いて居るが、何しろ二十幾年かをつゞけて、高等課に居たので、政界に動いて居る人の內情には、實によく通じて居た。

注意人物帳と、いつたやうな物が、高等課に、備へて在る。政界に動いて居る人の性質から、家族の關係、さては他の有志家との因緣など、その帳面を見れば、どんな事でも判るやうに、なつて居たのである。

長谷川は、今ま頻りに、此帳面を開いて居たが、別室の刑事掛を呼んだ。

『御用で御座いますか』

『うむ、少し當りがあるので、働いて貰ひ度い』

『へー。何ですか』

『大隈條約に反對して居るものゝ內で、どうも不穩な事を、企てゝ居るものがあるらしいから、骨を折つて貰ひたいのだ』

『宜しう御座います。一つ飛んでみませう』

『駿河臺の佐々木病院へ、例の頭山が入つて居るが、どうも、其れが可怪しいのだ』

『どういふ理由です』

『入院するほどの病氣はないらしいのに、入院して居るのが、どうも怪しい』

『成る程……』

『近頃になつて、玄洋社の壯士が、大分上京して來たのも、疑つて見れば疑はれる。自由黨の壯士にも、ナカ〳〵

怪しい奴もあるが、玄洋社の方は、一層怪しいと思ふ。頭山は、その社長で、これが頗る怪しいのだから、君は、今日から、病院詰をやつてくれ』

『ハイ』

『頭山の見舞に、どんな奴が、多く出入するか、それを詳しく、探つて來て貰ひたい』

『承知いたしました』

『怪しいと、睨んだ奴が居たら、それから先のこと迄、突留めて來てくれ』

『ハイ』

『君が一人では、ちよつとむづかしい、と思ふから、誰れでも見立てゝ、連れてツてくれ』

『ハイ、それでは、行つて來ます』

『賴む』

刑事は、すぐ支度をして、出て行つた。

頭山滿は、佐々木病院へ、はいつて居た。別に之れといふ、病氣もないやうだが、入院して居たのだ。

いかに營利的の病院にしても、病氣のないものを、入れる筈がないから、どこか惡かつたに違ひないが、飯も普通に、食ふて居るし、歩行に不自由もなく、訪れて來るものがあれば、何時間でも、話込んで居る。誰れが見ても、病人らしい所はない。けれども、看護婦は二人も、附添ふて居て、藥も嚥んで居るのだから、可怪しい。

例の刑事は、病人らしく裝ふて、待合の所に、頑張つて居る。外の二人は、表門の內側に立つて、出入の人に、注意して居るのであつた。

一日の午後に、二三人の見舞が來て、頭山の部屋へ、案內された。受附へ出した名刺には、的野恒喜と記されてあつた。その外のは、葛生玄晫と、淵岡駒吉であつた。

葛生と淵岡は、かねて知つて居る、自由黨の壯士であるが、注意人物帳には、名前の上に、蛇の目の印が附いてあつた。獨り的野といふものは、どういふ人物か、よく判らない。

病室へ通されてからの狀況は、ぢきに判つた。

『三人が來ると、看護婦は、室外へ出されて、扉の締りは、嚴重に施された。ガラス窓は締切つてあるから、室内の狀況は、少しも判らなかつた』

といふのが、看護婦の語る所であつた。

夕暮になつて、燈火がつくと、的野だけが、出て來た。後の二人は、どうしたのか出て來ない。刑事は、的野の後から尾いてゆく。門を出る時に、外の刑事に向つて、

『後を賴む』

と、一言殘して、急ぎ足で、的野を、逐ふて行くのであつた。

病院を出ると、的野は、お茶水橋の方へ行くから、見遁すまいとして、刑事は、後からつゞいた。

橋を渡つて、左へ曲り、順天堂病院について、本郷臺へ、上つて行くが、足の早いことは、實に驚くほどで、動もすると、はぐれさうになるので、刑事は、一生懸命になつて、尾いて行く。

本郷三丁目を、右に折れて、切通坂の方へ行く時の速さは、また格別であつた。

總體に、足の速い人は、心がけて急がずとも、自然に速いもので、これだけは特別のものである。刑事でも勤めよう、といふ者は、みな足が速い。併し、並足の速いものと、駈足の速いものとの別は、たしかに在る。的野を尾けた刑事は、駈足も速く、並足も速いのであつたが、どうしても、的野には及ばなかつた。

切通し坂を、下りる頃には、大分遲れた。背後を、ふり返つて、的野が、ニヤリと笑つたので、刑事は、すいと姿をかくした。それが爲めに、また幾足か遲れた。

廣小路の混雜する所へ來ると、たうとう見失つてしまつた。刑事は、氣も狂ふばかりになつて、其處、此處と、見廻しながら搜したが、遂に的野を、見出し得なかつた。

『チエッ、しまつた。何といふ疾足の奴だらう』

しばらくは、四ツ辻に立つて、考へて居たが、今は詮方なく、悄然として、本局へ歸つて來た。

『長谷川さん、しくじりました』

『さうか』

『的野恒喜といふ奴を、尾けて見ましたが、たうとう逃げられてしまひました』

『何ッ、的野……』

『御存じですか』

『ちよッと待て、何だか覺えのある名だ』

と、いひ乍ら、長谷川は、手帳を出して、頻りにページを繰つて居たが、長谷川の眼は、鋭どく光つて居た。

『來島の事か、ふふーむ』

『判りましたか』

『惜い事をした』

『相すみません』

『まア仕方がない』

長谷川は、刑事を退らせて、しきりに考へ込んだ。

一八

昨今の警視廳は、役人の頭數も殖えて、高等課の如きは、殊に、國事關係のためもあらうが、目まぐるしいほどの人數に、なつて居る。

世間の事が、むづかしくなるにつれて、それを、取扱ふて居る、役人の數も、自然に殖えて來るのは、どうも止むを得ぬ次第ではあるが、さればとて、碌な仕事も出來ぬものばかり、頭數を增した所で、徒らに船頭が多くして、船を山へ上げる傾きが、ありはしまいか。

それに猶う一つは、役人の更迭が、あまりに頻繁であるために、仕事の統一と、部下の長短を知る事が、どうしても不充分である。

役人が、一つ卓子に、長く居据ることは、多少の情弊も生ずるであらうが、事に馴れて、はやく眞相を知る、といふ點に於ては、矢張り古くから居る人が、好いやうにも思はれる。

殊に、警視廳の高等課などには、上司と次席に、古い人を要する。事件の起る度毎に、一遍々々、帳面を繰つて見るやうでは、とても仕事の成績は、充分に擧るものでない。

昔は、此課に勤める、役人の多くは、長く同じ椅子に居た關係から、人と人との聯絡を知り、事件と人との經緯が判り、何事か起つた時は、すぐに當りがつく、といつた風で、成績は、よく擧つて居た。

殊に、長谷川は、生字引の名を得た位に、政界の事情に通じ、人と人の聯絡を、知つて居たので、スパイなどは使はずに、此人の受持つ事件は、確實に、且敏速に、運ばれてゆくのであつた。

頭山の擧動に、不審を抱いて、見張りのものをやつて置いたのに、來島の追跡に失敗して、歸つて來た、と聞いて、頗る失望したが、事、茲に到つては、何とも致方がないから、來島の行く先きを、突留める外はない、となつて、各署の高等課へ、それ〴〵通知を發して、大に警戒する事にした。

三四日がすると、芝の警察署へ、愛宕下の信樂館といふ宿屋から、宿泊人の屆が出て、そのうちに、的野恒喜といふ

氏名があつた。

姓は、的野とあつても、名は恒喜であるから、そこに多少の疑ひは、起る譯だ。すぐ警視廳の方へ、その報告があつた。それとなく、前の刑事をやつて、的野を見せたら、矢張り來島に違ひない、といふ事であるから、とに角、福岡の警察本部へ、照會すると、

『的野といふのは、養子先の姓で、昨今は離緣して、實家へ立戻つたから、來島といふのが、本姓である。同人は、玄洋社の壯士でも、極く古參の方で、頭山との關係は、寧ろ弟分といふ程度のもので、乾兒といふほどの相違はないが、頗る危險の人物として、當地でも注意して居る』

と、回答があつた。

於、此、警視廳の高等課では、警部と刑事が立會つて、これから先き、どういふ風に、附廻すかといふ事について、いろ〳〵相談があつた。其時に、長谷川は進んで、斯ういふ事を、いひ出した。

『これは餘程、大切な事でありますから、小官が、自身に、やつて見たい、と思ひますが、いかゞでせう』

來島に對する、警戒を自分でやらう、といふのであるから、課長も喜んで、之れを許す事にした。

『君を煩はすほどでもない、と思ふが、玄洋社の奴と聞いては、頗る危險を感ずる。殊に、並々の壯士とは違つて、相當に地位のあるものぢや、といふから、猶更ら深く、注意を拂はねばならぬ。まことに御苦勞ぢやが、君に受持つて貰はう』

『承知いたしました』

『今度は、逃さぬやうにやつて下さい』

『大丈夫です』

長谷川の平生も、よく知つて居るし、その手腕も、信頼して居るから、此事は、長谷川に、一任してしまつた。

長谷川は、これからセビロ服になつて、すぐ信樂館へ、やつて來て、主人に面會を、申込んだので、主人は長谷川を、自分の部屋へ通した。

『どなた樣で御座いますか、初めて御目にかゝります』

『我輩は、斯ういふものです』

長谷川の出した名刺を、主人が見て驚いた。その名刺には、『警視廳高等課警部長谷川守三』と刷つてあつた。

『へへゝ、あなたが、有名な長谷川樣でしたか』

『別に有名といふ譯もないが、我輩が、長谷川です』

『どういふ御用で御座いますか』

『君の所に、的野恒喜といふものが、泊つて居るぢやらう』

『ハイ』

『かねての馴染客かね』

『イエ、さうでは御座いません』

『どういふ關係で、君の所へ泊つたのか』

『自由黨の葛生といふ御方の御案内でございます』

『えツ、葛生の紹介ぢやツて……』

『へい』

今聞いた葛生が、すでに危險人物として、取扱はれて居るのだから、長谷川の耳には、强く響いた。

『葛生は、毎日來るかね』

『大概は、來ておるでのやうで御座います』

『ふふーむ、その外には、どういふ人が、やつて來るね』

『月成といふ御方が、ちよい〳〵見えます』

『はゝア、左樣か』

月成は二人あるが、どちらの月成にしても、注意中の人物であるから、いや〳〵以て、來島に對する疑ひは、深くなるばかりであつた。

『我輩は、今日から、君の家へ詰めるが、絶對秘密の事で、本人へ漏れる、と困るが、その秘密は、堅く守つて貰ひ度い。どこか、餘り眼につかぬ部屋で、出入のものが必ず通る、といふやうな場所を、選んでくれまいか』

『お泊りになるので御座いますか』

『まア、さういふ事にならう。併し、宿料は、必ず拂ふから、安心してくれ』

『宿料なんぞは、どうでも宜しう御座いますが、さういふ都合のよい、座敷がありますか、どうか、さ、どうでせうかな』

主人は、しばらく考へて居る。

斯ういふ人に、泊られる事は、甚だ迷惑であるが、商賣柄とて厭ともいへず、しきりに考へて居たが、

『それでは、一つ座敷をつくりませう』

と、いつて、女中を呼んだ。

『御用で御座いますか』

見るからに、とぼけた顏の山出し女が、丸々と太つた手をついて、主人の辭を待つ。

『楷子段の下の部屋は、どうなつて居る』

『夜具の入れてある所で、御座いやすか』

『さうだ。那の夜具部屋は、澤山物がはいつて居るか』
『夜具が二た組、はいつて居るばかりで、御座いやす』
『それでは、その夜具を、出してしまへ』
『ヒエー』
『あとを、よく掃除して、人の入れるやうに、するのだ』
『ヒエー』
『はやくしろ』
『ヒエー』
下女は、すぐ立つてゆく。
『あの外に、女は、まだ居るか』
『もう一人、居ります』
『矢張り、あゝした調子の女かね』
『否、もう一人のは、東京のものです』
『男は、幾人居るか』
『番頭が一人に、下男が一人、都合二人であります』
『君から、そのもの等へは、うまく言ふて置いて下さい』
『承知いたしました』
『ちよツとでも、本人へ知れると困るから、その邊のことは、深く注意して下さい』
『ハイ』

『それから、部屋が出來たら、そこへ、案内して貰ひたい』
『まことに汚ない所で相すみませんが、御辛棒を願ひます』
『人眼につかぬ、都合のよい所なら、どんなに汚なくても、よろしい』
『只今、お聞きの通り、夜具部屋でございます』
『結構々々、さういふ所が、好都合ちや』
『御案内いたしませう』
長谷川は、其日から、夜具部屋へ這入つて、來島の擧動を、視察にかゝつた。
薄暗い三疊の部屋で、頭の上は、すぐ階子段に、なつて居る。客の昇り降りは、可成りに五月蠅いが、それは、覺悟の上で、ぢツと辛抱して居る。
來島の部屋へは、葛生と二人の月成が、よくやつて來る。淵岡も、ちよい〳〵來るが、どういふ話をするか、それだけは、どうしても判らなかつた。
酒食や、女の事などを、話す場合には、大きな聲で、無遠慮に、やつて居るが、何事か、大切な事にでもなると、火鉢の灰を掻きならして、火箸で書いて、互ひに點頭き合つて居るのだから、傍に附いて居ても、何の事か判らないが、況して、離れた部屋に居て、それの判る筈もなく、下女に、澤山のチツプを與へて、うまく聞き出さうとしても、必要のない事ばかりを、知らせて來る。

一九

もう九月になつたが、殘暑は、いよ〳〵激しく、狹苦しくて汚ない、部屋の暑さは、一だんと酷いから、流石の長谷川も、少し弱つた。

酒は、餘り飲まない方で、體も丈夫な人であつたが、頭痛持ちであつたから、蒸暑い時に、空氣のよく通らない、狹苦しい部屋に居て、一日爲すこともなく、たゞ來島の動靜を、窺つて居るだけのことで、ずゐぶん厭な役廻りだ。

もう日の暮れに近く、燈火の支度を、始める頃になつて、どうにも堪へられなくなつたので、密と、部屋を出て、帳場の所まで、出て來た。

『オヤ、旦那』

『少し此前を、ぶらついて居るから、那の男が、外へ出るやうであつたら、すぐ知らせてくれ』

『ヘイ、承知いたしました』

長谷川は、家の前へ出て、ブラ〳〵歩きはじめた。北の方へ歩けば、佐久間町の通りで、南の方へ行けば、公園地になる。南から北、北から南へと、一町位の範圍を、徐かに歩いて居るのであつた。

狹い部屋から出て、廣い所を、歩き出したので、氣が爽快になつて、頭が冷えた爲めに、すツかり心地よくなつた。

公園の傍まで行つて、引返へして來た折柄、信樂館を出かける、洋服姿の三人、そのうちの一人は、確に來島であつた。

左右から寄り添ふて行くのは、葛生と月成光であつた。どこへ行くのか、急ぎ足で、佐久間町の方へ、ゆきかける。

『失敗ツた』

と、叫びながら、長谷川は、信樂館の玄關へ、かけ込み、かねて預けて置いた、自轉車に乘つて、すぐ出て見ると、もう三人の姿は、夕靄のうちにかくれて、さらに見出し得なかつた。

僅か二秒か三秒の間に、うまく逃げられたのだ。町の角に、俥が三臺あつたから、それに乘つて逃げたやうに、思はれる。

いづれにしても、遠くへ行く間がないのであるから、これから追ひかけても、どこかで、捜し當てるものと考へて

長谷川は、ヘビーを出して、自轉車を走らせ、東に西に、また、南と北との別なく、かけ廻つたが、どうしたものか、更に見當らなかつた。

於此、長谷川も、がつかりして、車を停めた。それが、芝口の通りであつた。

『實に早足の奴等だ。この位ゐに、骨を折らせて、さらに行先の判らない、といふのは、どうしたことか、實に不思議だ。自分から、買つて出た事件丈けに、面目次第もない譯だが、どうも致方がない』

と、獨り私語ながら、街頭に立つて居ると、向ふの家の二階から、赤い燈火が、射して居る。よく見れば、牛肉屋であつた。

『まア、とに角、夕飯でも食つて、ゆツくり考へて見よう。斯ういふ時には、餘り焦ると、却て失敗を重ねるものだ』

覺悟が決まつたので、牛肉屋の店先へ、ずツと、はいつて來た。

『入らツしやい』

と、威勢よく聲をかけるのは、下足番であつた。

『これを、どうぞ……』

下足札を渡す。長谷川が、階下を昇りながら、札の番號を見ると、『へ』の一番であつた。

人氣稼業の牛肉屋が、へといふ番號は、ずゐぶん馬鹿らしい、とも思つたが、への札を、握らせられるやうでは、來島を見遁すのも、當然であらう、と思ひ乍ら、獨り苦笑を、抑へ得なかつた。

ロース鍋と、酒は一合で、すぐ飯にしたが、元來が酒量のない人だから、すつかり醉つてしまつて、頭か、フラフラし始めた。

やがて、勘定もすませて、預けて置いた、自轉車へ、乘らうとして氣がついたのは、燈火の用意を、忘れて來た事である。

併し、警視廳迄は、一と走りだ。交番所のない所を、うまく廻つてゆけば、別に差支へもあるまい、と無燈のまゝで、自轉車を走らせた。

新橋を過ぎる時、交番所から、聲をかけられた。けれど聞えぬ振りをして、橋を渡ると、すぐ左へ折れて、今度は右へ曲つた。八官町の通りを、まツすぐに、數寄屋橋外を右へ、堀に沿ふて、眞一文字、夜の暗い中を、鍛冶橋指して、駈けつけた。

丸の内の方から、鍛冶橋を渡つて來る、一臺の俥があつた。幌を、深く下して、その内には、立派な服裝をした、美しい婦人が乘つて居た。黒鴨仕立の車夫が、而かも二人で、一人は車の後から、押して來る。番町邊りに住む、然る可き邸の奥さんらしい。

長谷川は、はやく警視廳へ歸つて、善後の策を立てようと、考へて居るので、殆んど向ふ見ずに、走つて來た。比丘尼橋を渡り、十四五間も來れば、暗いうちにも鍛冶橋が、ぼうッと姿を、現はして居るから、もう大丈夫と思つて無燈の自轉車に、一段の速力を加へ、疾風の如く走らせた。曲り角を、橋の方へ直線に、ピューッと飛ばした、刹那に、例の俥が、橋の上から、走つて來た。

『あッ、危ない』

と、車夫のかけた聲も、耳に入らず、長谷川の自轉車は、俥の横腹へ、ドシンとぶツつかつた。車夫は、自轉車を避けるつもりで、思ひ切り、左の方へ、棍棒を向けたから、正面の衝突は、僅に免れたけれど、はずみを食つて、俥は、横に倒れた。

長谷川も、抛げ出されて、横ッ面を、砂利で摺剝き、前齒が二本、フラ〳〵になるほど、ひどく大地へ、叩きつけられたので、急に立ち上り得なかつた。

俥には、幌が掛つて居たので、内に居た婦人は、幸ひ負傷もないらしく、車夫に扶けられて、やうやく這ひ出した。

『奥樣、まことに申譯けが御座いません。彼奴が、馬鹿な走りかたをして來たので、斯ういふことになつちまッたんで、あッし達が、惡かアねえんですから、どうぞ御勘辨を願ひます』

『どちらが惡いか知らないが、お前達を、二人つれて來るのは、斯ういふ間違ひのないやうに、と思へばこそではないか、別に急いで走れ、とも云ふては居りませんのに、何といふ疎忽を、爲るのです』

『へイ、どうも申譯が御座いません、どこも痛みはいたしませんか』

『幸ひに怪我もないが、事は、穩便になさい』

『へイ〳〵』

奥樣に叱られるほど、車夫の胸は燃えるやうだ。自分等は、少しも惡いと思つて居ないのに、斯う叱られたのでは癇癪が納まらぬ。

『ヤイ、野郎ッ、起ろ』

踏みつけられた蛙のやうになつて、長谷川は、まだ立ち上ることが、出來なかつた。頭ごなしに怒鳴りつけられたので、痛さを堪へて、起き上つたが、右の頰からは、生血が滴り、片面は、眞ッ赤に、摺剝けて居る。腰を強く打つたので、容易に立つことが出來ぬらしく、破損れた自轉車を前に、胡坐を、かいて居た。

『ヤイ、何とか挨拶をしろ、汝えが、間抜けな事をしたので、己れ達は、奥樣に叱られちやッたぞ』

『イヤ、どうも致方がない。さう怒らずと、我輩も、怪我をして居るのぢやから、勘辨しろ』

『何だと、勘辨しろとは、大きく出たな。そんな謝罪りやうがあるか、燈火も點けねえで、眞ッ暗な中を、むやみに飛ばしやアがるから、こんな事になるのだ。さア勘辨出來ねえ、交番へ來い』

車夫のいふ方に、道理があるのだから、怒ることもならぬ。さすがに閉口して、長谷川は、痛い所を、さすつて居る。

所へ、五郎兵衛町の狹い横町から、巡査が、出て來た。何か知らぬが、人の叫ぶ聲が聞えるので、巡査は、急いでやつて來た。

『こらツ、何を騒いで居るのか』

『へイ、旦那、いゝ所へ來て下すつた。此野郎が、飛んでもねえ馬鹿な事をしたんで、わツしの俥が、ひツくり返つたのでさア、全體此野郎は……』

『まア待て、さう口汚く罵るものではない。一と通り事情を申してみろ』

二人の車夫は、交る〴〵事情を訴へた。巡査は、それを、手帳へ書き留めて、さらに奥樣、といはれて居る、婦人の方へ進んだ。

『あなたが、此俥に、乘つて居られたのでありますか』

『左樣で御座います』

『どちらの御方でありますか』

『、、ちと身分のありますもので、名前だけは、御勘辨を願ひます。それに彼方樣でも、怪我をなすツておゐでのやうで御座いますから、どうぞ、此事は、内聞に願ひたいので御座います』

『ははア、さうしますと、あなたの方には、いひ分はない、といふことになりますな』

『つまりは、双方の疎忽で御座いますから、彼方さまで、事を好まぬと、おつしやれば、それ迄の事に、願ひ度いので御座います』

『よろしい、よく判りました』

巡査は、長谷川の前へ、やつて來た。

『顏を上げて御覽なさい』

斯うなつては、如何とも遁れる道はない。長谷川は、澁々顏を上げたが、擢り剝いた半面は、抑へて居る。

『君の氏名は、何といふのですか』

『……』

『お見うけすれば、相當の身分ある人のやうにも思はれるが、君のやうな人が、夜中に無燈で、自轉車を疾走させる、といふことが、すでに怪しからぬ所爲であります』

『そ、そ、その通りです』

『おだまんなさい。その通りでありますとは、何んといふ、怪しからぬことをいふ。さア氏名は、何んといふのです』

と、いひながら、巡査は、角燈を、長谷川の顏の所へ、さしつけた。もう免れぬものと、覺悟して、長谷川は、顏を抑へて居た、手を離して、巡査を見上げた。

『やツ、あなたは……』

と、いひかけるから、長谷川は、右の手を振つて、それとなく抑へた。巡査は、思はず擧手の禮をしよう、として、また止めた。

『イヤ、あなたが、宜しくないです。少しおまちなさい』

斯ういつて、長谷川を抑へて、今度は、車夫の方へ、向き直つた。

『お前等は、實に怪しからんものだ。奥樣は、那の通り、何事も穩便にいたしたい、といはれて居るのに、お前等はどこ迄も、公然にして爭はうといふのか』

『ヘイ』

『察するに、お前等は、此紳士に對して、何か求むる所があるのぢやな、さうなると、容易ならぬ事にもなるが、ど

こ迄も、公然の手續きをするといふのか』

巡査の様子が、急に變つたので、車夫は驚いた。

『何、別段どうしよう、と、いふのぢやありやせん。那奴の謝罪やうが、すツかり癪にさはツちまツたんで、何とかしてやらう、と思つた迄の事です』

『それでは、グヅ〳〵いふ事はない。はやく奥様を乘せて行つたら、どうぢや』

『ヘイ』

車夫は、大急ぎで、婦人を乘せて、かけ出した。その後で、巡査は、長谷川に向つて、丁寧に敬禮の、やり直しをした。

『長谷川警部では御座いませんか、どうなすつたのです』

『うむ、我輩ぢや』

『實に驚きました』

『我輩は、君に來られたので弱つた』

『ひどい怪我でしたな』

『何しろ、はずみを食つて投げられたから、腰の立たぬほど、打つたよ』

『それは、お困りでせう』

『君すまないが、腰を、引き立てゝくれ』

『ハイ』

巡査が、腰を押へて、しづかに引立てるやうにした。長谷川は、やうやく立上つて、

『君、氣の毒ぢやが、その自轉車を押して、警視廳まで來てくれんか』

『ハイ』

腰を、さすり乍ら、跛足ひきつゝ歩く、長谷川の後から、巡査は破損れた自轉車を、押してゆくのであつた。

長谷川は、警視廳へ來ると、すぐ醫者の手當をうけて、課長の前へ出た。

『此失敗は、何とも申譯がありませぬ。只今、進退伺を出しますから、宜しく願ひます』

『まア、待ちたまへ、我輩にも、考へがある』

『それでは、御沙汰をまちます』

『一兩日、休養したまへ』

『有難う存じます』

二〇

初の官報局長であつた、青木貞三といふ人が、東京電報を發行して、本社を日本橋の蠣殼町に置いた。純な政治新聞の本社としては、位置が甚だ悪いけれど、相場を主に書く、新聞を買收して、政治新聞に引直したので、本社の位置も、斯うした所に在つたのだ。

青木が、局長を罷めてから、高橋健三が局長になつた。青木は、信州松本の生れで、どちらかといへば、溫厚の人であつた。それとは正反對に、高橋は、熱烈、火の如き人で、文章も巧かつたが、識見の高い、純潔なる高士であつた。

官報局に、輪轉機を、据ゑ付ける爲め、高橋の洋行を幸ひに、政府は、其買入方を托した。それを聞いて、大阪朝日の村山龍平が、高橋に懇請して、同時に、買入れる事にした。

其頃は、未だ那邊の新聞社でも、輪轉機は、使つて居なかつた。大阪朝日は此事情から、最初に輪轉機を、手に入

れたのである。

輪轉機といふ名は、高橋が考へて、附けたのであつた。その以前には、輪轉機といふ名はなかつた。それであるから、大阪朝日が、近く輪轉機を、据ゑ付ける、といふ豫告をした時に、多くの人は、印刷機械といふことを知つて居るだけで、それが如何な機械か、よく知らなかつた位であつた。

青木局長の下に、編輯長をして居たのが、弘前生れの陸實であつた。號を羯南と謂ふて、莊重な文章を、書いた人である。

羯南の文豪たりしことは、今更らいふも無駄ではあるが、單に世間並の文豪といふのみでなく、高潔な人格者で、あつたことに於て、一世に重きをなした人であるが、憂國慨世の氣、鬱勃として抑へ難く、名を匿して、東京電報に、その論文を、寄せて居たのだ。それが爲めに、特種の讀者を、有つて居たのが、此新聞であつた。

そのうちに、羯南は、官報局を辭して、新聞社に入り、改めて主筆となつた。其時分に、青木の手から、羯南の同志が、之れを引受ける事になつて。本社を、神田の雉子町に移した。

淺野長勳、谷干城、鳥尾小彌太、杉浦重剛、三浦梧樓等の人が、それ〴〵に出資して、杉浦が、社長の格に据り、未だ一書生であつた、古島一雄が、編輯長になつた。

社說は、多く羯南が、書いて居た。三宅雪嶺も、後からはいつて來て、羯南と、交々筆を執るやうになつた。

卑猥な記事は、一切書かない事にして、全紙の文字に、振假名を用ひず、すべて金玉の文章のみであつた。賣れやうと、賣れまいと、そんな事には頓着なく、堂々たる大新聞の體裁を、備へたものであつた。

相撲の取口を、源平盛衰記の文章に似た書方をして、頗る高評を博したが、執筆者は、古島であつた。今の新聞が競ふて取口を掲げるやうになつたのも、是れが嚆矢である。

記事のすべてが物堅く、野卑淫猥の出來事は、一切書かないのであるから、一般の人に向く、新聞ではなかつた。

常に斯うした新聞が一時代に、必ず、一つは必要てある、と思ふ。

昨今のやうに、新聞が墮落して來ると、一層に、其感を深くする。營業本位の新聞は、世間に媚る事ばかりして居て、民衆を、指導啓發する事が無いから、何の權威もなく、昔の草双紙と同じてある。

本紙の一面には、普通選擧の必要を力說して居り乍ら、廣告欄一ぱいに、有田ドラッグの『普通選擧を唱ふるものは國賊である』といつたやうな、廣告を載せて、平氣で居たのだから、呆れ返る。

新聞が賣れなければ、社の經濟が立たない、といふ點もあらうが、せめて儲からないでもよい、といつたやうな新聞が、一つ位はあつてもよいではないか。

神田へ、本社を移してから、羯南が、怠らず論說を、書いて居た。改題して、日本新聞といふたのが是れである。

此新聞に就いて、もう一つ面白い事を、話して置かう。前にいふた通りの新聞であるから、どこかに柔か味を附けたい、といふ考へで、古島は、頻りに工夫して居たが、雜報のうちに、小間繪を入れて見たら、何うか、と言つた。

けれども、其繪を書くものに、其人を得ないと、これも迂濶には、やれぬ事だ。

河村清雄と、黑田清輝の兩人に、相談して見たら、中村不折が可からう、といふことであつた。昨今の不折は、第一流の大家であるが、其頃には未だ人にも知られず、不折の繪と、いふた所で、誰れ一人として、振返つて見るものもなかつた。不折も、亦進んで、賣り出さう、といふ心もなく、陋巷の間に、乏しい生活をして居たのである。古島が、尋ねて行つた時などは、薄汚ない、下宿屋の狹い一室に、やうやく起臥して居たほどの有樣であつた。不折は、外出して、長屋には誰れも居ないから、古島は、其歸つて來るのを、待つて居るうちに、眠りを催して來たので、そこに在つた、書物を枕にして、ゴロリと横に、なつてしまつた。

未だ面識もない人を尋ねて、たとへ家主が、承知の上にせよ、其部屋に、はいり込んで居るばかりか、書物を枕に眠つてしまふなどは、、、、、ずゐぶん行儀の惡い男だ。

しばらくして、眼を覺ますと、机の前に、誰れか坐つて居る。見るからに、汚ない風體の書生ではあるが、どうも不折のやうであつた。

古島は、むつくりと起き上つて、

『君は、不折先生かね』

机の前の人は、すました顏して、何の返事もなく、變な奴が來て居る、といつたやうな表情で、ぢつとして居る。

『君は、不折先生かね』

『……』

それでも返事をせぬ。古島も、これは少し變だ、と思つた。

『オイ、君ツ』

と、大きな聲を出すと、其人は、自分の耳へ指さして、首を振つた。

そこで、古島も始めて、耳の遠い人だ、といふ事が、解つた。

筆を執つて、古島は、來意を書いて示した。それから應酬がはじまつた。略ぼ要領を得たから、その日は歸つた。

其後ち、不折にも、社へ來て貰つて、終に承諾を得たので、不折の小間繪が、出るやうになつた。

さすがに、兩畫伯の推賞丈けあつて、超凡にして、瀟洒な、小間繪が載るので、これが、呼物の一つになつた。

新派俳句の創始者、明治俳壇の巨人、子規の句が、此新聞に、載せられるやうになつたのも、其頃からの事であつた。

大隈條約の國論を喚起したのは、主として、此新聞の力であつたから、少し立ち入りすぎたやうではあるが、社の內容にまで、說明を加へたのである。

伊藤博文の歐化主義が、漸次と、其色を濃くして來た。善も惡もなく、西洋の風が、浸み込んで來るので、玆に反動的思想の頭が、持上つて來た。

それが、國粹保存主義と銘打つて、非常な勢ひで、歐化主義に、反抗して來た。日本新聞は、實に其機關紙であつて、輕佻浮華の流風に、一大痛棒を加へ、歐化主義の連中を、散々に、叩きつけてしまつた。

大隈の條約案には、土地所有權を、外人に許す、といふ箇條があり、同時に、內地雜居も許す、となつて居る。會社の株主たる事を認めるし、鑛山の採掘權も與へる、とあるのだから、それ等の問題については、眞正面から、反對してかゝつた。

殊に、外人を法官に任用する、といふ一事は、國家の體面に關係する問題として、さかんに論難する。羯南の筆からは、血が滲んで居た。

社の創立者たる人達は、別に、集會所を定めて、しきりに條約問題の研究をした。牛込の東五軒町に、日本倶樂部の看板が揭げられて、其處に集つて來るのが、則ち其人達であつた。

（新小川町とも、稱す、要するに同處である）

材料の出處は、意外にも、飜譯局長の小村壽太郎であつた。官紀の上からいへば、斯うした事をするのは、良くないに極まつて居る。けれども、國家の大事には、一身を犧牲にさへ爲るものがある。小村は、非常な決心を以て、日本倶樂部の連中に、其材料を、提供して居たのであつた。

日向の飫肥から出て來て、大學南校を卒業すると、すぐ官費留學生として、アメリカへ行き、明治十四年に卒業して、歸朝の後ちは、外務省に入つて、飜譯局長にまで進んだ。

痩せ枯れた、細い身體はして居ても、一種の氣慨は有つて居たので、最初の親分、小倉處平の死んだ後ちは、復び親分を需めず、全くの孤獨で、やつて來た。

アメリカから、歸つて來ると、大阪上等裁判所の判事となり、それから外務省へ轉任して、局長になるまでには長い間の辛抱であつた。併し、それ以上に昇るのは、相當の後援者が無ければ、ちよつと至難しいのであつた。

大隈が、例の調子で、何事も獨斷的に取極めてゆく、其遣口には、不平を持つて居た。條約改正の談判についても自分は、殆んど門外漢の如く取扱はれて、單に文章の整理を、命ぜられる位であつた。

內地雜居や、株券所有の箇條に就いては、大した異論も無かつたが、外人法官任用の一條に關しては、可成り突込んで進言したけれど、それは輕く、聞流されてしまつた。

小村は、日本倶樂部の一人であつたから、その晩餐會には、よく出かけて來た。殊に、長谷川と、杉浦とは、南校以來の同窓でもあり、最も親しくして居たので、何時も倶樂部へ來ると、兩人が、談論の相手であつた。

斯うした事情から、小村は、條約に對する、不平を漏した。之れを聞いて、倶樂部員は、俄に奮起したのであつた。谷や鳥尾の如き人は、元來が、守舊派に屬するのみならず、國粹保存主義についての主唱者であり、常に國權の伸張を、高唱して居た關係から、此問題を、聞流す譯もなく、小村に向つて、種々の質問を始めた。小村は、また知る丈けの秘密を語つた。

（此一項は、重複を厭はず、事件の運びに必要であるから、再說した）

それから後ちは、小村の手から、條約に關する文書は、續々送られて來る。それを材料にして、各自が忌憚なき意見を闘はせ、その結論は、羯南の筆に移されて、日本新聞の上に、現はれて來るのであつた。

土佐の出身で、千頭清臣といふ人があつた。晩年は、鹿兒島縣知事を勤めたり、貴族院議員になつて終つたが、帝大出身の學士連を引出して、條約改正中止の運動を始めさせたのは、實に此人の力であつた。

日本新聞に、比べるほどの勢力はなかつたが、朝比奈碌堂の書いて居た、東洋新報の力も、却々に強い響きを、持つて居た。

新聞の力といふよりは、碌堂の力であつた。尤も、新聞は、皆な人の筆から成るものではあるが、誰が書いても力がある、といふものではない。

三宅雪嶺の筆も、日本新聞の權威ではあつたが、羯南の筆には及ばなかつた。羯南の亡き後は、雪嶺の獨舞臺であつたけれど、羯南の居る間は、どうしても、羯南の日本新聞であつた。

羯南に對立して、東洋新報の上に、獅子吼した、碌堂の論文は、また一世の雄者たるの觀があつた。どちらも、條約改正中止論であるから、言論の上には、大した相違はないけれど、文章の風格に、それ〴〵の特長があつて、双方の論文を比べながら、讀んでゐる間の感慨は、また格別のものがあつた。

此時の輿論は、全く此二新聞に依つて、釀成されたといふても、敢て溢言ではなからう。乍併、奮自由黨に屬する論客が、到る處の演壇に立つて、さかんに反對論を唱へたのも、輿論の釀成には、少なからず力があつた。

條約中止の建白書を持つて、地方から押出して來た、有志總代なるものゝ大部分は、奮自由黨の人であつた。

けれども、當時の大隈は、頗る頑冥にして、輿論を無視し、飽迄も、所信を斷行しようとした。

三浦と、杉浦との交際が、單なる友人といふ程度のものでなく、頗る親密の關係であつたことは、今更らいふ迄もないが、兩人の性格や、平生の調子を、知つて居るものは、どうして兩人が、那れまでに親しかつたか、といふことを、疑ふ位であつた。

三浦は、陸軍の出身で、樞密院に長く居たが、昨年の清浦內閣の時、護憲派の援助をする意味に於て、その職を辭してしまつた。

二一

元來が、長州人であつて、山縣全盛の時には、頗る不遇であつた事が、面白い。明治十年の西南戰爭の後ちに、軍

制の改革を主張して、山縣と、意見が合はず、極端まで衝突して、山縣から、ひどく睨まれた末、終に休職になつた。

それからしばらくは、浪人の生活で、ずゐぶん苦しい境遇にゐたが、負けぬ氣の人であるから、容易に降參してゆかぬ。どこまでも、山縣に、楯を突いて、平氣な顏で、貧乏ぐらしをつゞけた。

大隈を首領として、政府反對を、看板にして居た、進歩黨へ加入して、地方遊說にも出かけた。越後の高田では、自由黨の壯士に襲はれて、俥から引下されたこともあつた。

たとへ休職にもせよ、陸軍中將三浦梧樓が、政黨員であつたなどは、頗る面白いではないか。苟も、軍將の身であり乍ら、公然、政黨にはいつたのは、恐らく三浦が最初の人であつたらう。

犬養毅と親しくなつたのも、その頃からのことであつた。何人にも、容易に許さなかつた犬養が、三浦には、進んで親しく交つた。三浦の方でも、犬養を、深く信じて、晩年迄も、その交情は續けられた。

明治廿七八年の日淸戰爭がすんで、井上馨が、朝鮮大使となつて、京城へ行つた。戰後の朝鮮は、日本帝國に取つて、最も大切な關係を持つて居るので、井上が、特に送られたのである。從つて、井上は、大使として行つたのであつて、普通の公使格ではなかつた。

戰爭に勝つた結果、支那政府は、朝鮮に對する、一切の發言權を失ひ、獨り日本政府の力が、朝鮮の上に加はるやうになつたので、當時の對韓政策は、最も重大なるものとされてあつた。

所が、意外にもロシアの外交手段が、朝鮮の上にまで、延びて來て、どうにも始末のつかぬことに、なつて來た。公使のウエバーは、有名な外交官で、その手腕は、一際すぐれて居たのみならず、其頃のロシアは、北歐の强國として、世界の覇王たる觀があつたので、單に其れだけでも、相當の睨みは利くのであつた。

殊に、朝鮮の王妃閔氏が、內外に勢力を張つて、國王の李氏は、有るか無きかの有樣であつた。その王妃に、巧み

に取入つたものが、ウエバー公使であつた。

裏門からゆく、外交官の有力なるは、どこの國でも同じ事であるが、殊更に朝鮮では、それが有力であつた。

井上大使が、正面から取極めてゆくものは、すべて、ウエバー公使のために、裏門から破られてしまふのであつた。

井上が、これに氣がついて、やり直しをする頃には、もうロシアの勢力が、宮廷の奧ふかく入つて居て、とても手の下しやうがなく、井上は、全く失敗して、日本へ引上げて來た。

其代りに、三浦は、公使として、朝鮮へ出かけたのであるが、三浦の朝鮮公使といふことを、初め之れを聞いた人は、みな信じなかつたほどである。

長い間、三浦の頭を、抑へつけて居た山縣も、漸く氣が折れて來て、何とかせねばなるまい、と思つて居た所へ、伊藤からの相談があつたので、すぐに話はまとまつて、三浦を、推す事になつたのだ。

長州閥の政治家としては、井上と、伊藤が、第一流であつた。その井上の失敗した後の始末を、薩州閥のものや、その他の人に、させたくない、といふのが、伊藤の考へであつたらしい。

所で、井上の後へゆくのであるから、誰れでもよい、といふ譯にはならぬ。人選の上には、相當の苦心もあつて、伊藤は、三浦といふ事に考へをつけて、山縣を承知させたのであつた。

三浦が、朝鮮へ乘込んでからの事は、あまり詳しくいふと長くなるし、今の時代によろしくないと思ふから、それは省略する事にするが、とに角、有名な王妃事件なるものが起り、三浦らしいことをやつて、朝鮮を引上げた。

岡本柳之助、安達謙藏、柴四郎、田中賢堂、武田範之、佐々木正之、國友重章、難波春吉、寺崎泰吉、菊地謙讓、鈴木順見、大崎正吉、佐瀨熊藏、蓮元泰丸、月成光、藤勝顯、山田烈盛、平山勝熊、廣田止善、隈部米吉、澁谷加藤次、前田俊藏、家入嘉吉、佐藤敬太、小早川秀雄、平山岩彥、松村辰喜、佐々木正、牛島秀雄、宮部勇起、片野猛雄、中村栖雄

是等の人は、みな三浦の指揮の下に働き、玉城内に、血を流した連中である。

事件の結果は、一同が、退韓命令をうけて、廣島の獄に繫がれ、無罪の言渡をうける迄、可成りの日數もかゝつたが、どうか斯うか、表面丈けは、巧くつくろつてしまつた。

三浦が、樞密院へはいつたのは、それから、しばらくしての事であるが、三浦の一代記のうちでは、此事件が、一番に大きい事であつた。

樞密院へはいつてからも、ナカ〳〵おとなしくしては居られず、持つて生れた、世話好きと、政治運動の味が、忘られぬ爲めか、時々に飛出して來ては、人を驚かす事があつた。

原敬の未だ生きて居る時、世界大戰の前であつた。三浦は、原と、加藤高明と、犬養毅を、自分の邸——小石川上富坂——へ集めて、斯ういふ事を誓約させた。

『政黨が、內政上について爭ふことは、どうもよいとして、外交の問題丈けは、黨略の犧牲にせず、黨爭から引離して、一致の力を以て當らう。それについては、元老の口出しも、させぬやうにしよう』

意味を取つていへば、斯ういふ事になつて居るのだが、其書面には、三人が、署名捺印して、三浦の手許へ、それを預けて置く事にした。

其結果として現はれたものが、例の外交調査會なるもので、原と、犬養は、すぐはいつて行つたが、獨り加藤は、逡巡してはいらなかつた。

今の世の中には、妙な事があるもので、約に背いて、はいらなかつた加藤は、存外に評判がよく、約を履んではいつた犬養は、したゝかに惡くいはれた。原の事は、あまり世間では、彼是れいはなかつた。三浦が、加藤を信ぜぬやうになつたのは、此時の事からであつた。

此事については、樞密院の問題になつて、大分やかましかつたが、三浦の辯疏が容れられて、僅に『斯ういふ事は

あまりやらぬやうにしてくれ』

と、いふので、輕くすまされた。

初めは大隈內閣の產婆役として、しばらくすると、今度は之れを倒しにかゝる。といつた調子の人で、其行動には、ちよつと、想像のつかぬ所があり、新聞の上では、政界の彗星と、いはれて居た。

誠意を以て、國家の事に當るのではあるが、その間に、ちよい〳〵野次氣分も、交つて居るから、三浦の出て來る時は、いつも問題が起る。

斯うした風の三浦と、杉浦の交際が、一と通りならず深かつた、といふことは、誰れにしても、不思議に思ふが、當然だ。然らば、杉浦とは、どういふ人物か、前にも少しいふてあるが、猶ほ進んでいふて見たい。

江州膳所の生れで、はやく大學南校に入り、明治八年には、留學生として海外へ送られた。

歸朝の後ちは、多く教育の方面に沒頭して、その生涯を終つた。門人のうちからは、ナカ〳〵人物が出て居る。古島一雄、桝本卯平などもそのうちの一人であつた。

元來が、方正謹嚴な性質で、少しも曲つた事をしない、聖人のやうな人であり、博士とか、學士とかの肩書はないが、それでも、稀有の學者で、大樞な博士は、とても及ばないほどに、學問を有つて居た。

初期の議會に、故鄕から選ばれて、代議士になつた事がある。けれども、たつた一度で、御免蒙つてしまつた。

『議會は、わたしのやうなものゝ、出る處でない』

これが、代議士を、やめた時の一言であつた。

其頃の議會は、昨今の議會と違つて、代議士の粒も、揃つて居て、低級野卑なものは、多く居なかつたが、それでも杉浦は、斯ういふことをいふて、再度の推薦には應じなかつた、若し、昨今の議會へ出したら、恐らくビツクリし

て、眼を廻すだらう。

ポーツマウスの談判をすませて、小村全權が、歸朝した時、殆んど全國を擧げて、媾和の條項に、不服を唱へ、小村を罵つて、國賊の如く、いふて居た。之れが爲めに、恐ろしい燒打まで起つたのであるが、其時に、杉浦は、

『さすがに小村である。よく那れ迄にやつて來た。大に慰勞してやらねばならぬ』

と、いふて、南校以來の學友を集めて、小村の勞を、犒ふた事がある。

全國の人民を擧げて、すべて昂奮して居る時、獨り杉浦は、冷然として、靜かに小村の功を、激賞したのであつた。

大正三年五月廿三日、東宮殿下の傅役として、其辭令を受けた。それ迄になる經緯は、ナカ〳〵に錯雜であつた。

當時の東京市長、奥田義人は、主として杉浦を、すゝめたのであるが、宮中の方では、濱尾新が、それに應じて、しきりに、懇談を遂げた。

帝國の臣民としては、無上の光榮なる職である。それだけに杉浦は、あらゆる人の了解を得てからにしたかつたのだ。

親友の子ではあるが、門生の一人であつた、小村欣一にまで、相談して居る。眞面目な杉浦は、どこまでも眞面目に考慮して、容易には受けなかつた。

四方八方、すべての方面に渉つて、いよ〳〵宜しい、となつてから、お受けをいたして、其職についた。

頭山は、特使を送つて、

『君は、蒲柳の質、多く藥に親しんで居るが、それでも勤まると、思ふか』

といふて尋ねた。

『生命がけで、引受けるのぢや』

と答へた。

今から顧みると、約七年の間、只の一日も休まず、御前に、進講して居た。どうして那の病弱の人が、それ迄に勤まつたか、と疑ふものもあるが、生命がけで、御引受けした杉浦は、全く一生懸命に御奉公をしたのであつた。

良子女王殿下にも、これと同じ心で勤めた、至誠一貫、これが杉浦の心であつた。またと得難き人とは、杉浦の如き人物を謂ふたものであらう。

某重大事件、それは茲に明記し得ないがその事の起つた時、杉浦は、慨然として職を辭した。

それが爲めに、問題は紛糾して、遂に良好の結果を得て、御慶事が行はれた。

杉浦の至誠は、そこにまで動いて、多くの人の心を動かし、遂に最後の御奉公をなし遂げたのであつた。

杉浦と三浦、此二人を對照して來た時、どうして其交際の親しかつたか、といふ事が思はれる。

けれども、二人が、國家に對する至誠、それが二人を結付けて居るのであつた。至誠の前には、一切の私情は取除かれて、二人は、永い間の交誼をつゞけ得たのである。

（三浦が、御前に伏奏して、大隈外相を、彈劾した事は、維新秘話に揭げてあるから、すべて省略する事にした。

けれども、此事のあつてから、大隈の條約案は、とても、無事に通過し得ぬ事は、よく判つて居たのであるが、事全く極秘のうちに運ばれて、表面には、些も現はれて來なかつた。

そのうちに、例の兇變が起つて、大隈は傷つきて、內閣は倒れ、條約改正は、中止になつたのである）

閣僚のうちには、後藤象二郎が居て、しきりに反對して居るので、之れには大隈も、少し弱つて居た。

明治二十二年の十月十八日、閣議が終つて、大隈は、二頭立の馬車で、霞ケ關の外相官邸へ歸つて來る。平生から物案じの少ない、存外に呑氣な大隈も、此日は何となく鬱々として、首を垂れて居たのは、身の危險が、刻々に迫つてゆく爲でもあつたらうが、實は、今日の御前會議に於て、後藤の爲に、散々論じつめられて、さすがの大隈も、

頗る窮して、甚だ不首尾で、あつたことも、少なからず胸を痛めた、といふ事であるから、いつもの元氣は、無かつたに違ひない。

來島恒喜は、再度まで尾行するものをまいて、その姿を、晦ましして居たが、此日の午後三時頃、忽然として、いづれよりか顯はれ、外務省の表門脇に、二人の伴れと共に、立つて居たが、やがて其の伴れは、どこかへ行つてしまつた。

門前の巡査――其頃は各省の門には、巡査が立つて居た――は、來島が、ぶら〳〵して居るのを見付けて、

『オイ、お前は、何か用事があるのか』

と、尋ねた。來島は、薄鼠の背廣服をつけて、鳥打帽を冠り、手には蝙蝠傘を、持つて居た。

『友人を待合せて居ります』

『斯ういふ所で、人を待ち合せるのは宜しくない。どこか外の場所にしたらどうぢやね』

『ハイ、まことに恐れ入りますが、判りのよい所といふので、此處を選びましたのですから、どうぞ今日丈けは、おゆるしを願ひます』

巡査は、しきりに考へて居る。

『今、場所を變へますと、後から來る友人が、また困りますから、どうぞ赦して下さい』

『左樣か、それでは、今日丈けゆるしてやるから、これからは不可ぞ』

『ハイ』

『可成く、そちらの方へ、寄つて居れ』

『ハイ』

折柄、大隈の馬車が來た。

巡査は、大急ぎで、門の脇に立つて、擧手の禮をした。馬車は、今門内へはいらうとした、刹那、例の來島は、すと駈け寄つた。巡査が之れを見て、

『あツ』

と、いふ間もあらせず、蝙蝠傘のうちに、匿して置いた、彈を取り出して、力任かせに投げつけた。

轟然たる、爆發の音と共に、ぱツと上つた煙は、四邊を掩ふた。巡査は、馬車に從いて居たのも、門前に居たのも、ひとしく駈け出した。それは、全く反對の方面であつたのだから、つまり逃げたのである。

馬は、半ば毀れた、車を曳いて、玄關まで駈けて行つた。爆發の音に驚いて、よく跳ね上らなかつたものだ。若し馬が跳ねて、車をひつくり返したら、それが爲めに、大隈は、死んだかも知れない。

後の騒ぎが、頗る大變であつた。

巡査が、駈け戻つた時はすでに、來島は、短刀を以て、咽喉を貫き、血に染んで、倒れて居た。

警視廳の連中が、先づかけつけて來た。長谷川警部も、そのうちに居たが、倒れて居る、來島を見て、

『あツ、矢張り彼奴だつたか』

と、思はず叫んだ。

そのうちに、判檢事も、やつて來た。偵吏は、檢事や警部の命をうけて、證據物をしらべに掛かつた。

逃げ出した巡査は、ひどく極めつけられたが、門前を守つて居た巡査は、殊に不首尾であつた。

來島の最期は、實に立派なものであつた。臨檢の役人も、互に顏を見合せて、感嘆の聲を放つた。

大隈は、重傷の爲めに、官邸から、動かす事が出來なかつた。多くの醫者が來て、診斷の結果は、生命に別條のないと、いふ見込はついたが、碎かれた隻脚は、どうしても切り取る外、療治のしようはない、といふことに決して、終に切落す事になつた。

於此、大隈は辭職する、延いて黒田首相も、職を辭し、內閣は瓦解したから、條約改正は、自然に中止してしまつた。

下手人の來島が、現場で死んだから、その連累は、一人も出ずにすんだ。月成光、葛生玄晫、小久保喜七、淵岡駒吉等は、捕へられて獄に入つた。

頭山滿も、一應は訊べられたが、終に一人も、罪を得たものはなく、すべては、來島の死に依つて、解決された譯である。

谷中の墓地、御隱坂の上に、來島の碑は建てられ、今でも香色の絕えた事はない。

人を殺して、自分は、助からうとするものがある。さうした心得違ひのものは、來島の死に就て、どう考へるか。

來島は、全く身を殺して、仁を爲す底の義人であつた。

大隈重信再度の遭難

大正三年に、シーメンス事件が起つて、山本內閣が倒れた。例に依つて、元老會議なるものが開かれて、後繼內閣の相談は始まつたが、どうしても話の纏まりが決かなかつた。淸浦奎吾が、宗像政を參謀にして、その跡を引受けよう、としたが、海軍大臣を得ることが出來なかつたので、沙汰止みになり、鰻香內閣の嘲りをうけて、引込んでしまつた。

於此、いよ〳〵元老會議が行詰になり、世間の批難が、ひどくなつて來た。三浦將軍の裁量で、大隈重信と元老の會見があつた。前の西園寺內閣が、二箇師團の增置に反對して、軍閥の爲に倒されたことが、憲政擁護の運動となつた。それから後ちの政情が、頗る險惡に流れて、復び山本內閣が、燒打騷ぎの國民運動で倒れたから、その跡の內閣は、普通の政治家には任されぬ、となつて、人氣者の大隈を、引出す事になつたのである。

立憲改進黨が、進步黨になり、進步黨が、更に憲政本黨と變り、それが更に分裂して、一は、立憲同志會となつて一は、立憲國民黨となつた。政權にあこがれたものが、大隈を、ふり捨てゝ桂太郎の膝下に集り、之れが同志會となつた。飽迄も、大隈を擁護して、公黨の面目を保持しよう、としたものが、國民黨を興したのであつた。

その紛訌の間に、大隈は、政黨から遠ざかつて、全く孤立單身の政治家となつた。けれども、自由の立場から、縱橫の世論に、一世の人氣を、引付けた力は、實に大いともいへるが、今や時局多難の政界を前にして、新たに內閣を

組織する場合、政黨の後援がなければ、いかに大隈でも、それを引受け得られる筈はなく、此一事は、大隈の身に取つて、差當つての惱みであつた。

同志會の黨勢、甚だ振はなかつたばかりでなく、黨首の桂に死なれた上に、大石正巳、後藤新平、仲小路廉の脫黨となり、いよ〳〵困つて、窮餘の一策、看板を塗替へて、憲政會となつた。

その頃の加藤高明は、何分にも不人氣の政治家であつたから、此人を、黨首に仰いで居る、憲政會の振はざることは、實にひどいものであつた。黨員の重立ちたるものは、元の改進黨から、流れ込んで行つた人々であるから、一度は振捨たやうなものゝ、さて別れて見ると、大隈が、戀しくなつて來て、だん〳〵接近するものもあり、大隈が、世間受の良いのを見ては、加藤總裁よりも、遙に慕はしくなつて、事毎に、相談を持ちかけるの傾向きがあつた。

況て、いよ〳〵大隈の手に、政權の移るらしい、形勢が、微見えて來たから、政權慾の亡者にも均しい輩は、恥も外聞も忘れて、大隈の擔ぎ擧げを、策するに至つた。また、大隈の方にして見れば、政黨の背景なくして、政權に近付く事は、とても不能いのであるから、それを幸ひにして、彼等を引寄せるやうにしたから、双方の歩み合に依つて憲政會の准首領とはなつたのである。

現に、加藤總裁は戴いて居ても、左樣した事にせねば、政權に、近づき得ぬから、憲政會員の總てが、それに傾いてゆく、加藤も、亦大隈とは、一種の關係があつて、此一事には、敢て反對もせず、時には、自ら進んで、握手を急いでも居たのであつた。

大隈後援會といふ、不思議な團體が起つて、全國へ亙り、非常な勢ひを示した。既に八十歳の高齡に達した、大隈を首相として、一たび政權を握らせたい、といふ爲の會であるから、早稻田出身のものは、殆んど擧げて、之れに加はつたばかりでなく、此美名の下に、國民黨から、脫け駈けを、爲るものさへ少なからず在つた。

大隈は元老會議の結果、完全に政權を握る事になり、憲政會の領袖は、大隈と共に、大閣する事になつた。仍ほ

是れは、純な政黨内閣でなく、大隈首相の下へ、憲政會が、くつついた丈けの事であつて、大隈は、單に憲政會を引付けて、自分を、支持するといふにすぎなかつた。されば、憲政會の黨首は、依然として加藤であつた。

初め、三浦が、元老を說いて、大隈に、新内閣を托さう、とした時、松方正義は、飽迄も反對したのであるが、その說に依れば『大隈は、何事に限らず、餘りに放膽にして、跡の事を考へぬから、内閣の首班としては、危險此上もなき人である』と、いふのであつた。三浦は、之れに對して『その點に就ては、少しも心配はない。昨今の大隈は、明治十年頃の大隈とは、大に相違して居る。また、君と共に内閣に列した、三十一年の時分とも、頗る違つて居るから、その懸念には及ぶまい。殊に、現在の政情からすれば、權兵衛が火事を出して、その火の手が、未だ鎭まらずに居るのだから、之れを消留めるには、早稻田の蒸氣ポンプに限る。どうせ半年か一年で、消火の役が終つたら、引込ませる迄の事ぢや』と、喝破したので、松方も、默つてしまつた。山縣も、初は澁つたが、二箇師團の增置を、引受けさせる』といふので、終に納得させる事にしたから、元老の故障は、之れに依つて、一掃された譯である。

斯くて、大隈内閣は出現し、加藤は、外務大臣の椅子に着いて、副總理の格で、すつかり滿足してしまつたから、その他の閣員も、すべて出揃つたのである。農商には、大浦兼武を据ゑて、大藏には、若槻禮次郎が納まり、萬年坐長といはれた、河野廣中は、逓信大臣で滿足し、高田早苗の文部、海軍に、八代六郎を得て、陸軍には、岡市之助を入れた、只だ一つ、司法の椅子へ、尾崎行雄を着かせたのが、世間の注意を引いた。尾崎が、此内閣に入つた事は、大隈との個人關係からすれば、何の變哲もないが、二箇師團の增置を引受けて、……成立した内閣丈けに、甚だ不純なものであつた。憲政擁護の運動は、西園寺内閣の倒れた爲に起り、その原因は、此增置に反對した事が、その主なるものであつたから、尾崎の入閣は、何といふても意義をなさぬものであつた。

内務大臣の椅子を、大隈が兼任して、半年も空けて置いたのは、犬養を引入れる爲めであつたが、頭の堅い犬養は終に拒絕して、ふり向きもしなかつた。尾崎が入閣して、大浦と、椅子を並べた事が一つ、もう一つが、犬養を引入

れ得なかつた事、此二つが、大隈内閣の倒れる因を爲したといふ解釋は、黒人筋のみの見方であつた。

内閣の成立と共に、先づ議會に於て、在野黨たる政友會と、增師問題で、正面衝突をやつた。その前に、大浦は内閣の機密費三萬圓を以て、政友會の代議士を買收した。猶ほ、阿片問題を利用して、白川友一からも二萬圓の金を出させ、其他有らゆる手段を盡して、政友會の切崩しを行つたが、思ふやうにならなかつたところから、議會を解散して、總選擧の上に、干渉と買收の二つで、政友會を苦めたのみならず、國民黨迄が、その傍杖をうたれて、選擧は空前の渦卷を起した。

その結果は、政友會を、百人迄に叩落して、憲政會は、二百以上の大多數となつた。流石の原敬も、此時ばかりは手も足も出し得なかつた。政友會を、毛蟲の如く、嫌つて居る人達は、手を拍つて喜んだ。

大隈内閣の壽命は、總選擧に勝つたばかりでなく、昭憲皇太后の御崩御に依つて、一年は、大丈夫といふ事になつた。その上に、世界大戰に引ツかゝつて、當分は、倒れぬ事に定まつた。けれども、大隈の雄辯は、いくたびか、災を引起して、之れには閣臣も、よほど弱つたらしく、議會に於ては、全く箝口されてしまつたから、折角の雄辯も、用をなさなかつた。責任の立場に置かず、あの長廣舌を、勝手次第に叩かせたら、それこそ天下一品であるが、首相として、議會へ臨んだ時は、却つて其雄辯が、常に災を爲したのだから、第三者として見て居れば、實に面白い事であつた。

近年の内閣としては、珍らしいほどに人氣を背負つて、萬事は、好都合に運びし、大隈内閣も、月日の經つに從つて、そろ〳〵破綻しかけてゆく。餘りに政友會を憎んで、總選擧の後もひどく壓迫を加へた反動は、やがて現はれて來た。人氣の良いに乘じて、大に調子づいた加減もあつて、次から次へと、失政の尻尾が、現はれて來たのを、内閣自身でさへ、いかんともなし得なかつた。

第一は、例の大浦事件であつた。

第二は、對支外交二十一ケ條の問題であつた。

第三は、乃木伯爵家の一條であつた。

(武力を示して、支那政府を、壓迫した事は、明白な事實で、今も猶ほ、その條約日を以て、排日の記念日として居る位である。

大正三年の十月頃と記憶するが、著者は、奉天から大連へかけて、或事の爲に旅行して居たが、大連にしばらく滯在して居ると、押川方義といふ人が、やつて來て、何か知らぬが、さかんに暗中飛躍して居た。滿鐵に關係ある某氏の說明に依ると、押川は、大隈首相の紹介狀を携へて、阿片專賣權を得可く、或人の爲に、運動して居る、との事であつた。

同時に、奉天の方面に於て、武力壓迫が行はれ、我邦人の立退くもの多く、今にも戰爭の始まる如き、形勢に立到つた。旅順を覗いて見たら、澤山の兵士が、何時の間にやら、詰めかけて居た。奉天の總領事は、非公式ではあつたが、我邦人の居留者に對して、立退きを促がしたのも、此時の事であつた)

著者が、大連から歸つて來ると、其日が、對支問題と、乃木家の一條について、明治座に演說會がある、といふて、福田和五郎から、しば〳〵電話があつた、といふ事を聞いて、兎に角、明治座へ行つて見た。

主催者の一人内田良平が、恰も演壇に立つて居た時である。福田は、著者の顏を見ると、傍へ寄つて來て、默つて手を振り乍ら、薄暗い舞臺裏へ、引張つて行くから、著者は、福田の爲る通りになつて居た。

『君の歸りを待つて居たのだが、奉天や大連の方は、どうであつたか』

と、訊くから、著者は、見聞の儘を、打明けた。

『阿片の一條と、對支外交の武力壓迫について、この跡で、大に演つてくれんか、どうだ』

『宜しい、承知した』

此話がすむと、福田は、聲を落して、

『どうも、大隈の心事が、我輩には、氣に容らぬから、大に覺悟しなければならぬ』

『何の問題で……』

『乃木將軍の遺言を破つて、乃木伯爵家をつくる事に、政治的援助を與へた、心事と行爲が、氣に容らぬ。對支問題についても、實に怪しからぬ、と思つて居る。大浦事件の如きは、失政の最も甚太しきものである。殊に、加藤、八代、若槻が、之れに原因して、辭職して居るにも不拘、優詔に名を藉りて、留任した事が、奇怪千萬だ。もう堪忍が出來ぬから、何とかしよう、と思ふが、君の考へはどうか』

福田の心裏に、どうした覺悟があつたか知らぬが、著者は、この一言を以て、容易ならぬ覺悟を有つて居るものと考へた。その態度、その言語、すべてが平生の福田でなかつたから、著者は直覺的に、左樣考へたのであつた。

そのうちに、演壇が空いた、と知らせて來たので、著者は、演說す可く登壇した。

此時の著者の演說は、可成り反響があつたやうに、思つた。翌日の萬朝報、其他の新聞は、著者に向つて、冷嘲的の記事を揭げた。

演說をすませて、控所へ這入つた時は、福田の姿は、もう見えなかつた。

福田は、群馬縣邑樂郡の人、素封家の出身であつた。情愛の深い親切な人であつたが、平生は、餘り口を開かず、何時もニコ〳〵して居た。夙く支那へ行つて、上海の日淸貿易研究所へ入り、荒尾精の指導をして、支那に就ては、一個の見識を有つて居た。

秋山定輔、櫻井熊太郎、佃夫信等と謀り、二六新報を興した。午頭馬頭といふ欄內に、漢文崩しの簡潔な、短評を書いて、一部の讀者には、非常に愛讀されたものである。

妻には、一人の子を遺して、先立たれた。其後も、妻を迎へなかつた。妻の母に、懇慮して無妻で押通したほど、純眞な情を、有つて居た事は、多く人に知られなかつた。

乃木問題については、政敎社の同人が、一齊に立つて、峻烈な攻擊をはじめた。三宅雪嶺は、その先頭に現はれて訥々たる雄辯を揮つた。識者のすべては、伯爵家の再興に反對したが、故將軍に、何等の血緣なき毛利家の厄介者が、乃木といふ家を興して、而かも伯爵になつた。

於此、內相と宰相の間に、責任の塗合がはじまり、大隈首相は、顧みて他を言ふて居るといふ狀況の下に、乃木伯爵家は、完全に成立してしまつた。大隈に對する非難は、ずゐぶんはげしく起つて來た。

福田も、之れに就ては、頗る憤慨して居た。

大正五年正月十三日、大隈は、早稻田の私邸へ、歸る可く、牛込の大和町へ、自動車でやつて來た、道の右側から一人の壯漢が、突如として現はれ爆烈彈を投げつけた。

彈は、車に中つたが、どうした譯か、破裂しなかつた、運轉手臺に居た、警部の某は、すぐに飛下りたが、壯漢は既に姿を留めなかつた。警部は、その彈を拾つて、ポケツトへ入れると、車は復た駛り出した。

聞く所に依ると、彈は、頗る巧妙を極めたもので、餘りに精巧であつた爲に、却つて破裂しなかつたのである、と傳へられた。著者は、左樣した事について、何等の知識もないから、眞僞は判らない。

彈を投げつけたのは、下村馬太郎であつた。その背後には、福田が居るといふので、共に捕はれた。田中弘之も、和田某も、また捕はれた。

天誅趣意書なるものがある。それは、大正四年の暮、築地の同氣倶樂部で、起草されたものである、と聞いた。

田中は、豫審員附になつたが、政治的には、關係があつたらしく思はれた。福田と下村は十年の刑に處せられた。

其後、福田は出獄して、黒シヤツ團をつくり、團長となつて活動した。國粹主義の團體として、やうやく人に認められた時、急に病を得て、此世を逝つた。

大隈は、再度の彈をうけ乍ら、一度は、傷ついて助かり、二度目は、全く傷もうけず、生命を拾つた。幸運の人といへばいへるだらう。

尻無川の殺人

明治十九年の伊藤内閣は、外相の井上馨が、條約改正の談判を始めて、外人の歡心を需むる必要から、種々の新らしい事を試みて、さかんに西洋の模倣を行つた。ふみも馴はぬ、足元のあやしい舞踏は、この頃から、流行りはじめたのであつた。

假裝舞踏なるものが、鹿鳴館に行はれて、眞面目な國民を驚かしたのも、その時の事であつた。當時の新聞記事を茲に掲げて、その一斑を示す事にしよう。

一昨二十日、午後九時より、永田町なる伊藤伯の官邸に於て催したるフワンシーボールの招きに應じて、內外朝野の貴顯紳士及び其夫人等の參集せしは、殆んど四百餘名近き多人數なりしが、其打扮は千差萬別何れも他の意想外に出で一驚を喫せしめ、且つ喝采を博せんと工風に工風を凝らしたることなれば、恰も內外古今の人物を、一堂に集めて、品評會を開きたる如く、忽ちにして紅顏玉を欺くの淑女顯るゝかと見れば、忽ちにして勇壯鬼を挫く猛將躍り出て、鋤を荷ふの農夫あれば、花を賣るの賤の女あり。緋衣濶袖の大僧正あれば、殷斗目長裃の殿中風あり。

其が中に就いて、天莫空勾踐、時非無范蠡と十文字を脊旗に墨黑々と筆太に記したるを脊負ひ、鎧上に簑を着け冠り笠にて備後三郎に打扮せるは、是なん三島警視總監にして、腰簑に潮汲桶を荷ひて、松風村雨に擬した

るは同氏の令孃姉妹と聞えし、長刀小脇に抱込み、七道具を肩に負ひたる法師武者、問はずも知れし武藏坊辨慶は高崎東京府知事にて、勇氣滿面に顯はれ、續いて出て來る御曹司牛若丸は、同氏の令孃なりし。頭巾鈴掛金剛杖を突鳴し、安宅の辨慶かと見紛ふ山伏は、是れぞ澁澤榮一氏にして、同氏の令孃は、胡蝶の舞に扮し、最美麗なりき。

又忠臣藏九段目の本藏にやあらんか、尺八を吹き鳴らしつゝ顯れたる一個の虛無僧は、山尾法制局長にて、同氏が令孃の扮したる白拍子靜は、優にやさしく見えたり。又夜討曾我の十郎祐成は、鍋島桂次郎氏にして、五郎時致は、末松謙澄氏の一對。同じ一對なる素袍烏帽子の三河萬歲は、井上外務大臣にて、才藏は杉內藏頭なり。佐々木顧問官は、裃を着て、頭にチョン髷の假髮を戴き、榎本遞信大臣は、通常の麻裃を着し、大山陸軍大臣は、チョン髷にて大小を腰に橫へたり。古き唐服を着て、吉備大臣かと思はしきは、山田司法大臣にして、行脚飄然たる富士見西行は、渡邊帝國大學總長とぞ聞えし。

有栖川一品親王には、明治二年に新調されたりしといふ西洋の軍服を着せられたるは、天晴大將と見參らせ、又同若宮には、古代日本天子の平常に召させ給ひたる御服にて、一際目立て美麗なりし。山縣內務大臣は、其昔一隊を引率して、幕軍を諸處に駈惱したる奇兵隊々長の打扮にて、日本服の筒袖に韮山笠の一種を冠り、兩刀を橫へ、曾て同氏が馬關にて變名したる長藩萩原慶之助源有朋の十字を白木綿に記して肩印となしたるは、古代の陳套に拘らず、其人にして其服を着たるは、中々に勇しかりしと。

其室に、一對の打扮にて、伊藤總理大臣は、伊太利ベニスの貴族に擬し、同令孃は同國の田舍娘に、岩倉具綱氏は其男子に扮して、是又一對なりき。

三條內大臣の令孃は、歐洲の花賣娘に粧ひ、山縣伊三郎氏の令室は、日本の田舍娘に扮したるが、此の田舍娘は、扮し得て態度眞に迫りたり。松方大藏大臣は、烏帽子直垂を着して、其令孃は雅兒の姿に扮し、七條の變姿を着け

門跡擬なき眞宗僧侶の打扮は、是なん高木海軍大醫總監にして、多久某の蝦夷人と、加々美氏令室の前髮を分けたる扇屋の桂子ともいふべき風姿は、是亦二つながら喝采を博し、中にも意表に出でたるは、英國公使館附某が、紺の法被に紺の股引刺底の足袋を穿て、別當の姿に扮したると、ラウダー氏が壽老人に擬したるにぞありし。又カークウード氏は西洋の帝王に扮したるが、其他外國人は、羅馬法王を始め、各古代の服裝を着たる者多く、何れも踏舞を畢り、全く退散したるは昨二十一日午前四時の頃なりと、偖も〳〵太平無事の世の中、實に面白の御遊かな

（二十年四月廿二日時事新報所載）

斯うした事が行はれて、ダンスは、外人を師匠にして、稽古に勵むものが多くなつた。例の强姦事件や、姦通問題は、この間に起りし風說であつた。上流社會の風紀は、頗る怪まれて、種々の取沙汰は、流布されたのであつた。

强姦事件とは、伊藤伯に係る風說であり、姦通問題とは、森文相夫人に關する事であつた。

演劇改良會なるものが、末松謙澄等の發企で、大々的に發表された。猶ほ甚太しきに至つては、人種改良といふ事が唱へられて、日本人と西洋人の雜婚を、さかんに唱へるものがあつて、その會長には、井上外相が推された。つまり西洋種の馬と、日本種の馬を、かけ合せる、といつた事を、人間の上に、强て行はう、としたのである。

世界の文化に遲れた國民が、先進國の風俗を、取り入れる、といふ事を、絕對に惡い、とはいへぬが、自然の必要からでなく、條約改正に、利用する爲の企てだ、と聞いては、何人も、憤慨せざるを得なかつたであらう。

三宅雄二郎、志賀重昂、辰巳小二郎、千頭清臣、陸實、杉浦重剛等に依つて、國粹保有の說が唱へ出されて、その團體の出現したのも、あながち無理の事とはいへぬ。極端な西洋心醉派に對する、反動として見る可きである。

此風潮を見て、亡國の叫びが起り、此醜俗に慨して、國粹を唱ふるものがあるのは、まことに止むを得ざる次第であつた。殊に、薩長の藩閥に對する、政治的反感も、之れに加はつて、地方の純朴な青年に、激越な憂世愛國の志

を抱くものが起り、不穩の計畫を爲すに至つた事も、それ等の人の短慮僻見とのみは、いへなかつたのである。

土州の壯士に、吉松壽太郎といふものが居た。學校の教員を勤めて、純眞な心から、少年を指導して居たのであるが、新聞に依つて傳へられる、中央の政界が、漸次腐敗してゆく事を慷慨して、風俗の頽廢に蹶起し、同志のものを語らひ、玆に恐る可き、暗殺團をつくつた。

先づ、其盟友のうちから、佐野義一、下村治幾、間直三、澤村良吉、大井善友の五人を誘ふて、ひそかに計畫を立てた。

高知の或旗亭に、以上の同志が、秘密に集つた。

『もう、此上の忍耐は出來ぬ。いツその事、要路の大官を、殺つてしまはうではないか』

と、吉松が、眞ツ先に、口を切つた。

『無論ぢや。吉松君のいふ通り、禍は、今のうちに芟取つてしまふに限る』

大井は、斯ういふて考へ込んだ。

『オイ、間君は、どう思ふか』

吉松にいはれて、直三は、笑ひ乍ら答へた。

『議論の必要は無い。また慷慨するにも及ばぬ。只だ實行の一事あるのみぢや』

之れを聞くと、下村も、澤村も、膝を打つて、

『間君のいふ通りぢや。もう議論は止めよう』

一座は、白けて寂とした。

『諸君の覺悟は、よく判つたから、我輩の計畫を話す事にするが、その前に、我輩の失敗談から、始める事にしよう。我輩は、昨年の春、遠見市次郎君と相談して、日比谷の練兵場に、爆烈彈を伏せて、之れに電氣を仕かけ、新春の

觀兵式に臨む、太政大官以下の大官を、一瞬の間に鏖殺するつもりであつたが、どうしても完全な彈をつくり得ず、之れが爲に、逡巡して居るうちに、機會を逸してしまつた事がある。それから今日迄、深く陰忍して、時期を待つて居たのぢやが、今度はその失敗を、くり返へしたくないから、諸君に於ても、充分の覺悟をして欲しい。

要するに、理化學や、藥物についての知識に乏しいものが、巧妙な方法を取らう、とした失敗なのぢや。今後は、拙劣な方法でも可いから、必ず目的を達するやうにしなければならぬ。就ては、近日のうちに、天皇陛下は、京都へならせられるとの趣であるから、御供の大臣等を、途中に要擊して、之れを倒してしまはうではないか、我輩の考へでは、多くを望まず、たとへ幾人でも、斯うして斃せば、必ず我輩等の志を繼いで、更に慷慨の烈士は、引つゞき起るに違ひない。

いづれにもせよ、一同は、是れから大阪へ乘出して、その打合せをする、と同時に、準備にかゝらう、と思ふが、諸君の考へは、どうであるか』

と、今迄は、秘密にして居た事を、すつかり打明けて、さらに進む可き道を示したので、一同も、勇み立つて喜んだ。

數日の後は、みな高知を離れて、大阪へ向つた。

大阪には、吉松の同志で、澤田熊吉といふものが居た。家には多少の資產もあり、大阪には、富裕の親戚も居たので、遊學の爲に、滯阪して居る身としては、可成り贅澤に、くらして居たので、吉松は、澤田に、一切の秘密を打明けて、準備に要する金の、工面を賴んだ。

澤田は、始終を聞いて、その志を壯なりとし、快よく金策を引受けてくれたから、吉松は、非常に喜んで、澤田の音信を待受けた。然るに、その後の澤田は、金策については、さらに返事も爲ず、何となく吉松を、避けるやうにして居るから、澤田の心事に、吉松は、疑ひを抱くやうになつた。

『オイ、澤田』
『やア』
『少し戸外へ出ないか』
『この寒いのに、運動でもあるまい』
『今日は、割合に温いから、まア出て見ろ』
『左樣か』
『佐野も、一しよに行く、といふて、戸外に待つて居るのだ』
『ゑッ、佐野も來て居るのか』
『うむ』
『それなら、内へ入れるがよいに、どういふ理由か』
『どうせ、君が出て來るから、戸外に待つて居る、といつて、佐野は、どうしてもはいらなかつたのだ』
澤田は、何氣なく立上つた。
『それぢや、出かけよう』
『さア、行かう』

明治十九年の正月三日、未だ門松も、その儘であるが、晝の暖ひに反して、夜は、さすがに寂しかつた。空は曇れて居たが、風は、非常に寒かつた。
『寒いぢやないか』

『少し歩いて見ろ、ぢきに暑くなるぞ』
『全體、どこへ行かう、といふのか』
『尻無川の堤でも、歩いて見よう、と思ふのだ』
『何だ、尻無川の堤へ行くのか』
『うむ』
『變だな』
『何が變だ』
『この寒いのに、川沿の堤とは驚いた』
『少し相談があるのだ』
『左樣か』
澤田の顏には、不安の色が、漂ふて居た。
俥に乘つて、三人は、尻無川の邊へ來た。此處は、市内を放れて、西成郡に屬するところである。左なきだに寂しい、川沿の堤へ、澤田を、兩人の中に挾んで、吉松と、佐野は、無言で、歩いて居る。
『吉松君、話といふのは何か』
『君に頼んだ事は、どうなつたらう』
『金策の一條かね』
『左樣だ』
『……』
『君は、快よく引受けてくれたから、我輩は、安心して居たのだが、その後は、君からの音信もなく、それに君の態

度も、少し變だ、と思つて、今夜は、君の確答を聞き度いので、かうして誘ひ出したのだが、金策は、どうなるのだらう』

『……』

澤田は、吉松に、問ひ詰られても、默つて居るばかりであつた。

吉松に代つて、佐野が、

『オイ、何とかいひたまひな』

『金策は、駄目だッた』

『何だと』

『年末に、少し無理をしたので、正月になつたばかりでは、どうにもならない』

『正月になつたばかりで、むづかしいといふ事は、決して無理とは思はぬが、年末に、何故工夫してくれなかつたか、それを聞き度いのだ』

『、、、すまなかつた』

『何が、すまなかつたか』

『違約して、すまなかつた』

『人の秘密を聞いて置いて、何故違約したか』

『だから、すまないといつて居るぢやないか』

『すまなかつたの一言では、此責任を免れる事は出來まい』

『それでは、どうしたらいゝのか』

『金をつくれば、いゝのだ』

『それが、出來ないのだ』

『貴樣は、變心したな』

『……』

『これッ』

と、いひ乍ら、佐野が、澤田を突いた。澤田は、よろけ乍ら、吉松の體へ當らう、とした。

『うぬッ』

吉松が叫んだ。逃げようとした澤田の胸倉を、吉松が取つて、ぐつと締めあげた。佐野は、身を退いて、ぢつと見詰て居るのであつた。

澤田は、首を、だらりと下げて、呼吸が絶えた。

『投げ込んでしまへ』

と、佐野がいふた。

ずる〳〵と、引摺つて來て、堤の上から、川へ投げ込んだ。

陛下の行幸は、吉松の聞誤りであつた。從つて、大官の西下も、全然無かつた。

暗殺の方法を、一變する外なかつた。佐野は、一同に先立つて、東京へ出る事になつた。正月二十二日、新橋へ着いて、宿を求めた翌日、忽ち捕はれた。吉松以下のものは、大阪に殘つたが、佐野の出發後に、既に捕はれて居たのだ。

明治二十一年七月二十四日、大阪重罪裁判所に於て、一同に對する、公判は開かれた。吉松と佐野は、普通の殺人犯として、死刑を申渡された。下村と間は、無期徒刑に處せられ、澤村と大井は、重禁錮三年の刑をうけた。

哈爾賓驛頭の慘劇

一

總理大臣の現職に在る人で、暗殺の難に遭ふたのは、原敬が最初の一人である。明治十一年に、大久保利通が殺されたけれど、その時は内務卿で、死後に、太政大臣を贈られたのであつた。

星亨の遭難は、大久保と原に相異して、政黨の首領として、反對黨に、陷入れられた點が多くあるが、いづれにしても、三人の死は、明治政史の上に、大きい響きを有つものである、といふ事に於て、同一であつた。

安田善次郎が、朝日平吾に殺されて、僅に一ケ月の後ち、原首相は殺された。

朝日が、安田を殺した趣意は、その斬奸狀に依つて、明白に知る事を得たが、今は之れを公表しない。中岡艮一が、原を殺すに到つた動機が、新聞記事の煽りに、集つた事は、容易に知り得たが、本人の告白を、はやく聞き度い、と思つて居る。

その斬奸狀なるものは、既に見て居るが、獄裏に、數年を過してからの告白は、どうであらうか。獨り、伊藤の死は、内政上の事情からでなく、朝鮮併合の事に關して、其動機を發して居る丈けに、同じ暗殺事件ではあつても、全く歴史的に、切放して記述す可きものである、と信ずる。

いづれにしても、斯うした事が、流行つて來たのは、恐る可き傾向である。國民の一部に、政府も信ぜぬが、議會

は、尚更信ぜぬ、といつた空氣が、漸く濃厚になつてゆくのは、實に寒心すべき事であつて、是れは、先覺者が大に考へなければならぬ事である。

乍併、その責任は、今の教育家にもあるが、朝野の政治家は、猶更に責任を免れ得ぬものがあらう。國民の投票によつて、議會に、席を有する人々が、餘りに放縱であり、且つ無自覺であることが、一部の國民をして、直接行動に出づるの覺悟を起させた、重なる一原因とも、見る可く、簡單に考へて、兇行者の取つた手段のみを、惡しざまにいふて濟ますべき、輕い問題ではない。

伊藤と、星と、原の三人は、均しく政友會の首領であつて、而かも、其最期は、兇器の爲めに、血を流して居るのだから、不思議の因緣とでもいふ可きか。

星と原の死は、酷く似て居るのみならず、その非難される點も甚だ、似通ふて居た。その性格も、或點までが一致して居るやうにも、思はれた。

原が、勳爵を辭したのを、平民的なりとして、非常な賛辭を、浴せるものが在る。墓標に『原敬墓』とのみ記した事を、頗る偉なりとして、大平民と稱して居るが、そんな事は、二十三年前に、星亨が、既に實行して居た事で、別に珍らしい事でもなく、論より證據、池上の本門寺へ行つて見たなへ。『星亨墓』と刻んである外に、一字も加へてない。原は、毎年六月廿一日には、星の墓前に立つて、それを見て居たのだから、その通りにやつた、といふても、別に不思議はない事である。所謂、平民的の政治家とは、さういふ事でなく、その政治的識見が、果して何うであつたか、といふ所に存するのであつて、肩書を好いたとか、或は嫌らつたとかいふやうな、末節については、どうでも可い譯である。

前後二回の内務大臣として、將た總理大臣として、國策樹立の上に、どういふ經綸を示したか、それを考へて、此に始めて、平民的政治家であつたか、それとも、貴族的政治家であつたか、といふ事が、明かに區別されるのであつ

て、墓石の字面などは、原を論ずる上には、何の論據にもならぬ。

普通選擧を危險なりとして、猶ほ制限選擧に、固執した人に、平民的政治家の識見が、有つたか何うか、それは頗る疑問とす可きである。

『政治は、左樣に簡單には出來ませぬ』

と、口癖の如くいふた原が、その死に當つては、極めて簡單であつたなどは、頗る皮肉の感が在る。

伊藤の死は、全く之れと運つて居る。刺客も朝鮮人であつて、その原因は、朝鮮併合の事からであるから、死の舞臺も、自から大きくあつた。

朝鮮の併合は、東洋の問題であつて、獨り日鮮兩國の問題ではない。問題の性質が、斯くの如く大きかつた丈けに、伊藤の死も、頗る榮えある最期であつた。

けれども、此三人が、ともに政友會の首領であつた、といふ丈けに、その死を語るのが、頗る興味ある事にもなる。

二

日清戰爭の結果として、支那は、朝鮮に對する、發言權を失つた。日露戰爭の結果として、露西亞も、朝鮮に對する、發言權を失つた。於此、獨り日本帝國は、朝鮮に對する、優勝國として、その外交上の全權を一任された。伊藤博文が、統監として赴任する事になつたのは、之れが爲めであつた。

東洋の大問題たる、朝鮮併合の事は、之れから起因したのであつた。著者は、その顚末を、極く解り易く、語つて見たい。

日露戰爭が濟んで、伊藤は、朝鮮へ渡り、暫らく京城に留まつて、國王を說きつけ、外交委任をうけたが、その復

命に歸る時、國王に拜謁すると、

『卿の頭髮と髯は、既に半ば白くなつて居るが、それは、勤王報國の爲めの苦勞が、その原因を爲して居る、と思ふ。卿は、今歸國せられて、更に此大任に當る可く、再來さるゝものと信ずるが、殘る頭髮と髯は、我國の爲めに、霜を置くの覺悟をして、貰ひ度い』

期ういふ事をいはれて、伊藤は、國王の信賴の厚きに喜び、更に統監として、京城へ落ちついてからは、眞に誠意を以て、朝鮮の爲に盡したのであるが、國王の一言は、お世辭の極致ともいふ可く、伊藤が、有頂天になつて喜んだのも、決して無理はなかつた。

併、お世辭は、矢張りお世辭であつて、その誠意ではなかつた。國力の及ばぬ爲めに、止むを得ず、屈從して居た丈けの事で、心には、深い怨みを持つて居た。何かの機會があれば、その不平は、必ず外に、現はれて來るに、極まつて居たのだが、それを悟り得なかつたのは、國王の諛辭で、すつかり己惚れて居たからである。

明治四十年の六月、海牙に於て、萬國平和會議が開かれる事になつた。其處で、國王は、三名の家來を、海牙へ送る事にした。

前議政府參贊の李相窩、前判事の李儁、前駐露公使館書記の李瑋鍾、その背後には、米人のヘルバートが附いて居て、此三人が、海牙へ乘込んで來て、平和會議の問題にしよう、としたが、どつこい左樣は、問屋で卸さず、それは問題にもされずに、書類は其儘、日本代表者の手に渡された。

朝鮮へ、統監を設くる事と、朝鮮國へ立入つて、世話をやく事とは、すでに各國の了解を、得て居たのであるから、國王が、どれほど騷いだ所で、平和會議の問題になる可き筈はなく、それを知らずに、此無駄働きをやつたのは、骨折損の草臥儲けであつた。

けれども、此事の顚末を、日本政府から知り得た時、伊藤の驚きは一と通りでなかつた。他の人のやうに、頭腦ま

で熱して、怒る質でない人も、此時ばかりは、眞っ赤になつて怒つた。早速に宮城へかけつけて、國王の前へ出た。

『先殿、小官が、歸國の際、種々仰せになつた御辭は、猶ほ御忘れでは御座るまい。小官は、此通り髮も髯も白くなるほど、貴國の爲めには心配して、盡せる丈けは、盡して居ります。それを殿下には、どう御考へになりますか』

と、語氣は、頗る荒く、態度も險しかつた。恰で詰るやうにして、問ひかけたのであるが、國王は、存外平氣で、少しも困つた樣子はなく、

『それは、どういふ事でありますか。卿を信ずる事は、今迄と、少しも變らぬのみならず、昨今に至つては、一層の信賴を以て、卿を、師父の如く、思つて居るのに、卿は、何を怒つて居られるのか』

『これを、御承知で御座いませう』

伊藤は、我政府から廻送した、國王の親書の寫眞版にしてあるのを、國王の前へ、差出した。

所が、國王は、之れを見て、眉毛一本動かさず、如何にも平然したものであつた。

『これは、筆蹟こそ、能く似て居るが、決して自分の知らぬ事で、斯ういふ惡戲を、爲るものがあるので困る』

と、その態度や言語の落ちついて、我不關焉と、澄し返つた調子を見て、伊藤は、

『少しも御承知のない事で御座いますか』

と、重ねて詰つたが、國王は、ます〳〵平氣で、

『更に知らぬ』

きつぱり言ひ切つて、素知らぬ顏で居られた。その間に、伊藤の癇癪も收まり、氣が靜かになると、すぐに知慧が、湧いて來た。

全體、人が怒るのは、智慧の働きでなく、智慧の行詰つた時、人は怒るものである。冷靜にして、能く考へる人は、容易に怒るものでない。智慧が行詰つて怒るから、怒つてゐるうちは、智慧が、休業の形で、何んな人も一寸先が判

らなくなる。伊藤ほどの人物でも、癇癪を起して、王城へ、かけつけた時は、何事も考へずに、只だ國王の不誠意を、咎むるつもりであつたが、國王の態度が、餘りに冷靜であつた爲めに、自分も、何時か落ちついて、頭腦が冷たくなると、すぐに智慧が、湧いて來るのであつた。

『國王が、これまでに白ばくれるなら、寧そのこと、國王の知らぬ事にして、誰かの僞筆であつた、とした方が、自分の面目も立てば、我國の立場も良くなる』

と、斯う考へたので、伊藤は改めて、その輕率を謝し、今後も猶ほ、信賴して貰ひ度い、といふ意味の事を述べたので、國王は、ます〳〵お世辭よく、『卿は、師父も同じである』を繰返へされたから、伊藤は、くすぐつたさを堪らへて、救援を求むる、國王の哀訴狀であつたから、其者を、直に京城へ、送りつけた。

日韓協約に依つて、互に了解を得、それから統監府を設けて、伊藤が、之れに任じたのであつて、その間に、少しの無理もなく、すべての事は、運んで居るのだ。然るに、一度ならず二度までも、斯ういふ事を企てる、といふのは、つまり一種の野心家が、國王を唆つて、爲る事には違ひないが、國王も又怪しからぬ。殊に、伊藤の面目は、これで丸潰れになるのであるから、流石に、伊藤も、今度は勘忍し得ず、之れを公然の問題として、改めて日本政府から、國王を、咎責する使節を送らせ、將來の爲めに、何等かの方法を、設けて置く外はない、と決心して、詳細の事を、本國政府へ申送つた。

此時は、二度目の西園寺內閣で、外務大臣は林董が、勤めて居た。伊藤からの報告と、意見を基礎とした、閣議が、幾回か開かれた後に、內閣に於ても、いよ〳〵林外相を、特別全權委員として、朝鮮へ派遣する事になつた。

三

事は、すべて秘密に運ばれたのであるが、何時か朝鮮政府の大官も、之れを知つて、不安の空氣は、漲つて來た。

當時の總理大臣、李完用は取敢ず、伊藤を、統監府に訪れた。

『今回の失態は、何とも申譯けがありませんが、それについて、御意見を承はり、善後策を講じ度く、お伺ひを致しました』

李の態度は、極めて慇懃であつたが、伊藤は冷然として、

『餘りに馬鹿氣た事で、我輩には、何の意見もない。日韓協約に基き、各國の了解を得て、實行して居る事に、何の不平があつて、斯ういふ事をせられるのか、その眞意が解らぬ。斯る事の度重なる時は、終に干戈を動かすやうに、なるかも知れぬ。それを、我輩は憂ふるのである』

大概な痴頑では、容易に激語を放たぬ人であるが、此時は、餘ほど怒つたものと見えて、頗るはげしい事をいふた。

李總理は、幾たびか頭を下げて、

『その御辭に對しては、何とも申しやうはありませぬが、國王の左右に居て、徒らに事を好むの輩が、斯樣な企てを、致した次第であつて、國王の御心には、敢て貴國と、爭ふ考へは、毛頭無いのであります。その點については、私から飽迄も保證いたしますが、失態は失態として、本當に謝罪の道も取りませう。どうか此事は、閣下限りとしての御取扱ひを、願ひ度い』

『イヤ、そりや折角の事ぢやが、御引受けは出來ぬ。既に我政府も、大に決心する所があつて、林外相を差向ける、といふ通知に接した』

『えッ、林外相が、御出張になりますか』

『左樣』

此に至つて、李も、止むを得ず引取つたが、どう考へても、此儘にして置く事は出來ぬ。何うかして始末をつけぬと、容易ならぬ事になる、と思つて、いろ〳〵に考へたが、自分丈けの才覺にゆかぬから、其處で、商工部大臣の宋秉畯を呼んで、此事の相談をはじめた。

李と宋の爲人について、少しく述べて置き度い。此二人が、朝鮮併合の根本人物であるから、日本人は、よく此二人を、知つて置く必要がある。

李は、どういふ人物か。先づそれから述べよう。此人は、兩班の出身で、疾く米國公使館詰の書記官となつて、明治廿一年には、代理公使になり、同廿八年には、學部大臣になつたけれど、此時代には、親露派の一人として、さかんに排日本の運動を、やつたものだ。

此外に、李範晋と李允用の二人が、同じ歩調を取つて、日本に反對した。當時は、親露派の三李と稱されたものだ。明治廿九年の二月十一日、國王と世子を、露國公使館に迎へ、詔勅を發して、親日派の內閣を倒し、金弘集、魚允中、鄭秉夏等を殺して、親露派の內閣を組織し、自から外部大臣となつた。

その後、種々の浮沈もあつて、明治卅八年の九月、朴齊純の內閣が、成立する時、伊藤は、此人を以て、大に利用す可し、と見拔き、推選して學部大臣にしたのが、我國との關係の始まりで、間もなく伊藤は、朴內閣に代ゆるに、李內閣を以てし、此に李完用の天下となつた。

李は、之れを深く思つて、伊藤の意には、敢て背かなくなつた。それからの李は、全く親日派として、よく動いて居た。

李と結んで、親日派の首領となりし、宋秉畯に至つては、善惡兩面の批評ある人で、才氣縱橫、膽玉の太いことは、

鮮人中、稀れに見る所、その出身については、區々の說があつて、或は賤民の子ともいひ、或は名門の出ともいひ、とに角、その履歷からが奇怪である。明治廿八年の閔妃事件の時、難を避けて、日本へ來り、それから十年、名を野田平次郎と稱して、言語も、態度も、日本人と少しの違ひがなく、日露戰爭の時、朝鮮へ歸り、日軍の爲めに努力し、殊に、人夫の募集に、滿足の成績を擧げ得たのは、全く宋の力であつた。左樣した事情から、多く日本人に、知己を有し、その爲人も知られて、李と共に、伊藤の信用する所となり、終に商工部大臣に迄、なつた男だから、尋常一樣の鮮人でない事は、固よりいふ迄もない。

李から、相談をうけた時、宋は、すぐに答へて、

『此問題の解決は、國王に、退位を迫り、世子を、擁立する外はない』

と、いふた。

その答へが、餘りに大膽なるには、流石の李も驚いたものか、しばらくは宋の顏を、見詰めて居た。

『林外相が、どういふ事を、いふて來るかは、充分に解らぬけれど、朝鮮の爲めに取つて、容易ならぬ問題を、持出すには違ひない。依つて、此問題の責任者たる、國王が、位を退けば、その解決は、速に決く、と思ふ。今日の急務は、國王の退位を以て、林外相の了解を求むるにある』

如何なる事件が起つて、國難を引起すとしても、國王の退位を、平氣で論ずるほどに、大膽なものは他にあるまい。

宋の說く所は、眞に正々堂々、朝鮮の國家を救ふには、此外に策なし、との信念から、國王退位の如き大問題を、平氣で論じ去るの勇氣は、終に李の心を動かして、同意するの止むなきに至らしめた。

『宜しい、それでは、國王に退位を、勸める事にしよう』

『此事は、よほど迅速に運びをつけぬと、之に反對するものは、頑迷な國民を煽動して、反對運動を起す恐れがあるから、咄嗟の間に取極めてしまはねば、とても行はれる事ではない。今夜のうちに、御前會議を開いて、ドシ〳〵運びをつけてしまひ度い』

『さう急がずとも、よからう』

『否、急ぐ。今夜のうちに限る』

『……』

『御前會議の席で、貴君が、先づ此事を云ひ出すと、必ず議論が、沸騰するに違ひない。その跡は、我輩が引受けるから、御安心なさい』

『それでは何分たのむ』

相談は、これで終つて、宋は、すぐ參內の上、國王の許しをうけて、御前會議の支度にかゝつた。

四

此夜の御前會議は、頗る緊張したものであつた。俄かに召集された大官よりも、先づ國王が驚いた。

李は、國王の退位の止むを得ざる所以を、一と通り說いて、席につくと、恰て蜂の巢を突いたやうに、議論も起れば、喞罵を加ふるものもあり、その騷ぎは、容易ならぬ事になつた。

四方八面、みな論敵で、李は、殆ど包圍のうちに立つて居るのだが、宋は、約束の通り、引受けてくれぬ。どこを風が吹くか、といつた態度で、平氣し込んで居るから、

於、此、李は窃かに思ふた。

『これは、宋の爲めに、一ぱい陷められたらしい。己れを此窮地に、押込んで置いて、知らぬ顏は怪しからぬ。好し

それならば、己れも李完用だ。何の糞ッ……』

と、流石に膽玉のある李は、四方から起る、非難に對して、片端から反駁を加へ、さかんに對抗した。

それを、凝と見て居る宋は、只だニヤ〳〵笑つて居るばかりであつたが、そのうちに時間も經ち、双方疲れ果て、全く沈默して了つた。

宋は、此處ぞと立上つて、國王の前へ、ずつと進み、

『只今、臣等が、不敬をも顧みず、強ひて御處決を促がし奉る所以は、實だに密使事件に就いてのみではありませぬ。殿下が、今日までの御所爲は、すべて内外に、信を失ふて居られる事、今改めて申上ぐる迄も御座りますまい。猶ほ此上に、その御位を惜ませられて、終に朝鮮の社稷を、何となされる御考へでありますか。臣は、玆に死を以て、殿下が、速かに退位あらせられて、世子殿下に、御國をゆづられん事を、御勸め申上げまする』

左右の大官には眼もくれず、國王の玉座に迫つて、これ迄に、大膽な舌を揮つた宋は、實に偉い男だ。

昔から能くいふ、氣を以つて撲つの呼吸を、心得て居る人でなければ、此放れ業は出來ない。李に、散々骨を折らせておいて、一同の疲れを待ち、それ等の人には構はず、直接に、國王に迫つた遣方は、非凡の腕前といふ可きである。

問題は、直に解決して、國王は退位、世子が即位、七月二十日の夜半にはじまつて、午後四時迄に、一切の手續きを終つた。

電光石火的の早業に、京城の市民も、只だ手を束ねて、その成行を傍觀するのみで、反對のものも呆然として、何の畫策もなし得なかつた。

統監の伊藤も、今は京城へ着いたばかりの林外相も、その手際の鮮かなるには感心して、李、宋の二人に信頼し問題の事は、深く追究せず、日韓兩國の協約を新たにして、事は一切すんでしまつた。

世子の即位には、各國の領事も參列し、伊藤も、稍や遲れて出頭した。その頃から、京城の内外、漸く騷がしく、追々に集まつて來る鮮民は、潮の如く殺到したが、城門、堅く鎖して、一人も入る事を得なかつた。

群民の一團は、忽ち李完用の官邸を包圍し、忽ち火を放つて、その騷ぎは非常であつたが、その他には、左迄の害をうけたものはなく、日本兵の警戒、宜しきを得て、群民は、夜の更くると共に四散した。

此時、伊藤は、李に向つて、

『燒打がはじまりさうぢや』

と、いふたら、李は笑ひ乍ら、

『私の家でせう』

と、答へて、平然たるものであつた。

五

國王の李熙は、四十四年間の王位を失ひ、大君として、全く隱居する事になつた。新たに國王の椅子についた世子は、それから後ち、伊藤に據つて、何事も決する、といふ有樣で、伊藤の勢力は、漸く宮中に迄、及ぼす事を得た。

一時騷いだ國民も、しばらくにして鎭靜に歸した。元來、朝鮮人は、煽動に乘り易く、雷同性に富んで居るから、騷ぎをはじめるのも早いが、少し上手に抑へると、靜まるのも早い。

李と、宋は、朝鮮の安危を、その肩にかけて、思ふさま行つて見たが、どうしても意の如くならぬ。第一に困るのは、金の無い事であつた。

山といふ山は、すべて禿げ山で、農産物の減少も、年を逐ふてはげしい。それに、毎年の水害で、土地は荒れるばかり、今迄の政弊から生じた、負債は、積んで山の如く、一切萬事を、日本政府の力に借りて、辛うじてやつて行く

丈けの事で、獨立國の政府らしい所は、一つも無い、といふの有樣であつた。これではならぬと思つて、やれる丈けはやつて見たが、どうしても駄目と、見極めがついた。

どこまでも、退守的に、ぢり〳〵貧乏で、國の自滅するまで、やつて見るか、それともに、何等かの方法で、獨立の體面などいふ事に構はず、損して德取れの現實主義でゆくか、いづれかに極める必要は、漸く足元へ、迫つて來た。李と、宋の考へにも、多少の相違はあつたが、何事にも、決斷の早い宋は、すでに一大決心を持つて、或る事を考へて居た。

宋は、一日のこと、統監府を訪ふて、伊藤に、面會を申込んだ。その用談は、極秘といふ事であるから、伊藤は、一切の來客を謝絕して、宋の密談を、聞く事にした。

『朝鮮も、此儘に置いては、自滅するの外ありません。といふて、救濟の道もありませぬから、朝鮮國民に對しては現在以上に、幸福の保證を、與へる事として、日本皇帝の統治の下に、移し度い、と思ひますが、閣下の御考へは如何で御座いませう』

如何にも突然の相談で、而かも朝鮮の獨立を空うして、日本帝國へ合併したい、との事は、やがて來る可き運命であるかも知れぬが、それにしても、朝鮮政府の大官たる、宋の口から聞かせられやうとは、夢にも思つて居なかつたから、伊藤も、何と答へのしようがなく、しばらくは沈默を守る外なかつた。

宋は、極めて沈んだ調子で、猶ほ言をつゞけた。

『朝鮮が獨立國として、歷史上の空名にのみ囚はれ、更に獨立國らしい事もなく、自然に衰滅しゆく狀を、私は見て居られない。焦つても、蹶いても、此國狀と民心とでは、如何とも致しがたい。望みの立たぬ事で、空しい働きをつゞけて、而かも國は衰へ、民は苦み、前途に何等の光明をも認め得ぬ、此狀態を、此儘に過す事は、私には、どうしても出來ませぬ。たとひ獨立の名は無くも、國を救ひ、民を寧んずるの道が立つなら、日本皇帝の統治の下

に屬するも、敢て否む可き筋はあるまい、と思つて、私は千思萬考の後ち、此外に策なし、と見て、私の一身は、或は之が爲めに、失ふ事になるかも知れぬが、今は、そんな事を、考へて居る時でない、と決心して、御相談に來た次第でありますが、それにしても、閣下の御考へは如何であるか、御意見を、伺ひ度い』

諄々として、說いて來る、宋の顏には、その至誠が、溢れて居た。

『君の意見は、よく解つたが、我輩には、今、何とも答へは出來ぬ』

『無論、これは大問題でありますから、即答して下さい、といふのは無理かも知れぬ。併し、閣下は、私の意見を、何う思はれますか』

『それは、折角の事であるが、我輩には答へられぬ』

『何故ですか』

『我輩は、今統監の職に在る』

『その事は、能く解つて居ります。然らば、閣下が、一個人の資格としては、どう思はれますか』

『人は能くいふ事であるが、これは個人の資格を以てするとか、やれ職務の上で何うとか、いろ〳〵の使ひ別けをするが、我輩は、生來の不器用で、然ういふ事は出來ぬ。何の資格であらうと、伊藤は、何處までも伊藤ぢや。そんな無責任の事は、我輩としていへぬ。また君が、聞いた所で、何にもなるまいから、此話は聞いて置く丈け、此場限りにして、貰ひ度い』

伊藤は、矢張り偉い所があつた。宋が追究するやうにして、種々いふたけれど、伊藤は終に明答を避けた。

宋が歸ると、伊藤は、呼鈴を押した。

『御用で御座いますか』

『うむ、內田を呼んで來い』

『ハイ』

『若し居らなかつたら、出先きを搜して、すぐ來るやうに、いふてくれ』

『ハイ』

『はやくしろ、いそぐのぢやから……』

『ハイ』

内田とは、抑も何人か。

六

朝鮮と支那に、何かの問題が起ると、必ず浪人組の活動が始まる、その度毎に、内田良平の名が現はれて來ることは、誰れも能く知つて居るであらう。

昔の立憲改進黨が、進歩黨となつた頃、福岡縣代議士として、相當に知られて居た、平岡浩太郎といふ人があつた。良平は、此人の甥に當り、父は、良五郎と謂ふて、最近まで生きて居たが、黒田藩士の一人で、維新の際には可成りの活動をして居る。

浪人組といふても、その組合が、ある譯ではない。支那と朝鮮を股にかけて、いつも素晴しい事を、考へて居る連中、惡くいへばチヤンゴロとも、朝ゴロともいふが、とに角、日支兩國を往來して、金も儲けるだらうが、生命がけの仕事をして居る人々で、之れを一言に、浪人組と稱して居る。

良平が、朝鮮へ、關係の始めは、明治廿七八年の日清戰爭からで、その時に、鈴木天眼、武田範之、田中侍郎などいふ豪傑連が、朝鮮へ押出し、到る處に、水滸傳式の活動をやつて、東學黨の全俘虜を援け、全羅道を蹂躙したのが有名な天祐俠の一團で、良平は、そのうちの優なるものであつた。

東學黨の暴れる力が、はげしくなるほど、支那政府の干渉は、ひどくなつて來る。鎭撫を名としての出兵沙汰も、實は之れが原因であつた。

天祐俠に屬する十三人は、その豪傑振りに於て、いづれ優劣はなかつたけれど、良平は、嘉納の講道館から出て、柔術が強く、横山、西郷等の勇者と共に、名を知られては居たが、獨り喧嘩八段の稱を得たものは、良平ばかりであつた。

道場の試合と、喧嘩の時とでは、その力が倍加する、といふので、喧嘩八段といはれたものだ。

日清戰爭は、東學黨の内亂を名として、支那政府が、朝鮮へ出兵した。それを不都合なりとして、日本政府から、撤兵の請求をしたのが、主なる原因となつて、此に開戰の運びになつたのであるから、東學黨の内亂は、我國運の發展に、此上もなき好機會を與へてくれたといふ事になる。從つて、その東學黨を援けた、天祐俠の働きは、日清開戰の原因の一つともいへる。

支那が、朝鮮へ出兵した事は、明治十八年の天津條約に違反して居る、といふのが、我政府の主張であつて、その條約に基き、撤兵の請求をしたのであつた。

天津條約は、どうして結ばれたか。それは、明治十七年の朝鮮事件が、日支兩國の交渉となり、李鴻章と伊藤博文の間に、此條約が、結ばれる事になつた。その際、原敬は、天津領事として、能く働いた。

良平等が、天祐俠の旗を擔ぎ、朝鮮八道を、暴れ廻つた事は、明治の水滸傳として、後ちに傳ふ可き豪傑談として勇ましい物語に、富んで居る。或時は、爆烈彈を投げ、また或時は、日本刀を揮ひ、さかんに人を殺傷して、朝鮮の大官を驚かし、支那の兵士を威嚇して、日本人の俠勇を示した。

東學黨の力盡きて、終に四散するの悲運に陷つてから、良平等も、また日本官憲の逐ふ所となり、果は、殺人强盜の罪名を以て、物色される事になつた。

けれども、それは一時の寃に過ぎず、何時とはなしに罪名は消えて、青天白日の下、再び横行闊歩するの身とはなつた。

爾來、良平は、多く朝鮮に居て、時に、政府の對韓策に、反對する事もあり、また時に、政府を援けて、暗中飛躍をやつた事もある。良平と、朝鮮と、その間には、深い〳〵緣が繫がつて、兩者は、情死する迄も、離れる事の出來ぬほどな、濃い交情になつて了つた。

伊藤は、統監府へ良平を引入れて、自分の懷刀にしたので、伊藤の左右に居るものが、之れには驚いた。

浪人とは、讀んで字の通り、浪の上の人、一定の職業なく、從つて、一定の收入もない。その談論は、天下國家の事に留まり、大言壯語して、眼中に王侯なく、財は、天下の共有、敢て自他の別を立つる要なし、とあつて、朝に、千金を得て、夕に之を散じ盡す、言、必ずしも責任を有せず、行ひ、必ずしも節制を守らず、爲さんと欲する所は、何でもやつつける、といふ、斯んな危いものを、うつかり引付けて、若し變な事でもやられては、それこそ一大事である、と、左右のものから伊藤に、いろ〳〵いふたけれど、伊藤は、更に受付けなかつた。

『毒藥は、恐ろしい物であるが、その量を巧みに用ふれば、却つて良藥となり、人の生命を、救ふ事がある』

伊藤は、何時も、斯ういふ言を、くり返へして居た。其處に、伊藤の面白い氣分が、現はれて居る。

良平は、長く朝鮮に出入して、上下に交友多く、從つて、內外の情僞にも、通じて居るから、統監府の手の及ばぬ所に、良平の力を、要する事もあつた。

殊に、秘密を嚴守する、鮮民の內情は、容易に知る事を得ない。統監府の役人を、毛蟲の如く、忌み嫌つて、絕對に寄せ付けぬものがある。それ等に近付いて、鮮民の心情を知るには、どうしても、良平の如き人が、必要であつた。用意周到な伊藤は、さうした點から、良平を、重く用ひて、只だ一日の役に立てる爲めに、百日の祿を與へよう、と

いふのであつた。

良平は、宋と、殊に親しくして居た。東學黨の時代から、宋とは、相識の間で、大概な秘密は、宋も、良平には、うち明けて居たのである。

宋が、伊藤に知られて、大臣になつたのは、良平の進言も、與かつて力のあつた事は、宋も、能く知つて居た。その宋が、朝鮮の合併を、伊藤へ、持出す迄に、良平の知らぬ筈はない。けれども、良平の口からは、その噂さすら聞かなかつたので、それには、伊藤も、多少の疑ひがあつた。

宋の歸るをまつて、伊藤が、直ぐに良平を、迎ひにやつたのは、無論、その事情も絡んで居た。

『やア、御用ですか』

と、良平は、椅子につき乍ら、浪人一流の態度で、先づ口を切つた。

『宋が、今來たのぢや』

『はは了、どういふ事でした』

『君は、相談に與かつて居ないのか』

『全體、何でした』

『朝鮮を合併してくれ、といふのぢや』

『成程……』

『やがて、其運命に、陷る事は、既に判つて居たが、宋の口から、之れを聞かう、とは思なかつた』

『其處が、彼の價値です。何事にも、打算の早い奴ですからな』

『併し、今では、商工部大臣ぢや』

『そんな事、彼の眼中に在るものですか』

『うむ、然うぢやらう』
『閣下は、何と仰しやつた』
『我輩は、統監をして居るから、何とも答へられぬ、といふてやつた』
『それで宜しい。その外に答へやうはないでせう』
『實は、それ丈けの事を、君に早く話して置かう、と思つて、迎ひにやつたのぢや』
『よく解りました』
『宋に、會つてくれるか』
『逢つて見ませう』
『此事は、大切な問題ぢやから、宋に、輕卒な事をせぬやう、君から、深く注意してやつてくれ、宜しいか』
『承知しました』
良平は、宋に、會ふて見る、といつて、すぐに出て行つたが、それについて、伊藤は、何事も敎へなかつた。
流石に、伊藤は、微賤から身を起して、彼れ迄になつた丈けあり、浪人の使ひやうを、知つて居た。
斯うした問題について、餘計な事を、敎へた所で、浪人が、その通りにやるものでない。良平には、良平の考へもあつて、容易に、伊藤の命令通りは動かぬ、といふ事は、知つて居るから、只だ宋からの話を打明けて、簡單に、宋を訪ねて見ろ、といつた所に、浪人を取扱ふ妙味はあるのだ。
良平が、宋を訪ねて、此問題が、何ういふ風に發展するか、伊藤に於ても、之れは頗る興味ある事として、良平の爲す所に、深い注意は、拂つたに違ひない。

七

內田が、伊藤に附いて居るので、宋の爲めにも好都合であつたが、內田も、宋に依つて、鮮民や、政府の內情を、よく知る事を得て、互ひに便宜は得て居た。
宋が、朝鮮の合併を、伊藤に、訴へる迄には、相當に研究もすれば、同志に極秘で、うち明けて居たのは、言ふ迄もない事だ。內田は、日本人でも、宋の爲めには、同志の關係に、なつて居たので、宋に、其希望のある事は、早くから內田は、知つて居たが、外の問題と違つて、容易ならぬ事であるから、內田は、深く秘して、伊藤にも語らず、密かに其機會の來るのを、待つて居たのだ。
然るに、宋は、內田へ相談なく、伊藤へ直接に、語つた所が、伊藤は、意外にも、快諾を與へず、極めて曖昧な返辭をしたので、之れには、宋も、少しく不平であつた。
『內田さんが、見えました』
と、いつて、執次のものは、宋の答へを待つ。時刻は、旣に夜半の一時近く、宋は、もう寢よう、とした所であつた。
『宜しい、此方へ……』
『ハツ』
執次の老人は去つた。
今頃に、內田が、何でやつて來たか、宋には想像がつかなかつた。平生でも、內田は、不意に訪ねて來て、すいと歸る事がある。けれども、斯んな時刻に來た事はない。宋は、どう考へても、內田の來意が解らなかつた。
『やア、未だ起きて居たかね』
『今寢ようとしたら、君が來たといふので、待つて居る所ぢや』

『それは、氣の毒であつた』
『横になつても直ぐ眠れやせぬから、まア話でも聞かう』
『今夜は、泊めて貰はうか』
『宜しい。それでは一つ部屋で寢よう』
『さう出來れば、好都合ぢや』
邸宅は相當に廣いのだから、座敷の數も少くないが、内田のはいつて來た樣子を見て、何か仔細のあるらしく感じたので、宋は、殊更に自分の寢室でなく、客室の方へ案内して、内田と並んで寢ようとした。
四邊は森閑として、塵の落ちる音も聞えさうだ。しばらく無言で居た二人は、互に何か考へてゐるらしく、内田を見詰めて居る、宋の顏を、内田は、熟と見返しながら、
『君は、統監に、何か話したか』
『うむ』
『何を話した』
『……』
『そりやア、合併の問題ではないか』
宋は、重苦しい口調で、
『如何にも其通り……』
『どういふ風に話したか』
『我輩の持論を、其儘に、合併の急務を說いたまでぢや』
『統監は、何と答へた』

『可否はいへぬ、といふて居た』
『それを君は、何と思ふか』
『どうも、統監の眞意が解らぬ』
『統監が、合併の事について、可否をいはぬのは當然ぢや』
『何故か』
『統監の職に在る人へ、輕卒に、其んな事をいふて、すぐに答へを求めたのは、君の誤りぢや』
『さうかな』
『よく考へて見るがよい。君が統監であつたら、矢張り答へは出來まい。君に其眞意があるなら、順序を履んだ交渉でなければ、とても物にはならぬ。統監へ、直接の交渉は、頗る拙かつたよ』
『どうすれば、可いか』
『先づ桂總理大臣に交渉するのが、當然である、と思ふ』
『成程』
『桂が、充分に了解して、内閣の問題になつてから、統監の意見を求めて來る、そこで問題は、初めて生きるのぢや。桂を差措いて、統監に話しても、統監は、可否をいへまい。何しろ重大な問題であるから、その順序は忽せにされぬ。愼重に考へて、貰ひ度い』
是れから、内田は、内閣と閣外の關係や、人と人の、行掛り、その他の事情を、詳しく說明してやつたから、宋にも、能く了解が出來て、何れ近く機會をつくつて、東京へ、出る事を約した。
伊藤は、内田から、一切の事情を聞取つて、獨り微笑んで居た。それからの内田は、さかんに暗中飛躍を試みて、ひそかに、後日の機會に乘ずる、準備にかゝつた。

八

内田と同じ福岡縣人で、夙くから、僧籍にはいつて居た、武田範之といふ怪物があつた。一見した所では、極めて平凡な人であつたが、禪門の一僧侶として、全く功利の念を離れ、日韓の合併を、その理想として、明治廿六年以來殆んど京城に入浸つて、衣食住ともに、鮮民と同じく、その信用も、一段と深くあつた。鮮民の同志として、日清戰爭が濟んでから、十幾年の長い間、彼等の爲めに、よく親切に世話をして來たので、彼等が、武田に對する信賴は、よほど深くなつて居た。

明治廿六年に、東學黨の亂が起つて、日清の關係が、日を逐ふて面倒になりゆく、その機會に乘じて、東學黨へ入込み、全俸準に、力を添へて、清兵と戰ふたものが、天祐俠の一團であつた事は、前回にもいふた通りで、武田は、實に其中の一人であつて、殊に、其學問と文章は、頗る全等に對する、應接の援けをなした。

（東學黨の首領は、崔時亨であるが、全俸準が、參謀長として控へて居た。全は、一種の人物であつた）

鮮民が、宗教に對して、深い信仰を有つて居るのは、武田の爲めに、最も好都合であつた。東學黨の亂は鎭まつたが、引きつゞいて日清戰爭は始まつた。その結果として、日本は、今迄の支那に代つて、東洋に於ける、優者の位置に立つた。從つて、日本の責任は、頗る重くなつて來た。それ丈けに、政府も、國民も、朝鮮に對する注意は、一層深くなつて來た。けれども、支那や朝鮮に對する事は、單に外務省の役人が、机の上で取扱ふ、平凡の事務とは違つて、その内容には、非常に面倒な事もあり、一と通りならぬ掛引を要する。それには、浪人の力に、待つ可きものが多く、その浪人を、使ふ事に於て、外務省は、殆んど無力無能であるから、浪人は浪人として、自分の思ひ通りに、勝手な事をやつてゆくので、外務省の方針と、全く行違ふ事もあるが、幸ひに、浪人の仕事は、着々效を奏し、却つて外務省の方に、幾たびか失敗した事もあるが、僥倖にも、左迄の禍を、殘さず、濟んだ。追々に出かけてゆく、浪人

のうちには、いかゞはしい人もあるが、さういふものゝ爲す事は、極く小さいから、大局の上には、更に影響はなかつた。

乍併、武田や、内田の一列が、その間の苦辛は、實に非常なものであつた。崔時亨も、全俸準も、既に無慘の死を遂げて、東學黨は、支離滅裂になつて了つた。

朝鮮政府から見れば、慥かに一敵國の如く、思ふたのも無理はないが、日本政府までが、之れを邪魔物扱ひして、叩き潰す事に努めたは、愚も亦た甚しい事であつた。

東學黨が、さうした憂目を見たばかりでなく、武田や、内田も、一時は、政府に逐はれて、日蔭の身になつた事もある。

その間に於ける、彼等の苦辛は、眼もあてられぬ狀であつた。今の長崎に、一勢力を張つて居る東洋日出新聞、その社長と、主筆をやつて居たのが、例の鈴木天眼であるが、是れも天祐俠の一人であつた爲め、强盜殺人の令狀を發せられて、長い間、苦んで居た。

生命がけで、國の爲めに働いて、それが却つて身の災ひとなる。志士義人として世に立つも、また難い哉である。

（天眼は、前年死んだ。武田は、今では龍山に祀られて在る）

東學黨のうちに、李容九と謂ふ人があつた。朝鮮政府が、支那の袁世凱に、巧く煽られて、東學黨の潰滅に努め、その黨與は、片端から引ツ捉へて、嚴刑に處した。崔や全も、之れが爲めに殺されたが、李も、また捕はれて長く囹圄に苦んだ。

李は、幸にして死を免れ、獄を脱して、咸鏡道に入り、先づ大集團をつくり、自ら其首領となつて、侮る可からざる、勢力を植ゑつけた。それは有名な待天教なるものであるが、更に、李は、政治的の集團を作る必要を感じて、後に進歩會なるものを組織した。之と前後して、宋秉畯は、一進會なるものを興して、さかんに味方を集めた。

彼是して居るうちに、李と宋の主張が、漸次接近して來た。李の背後には、武田が隱れて居ると、同時に、宋の相談役には、内田が附いて居た。

終に機會を得て、兩者の握手が成り、此に進歩と、一進の兩會は合併されて、更に一進會と稱し、合併の條件として、李は、其會長となり、百萬の會員を有して驚く可き、勢力を張るに至つた。

之れ迄に仕上げる、武田と、内田の苦心、それに列なる浪人の努力は、決して輕視する事は出來ぬ。

九

宋は、機會を得て日本へやつて來た。野田平次郎の名で、東京へ乘込んだ。

此時に、桂總理大臣は、宋を招いて、日韓合併の意見を聞取つた。軍人から出て、政治家になつた桂は、何等か大きい仕事をしたい、といふ野心を持つて居たので、宋の合併論を歡迎したのは當然の事であつた。

結局は、金の問題になつた。合併を遂行するとして、何れほどの金が費かるか、それを聞いて見たいのが、桂の眞意であつた。

純然たる、獨立王國を、戰爭の結果でなく、談笑の間に受授しよう、とするには、少からぬ、金を要するのは、固よりいふ迄もない。只だ金の額が、どれほどであるかを、知り度いのだ。

宋と、李が、一進會を率ゐて、如何に勢力はあるとしても、鮮民のすべてが、合併を希望して居るとは思へぬ。そのうちには、多くの反對もある、に極つて居る。從つて、合併の際には、幾多の騷擾は、免れまい。宋が桂に對してどれほど保證した所で、無事の引渡しは、先づ不可能であらう。而て見れば、それについての事も、考へて置く必要はあつた。

何事についても、打算の細かい桂は、その邊の質問が、存外に立入つて居た事と、想像される譯で、宋は、それに

對して、

『一億圓あれば、充分である』

と、答へた。

桂は、之を聞くと、眼をまるくした。

『何ッ、一億圓要る。ふふーむ』

宋は、その態度を見て、

『安いものですな。一丸放たず、一兵卒を損せずして、數百年來の獨立王國、而かも十三道の山川草木、千五百萬の人間まで、そツくり貴國の統治の下に、はいるのですから、之ほど安いものはありますまい』

『……』

『それといふのも、畢竟は、鮮民の幸福の爲を、思へばこそであります。我輩に、一點の私心なく、徒らに獨立の虛名に囚はれて、鮮民を、惡政の下に苦しむるのが、如何にも可哀想ですから、生命を賭して、此主張を爲るのであります。また貴國としても、然ういふ都合になれば、一と安心といふものでせう。その代償金が、たッた一億圓です。それも總べては、鮮民の慰撫に、使はれる金ですから、高い安いの說は、起らぬ筈と思ひます』

雄辯に任かせて、宋は、諄々として說く。桂も、少し落ちついて、

『よく解つた。敢て金額の多寡を、いふのではないが、とに角、一億圓といへば、我國の財政から見ると、少なからぬ金ぢや。今直ちに之を決する事もならぬ』

『それは、御道理です。我輩も、即答を伺ひたい、と申すのではありません。單に御尋ねに對する、我輩の見込を、申述べたまでの事であります』

『いづれ熟考の上、さらに御相談いたす事に致さう』

『承知いたしました』

宋と桂の會談は、之で終つたが、日韓の合併が、實際の問題として、取扱はれるやうになつたのは、それから後の事である。

桂は、俄かに活動をはじめた。その事の合併問題たるは改めていふ迄もない。各方面の了解を、得てからでないと、表面の問題にもならぬから、それが爲の活動であつた。

斯ういふ事については、一番むづかしい人とされて居る、山縣も、之には何の異存もなかつた。

朝鮮の運命は、どうしても斯うなる可きものと、大概な人は推測して居るのだから、今ま此話がはじまつたとて、それに驚く人もなからう。日本としても左樣するのが、最も安全の道なのであるから、一たび相談が起ればその進みは、存外に早く各方面の了解は、忽ちに得られたので、桂は、頗る安心の態であつた。

そのうちに、伊藤統監も、歸つて來たので、桂と、小村外相は、うちつれて伊藤を訪ねた。伊藤は、宋の意見を、先きに聞いて、それからといふものは、京城に居て、各方面の人にも逢ひ、大體の方針は、自分でも、極めて居たから、桂と小村の相談をうけて、すぐに同意の旨を答へた。

桂は、合併の事を、成遂げた人ではあるが、桂の實力が、此大問題を、解決し得たものとはいへぬ。全く斯うした場合に、總理大臣であつたのが、好運の人であつた、といふ迄に過ぎぬ。

合併について、費やした金は、三千餘萬圓であるが、宋が、必要であるといふた、一億圓に比べると、遙かに少くなかつた。當時、桂は、之れを誇りとしたけれど、實は一文惜みの百損であつた。

宋は、後日の故障まで考へて、一億圓在れば、一切の處置が、つくものと見たのであるが、桂は、安く仕上げ度い、

との考へから、後日の故障を考へなかつたらしい、此一事は、桂の器宇が、甚だ小なるを證し得ると、同時に、失敗であつたともいへる。

合併の事が成つてから、一進會の解散を促がし、その手當として、四十萬圓を出して居るが、それも失敗であつた。七十萬人の會員を有する、一進會に、四十萬圓とは、餘りに馬鹿らしくて、お話にもならぬ。

李容九は終に之れが爲め、憤死して了つた。大正七年頃から起つた、獨立運動のうちには、此不平もあつて、一進會の根據地たる、咸鏡道に、此運動のはげしいのを見ても、桂が、善後の策を、誤つた事は、明かである。

一〇

樞密院は、山縣の了解を、得て居るから、更に心配はなく、內閣は、能く纏まつて居るし、その上に、伊藤が承知である、とすれば、問題の進みは、早いのが當然であつた。

朝鮮の方は、總理大臣の李完用も、宋と同じ立場で、非常な決心を持つて居るから、大勢は、既う定まつたやうなものだ。

只だ殘るものは、列國の思惑のみであるが、これも、小村の飛躍が、着々效を奏して、それ〴〵に、了解を得た。

於此時、御前會議の運びになつた。要するに、合併の事は、充分の運びが、ついて居たので、御前會議にも、左迄にむづかしい事はなく、忽ちにして決定した。

此時に、一番の氣懸りは、露國の諾否であつた。小村外相と、公使の間には、相當の了解はあるとしても、本國政府の思惑は何うか、との懸念は、充分に深くあつたから、其處で、伊藤に、此大任を負はせる事になつた。

伊藤は、大體に於て、合併の事が決すると、統監の職を辭して、東京へ引上げて來た。此辭職には、二つの事情が

ある。その一は、副統監の曾禰荒助が、頻りに醫藥に、親しんで居るのを見て、伊藤の親切氣から、此功名を、讓つてやり度く思つたのと、もう一つは、自分が、統監をして居るのが、却つて働きの妨げになると、見たからであつた。

然るに、曾禰は、統監になつて後ち、その病氣は、倍々重つて來たので、日本へ引上げて、合併の成立を見ずに、此世を逝つて了つた。

伊藤の辭職と同時に、內田も朝鮮を去る事になつた。合併の機運が、これ迄に熟して來れば、もはや自分の居る必要はなく、且つ伊藤には、よく知られて、重く用ひられたが、桂とは、餘り善くなかつたので、一先づ退いた方がよい、と考へて、一進會の顧問を、同鄉の先輩、杉山茂丸に讓つて、朝鮮を離れた。

伊藤は、此時に、內田へ、五千圓を贈つて、今迄の勞を謝した。

『君にも、種々骨を折らせたが、政府としては、之れに對してどうする事も出來ぬ 殊に、合併の事も、未だ終了したのでなく、その半途に、居るやうな譯であるから、これは、僅んの我輩の心から、挨拶する迄の事ぢや。俥代として、取つて置いてくれ』

と、いふて渡されたので、金は僅かに五千圓でも、內田は、快よく受取つた。

杉山は、世間から法螺丸といはれて居るが、その手腕には、物凄い所があつて、斯うした場合に飛込んで、はね廻るには、持つて來いの人である。殊に、桂とは、相當に知合ふて、杉山のいふ事は、桂も、能く肯く事がある。內田の伊藤に於ける如く、杉山は、桂に好感を持つて居られる所から、內田は、杉山を、一進會へ送り込んで、自分と入れ代はらせたのである。

內田の伯父、平岡浩太郎と、杉山は、刎頸斷琴の交りがあつて、人を說く上にも、一種の辯舌を、持つて居るし、武田とも、極めて深いから、杉山が、一進會へはいつたのは、武田の寡默重厚なのに比べて、杉山の潑溂機敏を以てする。此位の組合せは、多く在るものでない。

却說、伊藤は、愈よ露西亞政府へ、交涉の爲め、陛下の大命を拜して、日本を離れる事になつた。

表面の口實は、世界漫遊といふのであつたが、實は此大任をうけたのである。此時に、露國の大藏大臣ココフツオフが、哈爾賓に居るのを幸ひ、先づ此人を說きつけて、それから北京へ廻り、支那政府の了解も得て、其上で聖彼得堡へ行くつもりであつた。

東京を出て、下關から、朝鮮へ渡らうとする時、更に內田を、春帆樓へ呼んで、

『君等にも苦勞をさせたが、合邦の事も、漸く斯ういふ都合になつて、我輩の歸國と、同時に、いよ〳〵遂行される事と思ふが、此運びに迄なつたのは、獨り政府の力のみでなく、君等の盡力も、淺からぬ事と、我輩は、能く知つて居る。就ては、正式に、君等を慰勞するには、自から道もあらうが、とに角、我輩の寸志を呈して、置き度い』

といふて、また〳〵一萬圓を、內田に與へた。重ね〴〵の事に、內田は、却つて恐縮した位である。

此內田が、其後ち、同光會なるものを興して、鮮人の感情融和を謀り、兩國の有志を集めて、頻りに奔走して居るが、これは左樣なくてはならぬ。內田の役廻りとしては、最も適任であつて、從來の因緣から見ても、內田は、此事に終始す可き責任があるのだ。

一一

伊藤が、哈爾賓へ着いたのは、明治四十二年の十月廿六日であつた。汽車は、午前九時に、停車場へはいつたので、豫て打合せて置いた通り、ココフツオフは、疾くから來て、待つて居た。

先づ客車にはいつて、伊藤と握手し、それから二人は、連れ立つて、プラットフォームを除行した。露國の兵士が、列を整へて、最敬禮をして居るから、伊藤は、その方へ向つて、二三歩進んだ時、出迎への群集のうちから、一人の壯漢が、ピストルを差向けるや、一發放つた。その彈丸は、伊藤の下腹部に中つた。續いて二發いづれも、命中した。

左右のものは驚いて、兇漢を抑へよう、とするやら、まさに倒れんとした、伊藤を扶けて、その身邊を掩ふやらした。

それ等の人に對して、兇漢は、彈丸の在る丈けを放つた。それが皆な中つたのだから、兇漢の沈身は、眞に鷙く可きである。

惜い哉、伊藤は、之れが爲めに、終に斃れた。七十年の生涯は、全く此に終りを、告げた事になる。

兇漢は、安重根と稱する鮮人であつた。合邦の希望者があると、共に、その反對者のあるは、當然の事態で、此位の事は、誰れにしても豫期したであらう。

長い間の獨立國が、俄かに他國の統治を受けるとなつたら、必ず憤激の血を湧かして、種々の過激運動を起す事は、宜だに朝鮮のみに限らぬ。どこの國でも、同じ事で、また左樣あつて然る可きだ。

安重根は、未だ二十四五の壯年で、その狙撃の際に於ける、態度は、實に落ちついたものであつた。その背後には、多少の味方もあつたらうが、それは終に判らなかつた。

伊藤の死は、悼む可きであるが、その代り、合邦の事は、之れが原因となつて、一層その期をはやめたのみならず、萬事は、手際よく運んで、伊藤の思ふた通りになつたのだから、無益の死とはいへぬ。

況して、國葬の禮を以てせられた以上、死後の光榮、之れに過ぐるものはない。伊藤は、實に好運な政治家であつた。

明治になつてからの伊藤は、今改めていふ迄もなく、政治家として終始した。殊に、明治十一年以後は、大久保利通の跡をうけて、その才識を、政治の上に現はし、四十年間を通じての大政治家であつた。

その治績について、一々批評を加へたら、功罪交々あるであらうが、とに角、此人ほどに、長く政權に與かつたものはない。藩閥の出身であり乍ら、その臭味も薄く、人を用ゆるに、比較的公平であつた事は、その左右に居たものを見ればすぐ判る。

權勢に對する執着は、可成り深かつたけれど、平生の擧措は、極めて平民的であつた。人に對する情愛も、相當に親切であつたが、厭になると、直ぐ捨てゝ了ふ癖があつた。

藩閥出身の政治家として、眞ツ先に、政黨組織を試みたのは、此人であつて、今の政友會は、實に伊藤の創立にかかるものであるが、星亨の死に依つて、頗る落膽した上に、黨の代議士が功利にのみ、汲々として、國家を想ふの念に、薄きを慨き、終には名を、洋行に託して、政友會と緣を絶つてしまつた。

最後の仕事としては、朝鮮の併合であつた。而かも、その事について、暗殺されたのであるから、伊藤の死は、實に堂々たるものであつた。

愚にもつかぬ內地の政爭や、個人の感情から、起つた事件で、暗殺に逢ふたものも決して少なくないが、獨り伊藤は、國際の問題で倒れたのであるから、死の輪廓が頗る大きくあつた。

一二

伊藤の死につゞいて、京城に同じ事が、くり返へされた。それは總理大臣の李完用が、匕首を以て、刺された事變で、一時は大騷ぎであつたが、之が爲に、却つて合邦の事件は、早く運ばれるやうになつた。

一進會を代表して、李容九から、合邦促進の意見書が、日本の政治家へ送られ、その熱烈な運動は、內外の人を動かして、合邦の議は、愈よ決したが、それ迄には、却々に議論もあつて、合邦の協約書が出來るには、種々の曲折の

あつた事は、いふ迄もない。

第一には皇室と功臣の處分に關する事で、是は至難しい問題として、一番の難關であつたが、斯ういふ事に極まつた。

韓國皇帝は、帝國の皇族待遇として、其席次を、皇太子の次ぎ、各親王の上に、置く事とし、太公といふ尊稱を案出したのである。また皇室費は、從來の儘、一ケ年百五十萬圓とし、すべて急激な變革は、避ける事として、對皇室方針は決定した。義親王以下の皇族には、すべて公爵を授け、其歳費は、從來の額に、五割を增加する事にした。

現大臣、元老、其他の功臣に對しては、日本と同じやうに、侯、伯、子、男の榮爵を與へ、三萬圓以上十五萬圓以下の公債證書を、渡す事に決めた。

其他、一般の人民に對する事も、それ〴〵に定められて、此に愈々條約を結び、韓國の統治は、日本皇帝の手に移る事となつた。

曾禰は、不幸にして此時には、既う地下の人であつた。それに代つて、寺内正毅は、新しい統監として、合邦の條約に署名した。

此事は、重大問題であるから、その條約の全文を寫す事にする。

日韓併合條約

日本國皇帝陛下及韓國皇帝陛下ハ、兩國間ノ特殊ニシテ親密ナル關係ヲ顧ヒ、相互ノ幸福ヲ增進シ、東洋ノ平和ヲ永久ニ確保セントコトヲ欲シ、此目的ヲ達センガ爲ニハ、韓國ヲ日本帝國ニ併合スルニ如カザルコトヲ確信シ、茲ニ兩國間ニ併合條約ヲ締結スルコトニ決シ、之ガ爲メ日本皇帝ハ、統監子爵寺内正毅ヲ、韓國皇帝陛下ハ內閣總理大臣李完用ヲ、各其ノ全權委員ニ任命セリ、因テ右全權委員ハ、會同協議ノ上、左ノ諸條ヲ協定セリ

第一條　韓國皇帝陛下ハ、韓國全部ニ關スル一切ノ統治權ヲ完全且永久ニ、日本皇帝陛下ニ讓與ス

第二條　日本國皇帝陛下ハ、前條ニ揭ゲタル讓與ヲ受諾シ、且全然韓國ヲ日本帝國ニ併合スルコトヲ承諾ス

第三條　日本國皇帝陛下ハ、韓國皇帝陛下、太公帝陛下、皇太子殿下竝ニ其ノ各妃及後裔ヲシテ、各其地位ニ應ジ相當ナル尊稱威嚴及名譽ヲ享有セシメ、且之ヲ保持スルニ十分ナル歳費ヲ供給スベキコトヲ約ス

第四條　日本國皇帝陛下ハ、前條以外ノ韓國皇族及其ノ後裔ニ對シ、各相當ノ名譽及待遇ヲ享有セシメ、且之ヲ維持スルニ必要ナル資金ヲ供與スルコトヲ約ス

第五條　日本國皇帝陛下ハ、勳功アル韓人ニシテ、特ニ表彰ヲ爲スヲ適當ナリト認メタル者ニ對シ、榮爵ヲ授ケ且恩金ヲ與フベシ

第六條　日本國政府ハ、前記併合ノ結果トシテ、全然韓國ノ施設ヲ擔任シ、同地ニ施行スル法規ヲ遵守スル韓人ノ身體及財產ニ對シ、十分ナル保護ヲ與ヘ、且其ノ福利ノ增進ヲ圖ル可シ

第七條　日本國政府ハ、誠意忠實ニ新制度ヲ尊重スル韓人ニシテ、相當ノ資格アル者ヲ、事情ノ許ス限リ、韓國ニ於ケル帝國官吏ニ登用スベシ

第八條　本條約ハ、日本國皇帝陛下及韓國皇帝陛下ノ裁可ヲ經タルモノニシテ、公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

右證據トシテ兩全權委員ハ、本條約ニ記名調印スルモノナリ

明治四十三年八月二十二日

隆熙四年八月二十二日

統監　子爵　寺内正毅

內閣總理大臣　李完用

大正二年九月五日、其頃は、山本内閣の時であつた。

外務省の政務局長、阿部守太郎が、其夜の七時頃、靈南坂上の自邸前に於て、二名の壯漢に襲はれて、重傷を負ふた、といふ事が、四方へ傳へられた。揣摩臆測、種々の風說が起つて、一般の人々は、容易に、その眞相を、捕捉し得なかつた。

翌日の新聞には、斯ういふ記事が、掲載されてあつた。

外務省政務局長阿部守太郎氏は、五日午後七時一分新橋着歸京の伊集院前駐支公使出迎の爲、同驛へ行きたる歸途、同七時半頃徒歩にて、靈南坂町三十一番地なる、自邸に入らんとする刹那、門内の暗闇より、一人の兇漢躍り出で、同氏の背部より動かせじと抱きつくと同時に、又一人の兇漢現はれ、一尺餘の短刀を閃かして、突然同氏の腹部臍下を突刺し、重傷を負はせ、返す刀に右股に突立てたり。

此咄嗟の襲撃に、阿部氏は、一たまりもなく打倒れたるが、其際發したる叫聲を聞付け、夫人生子、長男守義、長女千代子等、一樣に玄關へ飛出したる物音に、兇漢は逸早く逃走したるが、重傷を負ひたる阿部氏は、ヨロ〳〵しながらも犯人を追跡し、靈南坂町と麻布市兵衞町の境なる暗闇坂を、逃げるを追ひつゝ、盜賊を捕へろと大聲を發したれば、未だ宵の口の事とて、附近の者共聞附けて、急に賊を追驅けたり。

一兇賊の服裝は、黑立縞の筒袖に、小倉の袴及び麿減したる薩摩下駄を穿ち、麥藁帽子を被りたるが、追はれ追はれて、麻布谷町里俗山谷通りに出で、同町三十八番地道具屋田島屋事櫻井篠藏方先にて、遂に野次馬の包圍攻擊を喰ひたるが、賊は件の兇器を閃かして、寄らば斬らんと物凄く立廻り、野次馬が其勢ひに辟易して、遠卷きして打騷ぐ隙を覗ひ、遂に福吉町通り一番地角を左折して、氷川町方面へ逃走したり。

斯くて他の同じく書生風の一人は、阿部氏が一人を追跡する間に、事もなく靈南坂方面へ逃出し、遂に兩人とも何れにか姿を遯したり。

一方、途中まで追驅けたる阿部氏は、附近の者が兇賊を追跡し居るを見て、氣緩み途中に打斃れたるが、折から巡邏中の赤坂署の巡査に扶けられ、迎へに來れる家族に擔がれて、自邸に入り、直に佐藤、近藤(次繁)兩醫學博士及び附近の萩原醫師を招きて、應急手當を施したり。

警視廳にては、急報に接し、先づ安樂總監自動車にて見舞に來り、山本捜索係長、石森警部等急遽驅けつけ、直に非常線を張りたるも、五日夜中には、遂に逮捕するに至らざりき。

今、其兇行原因として、傳ふる所に依れば、曾て阿部氏が、對支問題の演說中に、暴に對し暴を以てするは、國際道義に悖るてふ文句に憤慨するならんかと。

阿部局長は、腹部重傷の爲起たず、六日午前十一時遂に逝去したり。

氏の負傷は、大腿部の分は差したる重傷にあらざるも、腹部を貫きたる刺傷より出血甚しく、一擊の下に致命傷を與へられ、各醫師の手當も效を奏せざりしものなり。

拙劣な文章ではあるが、當日の事情丈けは、これでも解る、と思ふ。

遭難の原因を、對支問題の如く、書いてあるのは當つて居た。

第一は、南京に於ける、張勳の兵隊が、殆んど暴動にひとしい、掠奪を行つた上に、我國旗を引下ろして、或は引裂いたり、或は泥土に委して、足下にふみつけたり、したのみならず、日本人にして、殺傷せられたものも少なからずあつて、之れが朝野の問題となり、頭山、犬養を始め、支那問題に、深い知識を有つて居る人達は、各所に集合して、その善後策に就て、政府に、進言して居る當時であつたから、外務省の軟弱なる態度に、憤慨して居るものも、頗る多く在つて、阿部が、不用意の發言から、血氣の人を怒らせた、といふ事は、確に認め得られる。

また、當時の外務省は、すつかり袁世凱に陶醉して、自由にあやつられて居たから、反袁派の人からは、あまり好

感を以て、迎へられて居なかつた事も、見遁し難い事情の一面であつた。

阿部を刺した壯漢は、福岡縣鞍手郡勝野村小竹の生れで、岡田滿といふものであつた。歳は、やうやく二十歳であつたが、曾て、上海にも居て、多少は、支那の事情も、知つて居り、友人の多くは、支那浪人であつた。

共犯の一人は、是れも福岡縣人で、企救郡足立村の宮本千代吉であるが、岡田に比べて、歳は一つの兄であつた。

兩人の蔭には、岩田愛公と、眞繼雲山が、附いて居た。ずつと離れて、內田良平の居た事も、認め得る。

阿部を、刺した時は、宮本が、背後から抱きついて、前面から、岡田が迫り、短刀を以て、腹部を突いたのである。

宮本は、その場から遁れて、一たん大阪へ行き、內田の紹介で、商船會社の永田一三に、保護をうけた事實がある。

山田四郎と變名して、神戸から嘉義丸に乘込み、大連へ遁れよう、としたのであるが、宇品で捕へられた。

支那へ、夙く渡つて、支那の事情は、一と通り知つて居た。常に支那服を着て居たが、一見したところでは、支那人としか思はれぬほどであつた。

(宮本が、大阪へ來た時に、著者も、大阪に居たのであるが、曾根崎新地の梅田樓に、泊つて居ると、しきりに偵吏がやつて來て、著者の事を訊くのであつた。直接に訊いてくれるなら可いが、樓婢に尋ねたり、樓主に訊いたりするので、ひどく迷惑した事がある。それは、宮本が、著者を、訪ねて來たか、どうかを知る爲であつた。併し、著者は、宮本に交際がなかつたから、同人が訪ねて來る譯もなく、一向平氣で居たが、事件の內狀は、少しばかり知つて居たから、その後に、內田に逢つた時、この事を話したら、內田は、笑つて居た)

岡田は、兇行の後、岩田や眞繼に逢つて、今後の處置に就て、相談した事がある。初は、自首するといふのであつ

たが、岡田は、熟考の末、自殺の決心をしたのである。

九日の夜、牛込の築土町に、辯護士をして居る、角岡知良を訪ねた。角岡は、岡田を知らなかつたのであるが、岡田は、浪人の會合などで、角田を知つて居たのであらう。

『先生、僕が、阿部を殺つけたのです』

と、打明けられて、角岡は、非常に驚いた。

『豪い事を、行つたね』

『それに就て、先生に、お願ひの次第があるのです』

『どういふ事か』

『僕を、犬死させぬやうに願ひ度い』

『犬死とは……』

『僕は、死ぬ覺悟ですから、跡の事は、宜しくお願ひいたします』

角岡は、しばらく考へてから、

『それは良くない考へだ。死ぬよりは、自首する方が良い。君の精神を、本統に認めさせるには、裁判所の法廷に立つて、暗殺の主意を、詳しく述べて、天下の批判をうけるに限る。君が、此事件の最後に取る可く、それが一番に、公明の手段である、と思ふ』

『併し、僕が生きて居ると、多くの人に、迷惑をかけますから、いつそ死んだ方が、良いと思ひます』

『人に迷惑をかける、と否は、君の覺悟一つだから、その心配は無用ぢや』

『僕は、左樣思ひません』

『まア、少し落付いて、よく考へたまへ』

『ハイ』

角岡は、ビールなどを飲せて、いろ／＼に諭したが、岡田は、しきりに考へ込んで居るから、自分が傍に居ては、却つて岡田の覺悟を、妨げる事になる、と考へて、角岡は、その場を外した。

しばらくすると、異常の呻き聲が聞えたから、角岡は、急いで岡田の居る座敷へ、かけつけて見ると、岡田は俯伏になつて、四邊には、鮮血が流れて居るので、岡田の肩に手をかけて、引起さう、としたら、もう呼吸は絶れて居た。左から右へ、腹を切つて、而かも、返す刀で、右の頸部を引いて居るから、もう介抱のしやうがなかつた。岡田が、自殺して居る、體の下には、支那の地圖が敷いてあつた。それは今、谷中の全生庵に、納めてある。

『今回、余の阿部守太郎を刺したるは、決して私怨の爲に非らず。氏をして一日を活かしめんか、帝國の威信は一日失墜せん、されば、國家の爲め、公人たる彼を刺したるに他ならず。余は、武士の家に生れたるも、同氏を刺すと同時に、直に切腹す可き覺悟なりしも、同氏の生死を知る迄、死を猶豫し居たり。其後、氏の絶命せるを知りたれば、愈切腹と決心したるも、適當なる死所を得ず、其中に、次第に警視廳の追究、益猛烈となりたれば、寧ろ潔く自首せんと思ひしも直接、安樂總監に面會するの機を得ず、名もなき警官の手に掛るを潔しとせず、熟考の結果、角岡氏の義俠を聞き、同氏の盡力を待つ事としたるものなり、余は、既に爲す可きを悉くなせり。今、從容として死すべし。只余が、今回の擧は、國家の爲にして、私怨の爲にあらず、私人として、阿部氏の最期は、同情に堪へず、輕少ながら遺族の方に、香奠として金二圓を贈る』

是は、岡田の遺書であるが、それに一圓紙幣二枚を入れてあつた。

角岡と岡田の間には、自殺と自首の爭ひがあつて、終に岡田は、角岡の諭に從つた如く見えたので、角岡は、安樂總監へ、面會の爲め、警視廳へ赴き、急ぎ歸つて來たら、既に切腹して居た、といふやうにも、傳へられてある。

岡田が、鄕里の伯父、長富夫婦へ贈つた、最後の手紙が在るから、それも掲げる事にしよう。

『去五日、阿部政務局長暗殺の件は、已に新聞紙上にて、御承知の事と察し申候。之を爲せしは、實は小生にて候。斯くも人を殺せし以上は、自分も亦死を免るべからず。況や、當路の大官を暗殺せしは、素より覺悟の前にて候。何故かゝる事を爲せしかは、十分書置きたれど其意を得ず。唯々彼阿部は、新聞紙に記載する如き、好人物にあらず。彼の存在は、國の爲め大不利益にして、今の場合、之れを暗殺すれば、外務省は素より國家全體、殊に心得違の役人共を覺悟せしめて、青年の奮起を促し、小生一人の生命を失ふは、國家の損失に、幾百千倍の功能あるものにて候。小生の死後、御二人樣の艱難は思はぬにあらねど、國家の爲め身を捨て申候。何事も、天命と諦められ度、不孝の罪、幾重にも御容赦被下度候。

此度の件は、自分一人の考へにて決行致せしものにて新聞紙には、二人の樣に爲しあれど、それは間違にて候。決行後、直に自首する積りにて候ひしが、その結果を見たる上にて、一先づ逃げ候處、大成功にて候ひしかば、自首する積りにて候ひしに關係せる人に迷惑を懸けるに忍びず、潔よく法式通りに切腹して、君國に殉じ候。生命も要らぬ、名も要らねど、唯御二人の事、氣懸りにて候、出來た後の事なれば、餘り心配なされて、身體に障りなきやう願上候。

他へは、御手紙差出さず候間宜敷、草葉の蔭より國を守り、皆樣の御無事を、祈り申候。書きたけれど是にて筆を差措き申候。

八月九日　　岡田彌

長富喜平樣

長富きく樣

岩田も、關係者の一人であつたが、九月十五日の午前六時頃、下谷稲荷町の田中弘之を訪ねた。

田中は、舍身居士として多く知られて居る人、慷慨激越の演說を爲る人としても、可成り知られて居るが、岩田や眞繼は、常に出入して、その指導を、うけて居たのである。

平生の快活なるに似ず、此日の岩田は、何となく沈み勝であつた。しばらく話をして居るうちに、岩田は、便所へ行つた。その跡で、岩田が、持つて來た、ポケツト論語を、何の氣もなく、田中が、取上げて見ると、その間に挾んであつたのが、一篇の論文らしく思はれたので、之を披いて見ると、田中は、思はず膝を正した。

『總理大臣山本權兵衞閣下　草莽

陛下の赤子岩田愛公、罪を引いて、自ら處決するに方り、玆に謹んで書を、閣下に呈す。

靈南の壯士、宮本岡田の二士は、野人が、肝膽相照らすの盟友として、平素最も深交あり、野人の支那を去つて、帝都に居を定むるや、日夕相往來し、以て帝國外交の振はざるを、常に嘆じ、日に國事を慷慨す。而して、今時の事、亦實に野人が、敢て彼等に、區々する阿部輩を刺せと煽動せしにあらず、我等は、固く彼等の決心を有せる、彼等の擧を目して、他の煽動に出づるものなり。となすは、彼等の壯烈なる死を、萬古に損傷せんとするものなり。吁、人生死を以て、其罪を償ふ、其間何等の私心あるなし。

閣下、幸に維新の昔に於ける、閣下の先輩、盟友の心事に、之を徵せられよ。然れども、彼等を殺したるは、是れ野人の言論、其因をなせるなきやに迷ふ、野人は、法の制裁は、或は免れるを得ん。然れども、天の大法、德義の責は、免れんと欲して免かれる能はず、謹んで最後の處決をなす。

支那の事、再び言ふに忍びず、野人、元、閣下に、何等の恩怨あるにあらず、況や、猥に亂を好んで、政府の施政に、反抗せんとするものにあらず、又墮落の無極、無慘、無愧の政黨者流の煽動に應ずるものにもあらず、我國積年、外交の不振、實に禁ぜんと欲して禁ずる能はざるものあればなり。

今日國家を禍するもの丶內、自制力なき政治家ほど甚しきはなし。而て、閣下、先に近時、青年の政治に干與するもの多く、其弊頗る甚し、と言ふ、實に至言なり。土耳古青年黨の如き、支那革命黨の如き、青年の政治運動は其效果の擧らざる以前に於て、國家の秩序を崩壞し、延いて國家を衰亡せしむるの例乏しからず、然りと雖、此種運動は、必然的時世の要求にして、防止せんと欲して、爲し得るものにあらず、寧ろ之を利導して、國運の進展を圖るに若かず、賢明なる閣下、冀くば野人が苦衷に、一顧を賜はらんことを。

更に終りに臨んで、一片私心あるなく、公憤逆る所、阿部氏を刺せし、宮本千代吉に對しては、寬大なる處斷を與へられんことを、當路の大官に警告せられたく、伏て願上奉り候。文案不宜

草莽の士　岩田愛公

恐惶謹言

大正二年九月十四日

之れを讀んで、田中の驚いたのも、無理はない。

岩田は、最後の別れに來たのであつた。この一篇を、山本首相へ捧げて、直に死なうと爲るのであつた。

『オイ、岩田ッ』

『……』

『これを見て、我輩は、君の覺悟を知つたが、併し、それは宜しくない。君の志が、如何なる點にあらうと、既に國法を犯した以上、速に自首して、國家の裁きをうけるのが、男子の取る可き道であらう。赤穗の義士は、亡君の仇を報じて、國法の處斷を待つたではないか。そこに、彼等の偉い點はあつたのだ。君も、これから自首して出るがよい』

と、田中は、二時間に渉つて、訓戒を與へた。岩田の自首は、全く之れが爲めであつた。

眞繼の書いた、逃走實記も、可成り面白いものはあるが、餘りに長いから、殘念ながら割愛する事にした。

（暗殺に關する本篇は、之を以て、終了した事になるが、それからそれへと、書いてゆけば、ナカ〳〵事件も多く長くもなるから、すべて省略する事にした。原敬と、星の遭難は、其本傳へ入れる事にしたから、序に斷つて置く）

海外雄飛

豪快傳（續）

近藤重藏の末路

一

高櫓の事は、その後も、しば〳〵問題となつて、奉行や城代からも、やかましくいつて來たが、重藏は、どこ迄も强辯して、その命に從はず、萬事が、捨鉢の態度であるから、いかんともいたし難く、江戸表へ、この旨を訴へて、その指揮を仰ぐことになつた。

重藏は、疾くから妻を迎へて、すでに七人の子供が有つた。長男の富藏は、父に似て豪放に近い方ではあつたが、讀書の力が薄いのと、父の如く、その志が高くなかつたので、動もすれば遊俠傳中の人になる傾きがあり、終に家を破り、身を誤るに到つた。

次男と四男は、平凡の人であつた。獨り三男の吉藏は、夙に佛門に入つて、晩年は、三田不動院の住職に据り、亮誼と稱して、權大僧都になつた。殘る三人は、みな女子であつたが、それ〴〵に他家へ嫁して、無事に生涯を送つた。

妻の國子は、七人の子を殘して、すでに此世を去り、重藏は、再び妻帶せずに、獨身をつゞけて居たのである。大阪へ赴任した時は、二三の家來を連れて、子供は、みな江戸の屋敷へ、留めて置いた。親戚のものが世話をして、家には、永く事へた老婆があり、子供の生育には、何の差支へもなかつた。

高櫓の事を初め、何事に就ても、我意を押通して、城代や奉行は、殆んど眼中に置かず、勝手な振舞はつゞけてゐ重藏の肩書は、重き弓奉行といふのであるから、いくぶんの遠慮もあつて、容易に手を附け得なかつたのである。殊に、其學殖と、豪放な氣性は、大樞な役人も、よく知つて居るので、役目の肩書よりも、その點に於て、多く恐れを抱いて居るのであつた。

斯くて、驕傲の氣性は、いよ〳〵長じて來る。誰一人として、頭を押へるものがないので、蔭の非難は受け乍らもその爲すところに就ては、全く自由奔放であつた。出入するものは、只重藏の命の儘に動くものばかりで、金の使ひ振も綺麗であつたから、臺所は、何時も賑やかに、人の集まりは多く、生活の華やかさは、今迄の弓奉行に、曾て見られざるほどであつた。

唯だ一つ、不自由な事は、妻の無い點である。未だ老い朽ちた齡といふのでもなく、今が、男の働き盛りであるから、出入する誰彼の勸めを容れて、妻を求める氣もあつたが、その註文は、ナカ〳〵むづかしかつた。里方は、家格の高い、立派なものといふのが第一で、妻となる可き女は、氣品の有る、美しいものでなければ不可、といふのが第二で、その上に、學問の出來るものを、といふ條件であるから、これは容易に見當るまい。

重藏は、しば〳〵京都へも出かけて、學者とも交際して居た關係から、公卿の二三子とも往來して居たのである。千種大納言の息女が、他に嫁してもよい、といふので、ひそかに、對手を搜して居る、との事が、或人の話から、重藏の耳に入つた。容色が、すぐれて美しく、その上に、詩歌の才がある、と聞いたので、重藏の心が動いて、交渉をつけて見ると、案外に話は進んで、迎へ得ることになつた。

けれども、公卿の娘と結婚することは、武家としては至難の事でもあり、殊に、幕府の方でも、堅く取締つて居るから、幕臣としての重藏は、この點に、多少の惱みがあつた。

千種家の方でも、綺麗たる幕臣との縁組は、種々の事情から、困難が伴ふので、話の進むにつれて、千種家の雖掌

山野邊藏人といふものゝ娘といふことにして、運びをつける事になつた。

當時の公卿は、頗る貧しいものであつたから、之れに關しての費用は、すべて重藏の方で、負擔するとの約束で、此に千種家の息女、辰姫は、重藏の家へ、嫁して來た。

元來、重藏は、女色を漁る、といふ質の人でなく、亡妻には、多くの子を生ませても、他に女を求めたことは、絶えて無かつたのである。左樣した人物が、どういふ譯で、斯んな事を行つたか。それには區々の說もあるが、要するに、性來の驕傲と、境遇の不平から、人の不可といふ事は、無理にも、やつて退けよう、と爲る、唯だ其れ丈けのことで、外に深い意味はないのであらう。

併し、幕府の方では、前に高櫓の事があり、その處分も、未だ決せざるうちに、今また此事があつて、世評の紛々たる以上、もはや打捨置く事は出來ぬ。

『勤方不相應の廉有之、御役御免』

と、いふ沙汰が下つて、文政四年の三月には、江戸へ呼戻されて、小普請入といふ事になつた。

一一

治承四年、源朝頼が、兵を擧げて、鎌倉へ攻め入らう、とした時、しばらく足を停めたところが、今の瀧之川である。江戸の北方、飛鳥山の丘續き、幽邃の仙境として、昔は、文人墨客の杖を曳いたところであるが、今では、全く俗化して、人家稠密の一市街になつてしまつた。

頼朝の募りに應じて、眞つ先に、馳せつけたのが近藤國平といふもので、是が重藏の祖先であつた。されば、瀧之川といふ土地は、重藏の身に取つて、深い因緣があり、近藤家の爲めには、忘れ難き記念の地である。

弓奉行を罷められ、江戸へ歸つて來ても、小普請入では、生甲斐のない日を送るのだから、重藏の氣性としては、

それに堪へられる筈がない。いかに焦つても、どれほど跪いても、對手が、幕府の役人では、どうすることも出來なかつた。幕府の方でも、斯うした人物は、あまり好いて居らないのだ。充分に實力を、有つて居る人でも、それを深く隱して、表面には、何も知らぬ、といつた風を粧ひ、一切他に對しては、その覇氣を包んで、何事も唯々諾々、御無理御尤もで居る人が、多く喜ばれて居たのだから、重藏の如き、はつきりした人物は、どうしても容れられないのが、當時の事としては、或は當然であつたかも知れない。

江戸へ歸つた當座は、しきりに焦つて、本役に立戻らう、として、それ〳〵に運動も、して見たが、さらに其效はなく、今迄に同情して居てくれたものも、多く居留守を使つて、面會を避けるやうになつたから、今は重藏も、名利の念を捨てゝ、俗世間に遠ざかり、晩年を、讀書三昧に送る可く、すつかり斷念めてしまつた。

隱栖の地は、瀧之川に定めて、野間正順の所有地を、ゆづりうける事にして、そこへ別宅をつくり、古今の珍籍奇書を集めて、之れを瀧之川文庫と名づけた。交友は、四方に多く有つたから、强ひて求めずとも、來遊するものは少なからず、武家、文人、畫家、儒者、殆んど有識階級のすべてが、尋ねて來ては、話込んで歸る。

一日、谷文晁が、ふらりとやつて來た。

『先生、御在宅ですかな』

『居る』

『御免蒙つて、ずつと通りますぜ』

『遠慮なく這入らつしやい』

親しい交情の文晁は、すぐに離室へ案内された。

『どうです、昨今は……』

『面白くありませんか』

『痛癢に觸ることばかりぢや』

『先生の眼から見たら、左樣でせうな』

『世情皆粉飾、哀樂無一眞と、誰やらが言ふた通りぢや』

『全く左樣です。わたくしのやうなものにも、左樣見えるのですから、先生の眼からは、嘸齒痒いことばかりでせう』

『公儀の役人に、是れといふ人物なく、只だ一時を糊塗て居るものを、宛も才人の如く取扱ひ、直情直言の士は、みな遠ざけられて、空しく其才幹を蔑られてしまふから、何一つとして徹底した事は行はれぬ。また一世の師表と仰がる可き、儒門の大家も、とかく事勿れの態度で、すべて口を噤ぢて居る爲めに、無智の役人を敎るものは、先づ皆無の有樣で、政道の頽廢は、日を追ふて甚太しく、國家の前途も思ひやられる。拙者の如く、書齋に引籠つて古人を友とするものにも、廢れゆく大道を、何とかして引直して見たい、と思ふことはあるが、大廈の覆へらんとする時、よく一木の支ふるところにあらず、と、今は全く斷念ては居るが、其處は、人間の情なさで、ツイ憤慨も爲ることになるのぢや、ハツハ、、、、、』

『いかにも、先生の仰せの通り、まことに嘆かはしい時世になりまして、心ある御方は、みな考へて居られるやうで御座います』

重藏は、急に思ひついたやうに、膝を立直して、

『時に、文晁先生』

『はツ』

『ちと折入つての御願ひが御座る』

『何事で御座いますか』
『拙者の像を、お書き下さらぬか』
『へへー、先生の御肖像を書け、との仰せですか』
『うむ』
『それは面白い、御引受けいたしませう』
『千萬辱ない』
『乃し、今日は御免蒙ります。そのうちに改めて伺ふことにいたしませう』
『今日から取かゝつて貰ひ度いのぢや』
『折角ですが、今日は、何となく氣が進みませぬから、近いうちに其覺悟で參る事にいたしませう』
『然らば、左樣願はうか』
『確に承知いたしました』
話がすむと、酒宴になつた。

二

文晁は、名人氣質の畫家であつた。磊落の天性が、放縱に流れて、筆を執ることは少なく、千金を積んでも、氣の進まぬ時は、容易に書かず、王侯貴人の依囑でも、厭だといひ出したら、槓杆でも動かぬところに、彼の見識は在つた。

元來が、花鳥を、最も得意として居て、人の肖像は、あまり得意でなかつた。互ひに心をゆるして、深く交はつて居たから、熊藏の頼みを、快く引受けたやうなものゝ、百萬石の前田侯が、斯んなことをいふたら、鼻の先で扱ら

つたかも知れぬ。

丹青を凝らした、重藏の肖像畫は、十數日にして書上げられた。
『まことに上出來、申分はない』
『イヤ、その御詞では恐れ入る。形貌丈けは、どうか斯うか、畫がいたつもりですが、眞に快心の作とはいへませぬ』
『どういたして、流石は先生の筆ぢや』
『而て、この畫は、どうなさるおつもりか』
『然る可き石工に命じて、石像にいたすので御座る』
『えツ、石像になさる』
『左樣う』
『これを、石像になさるのですか』
『いかにも……』
『ははア』
文晁も、それには驚いた。美しい表裝にして、床の間へ掛けられるものとばかり、思つて居たのに、今聞けば、石像に爲る、といふので、案外の思ひをしたが、さて其石像は、どこへ置くのであらうか。
『先生、それをどこへ置かれるのですか』
『瀧之川へ臨んで、一ツの洞窟が御座るから、それへ安置いたすつもりぢや』
『左樣なことを爲されても、公儀から御咎めは御座いませんか』
『自分の庭内へ、自分の石像を置くに、誰れが何を申さう。假りに俗吏の故障は起るとしても、それには辯解の道が御座る』

『左樣ですかな』

文晁の心には、多少の不安が有つた。

一士人が、自らの石像をつくつて、之を祀る、といふが如きことは、世間の疑惑を引き、終には表沙汰となつて、その筋からやかましくいはれるに違ひない。萬一にも、左樣した場合になれば、自分も必ず嚴しい御叱りをうけるに違ひない。これは相當に、面倒な事件になる、とは思つたが、今更に、いかんともなし得ず、負けぬ氣の文晁として は、斯んな時に、弱い音を吐かぬのが、かねての誇りにもなつて居たので、重藏が、平氣になつて居る丈けに、文晁も、此上の事はいひ得なかつた。

三十日餘り經つて、重藏は、親しい友人を招いて、何となく小宴を開いた。招かれた客には、武家もあれば町人もあり 書家、畫家、儒者、武術の先生、その種類は種々であるが、いづれも一と癖あるものばかりで、世の中を拗ねて通らう、と爲る人々であつた。酒宴は、程よく切上げて、それから雜談に移つた。

『今日は、お目にかけたいものが御座つて、御招ぎ申上げたのぢやが、これから御覽を願ひ度い』

『はは了、それは御趣向で御座つた。案内狀には、何も認めずに置いて、不意打ちの御案内は、流石ぢや』

『どういふ物か、はやく拜見いたしたいな』

『書畫か、道具か、何で御座る』

と、酒の機嫌も手傳つて、みな姦しくいふのを、重藏は、笑ひ乍ら受流して、

『それほどの物でも御座らぬが、少し變つた物ぢや』

『さ、その變つた物ぢや、といふのが、人の腸を抉るものに違ひない』

『いざ御案内いたさう』

重藏は、庭草履を穿いて、一同を案内する。

思ふさま地坪を取つて、廣々とした庭内、昔ながらの樹木が鬱蒼として、人手の小細工を用ひず、箱庭式のものでない丈けに、重藏の氣性も思はれる。雄大にして豪壯、天然の地形を利用して、瀧之川の方へ、斜面をつくり、樹木や雜草の間を、迂餘曲折して、やうやく川の畔に出た。

『やツ、これは……』

と、叫んで、足を停めたものがあるので、一同の歩みも留まつた。流れに臨んだ、洞穴の内に、一個の石像がある。甲冑の打裝で、長い槍を持つて居る立姿であるが、眼の所爲か、それが重藏に、酷く肖て居るから、互ひに顏を見合せた。

『宿昔の希望を一擲して、洞窟の内に收まつた武夫が、哀れな姿を御覽下さい』

斯くいふて重藏は、一同の顏を見詰めた。

四

石像や銅像なんてものは、誰れが建てたところで、大した相違はない。後世の人が、その人の德を慕ひ、また其功績を傳へる爲めにするのは、多少の意義はあるとしても、左樣した物が無くても、偉い人は偉いのであるから、實をいへば、そんな物は、在つても無くても、同じ譯である。

世間には、自分の石像や銅像を、自分で建てる人が在る。これは徹底した遣方で、他人に迷惑をかけずに、爲る事であるから、別に苦情のいひやうもないが、それでも彼是いふものがあるとすれば、そんな奴は、よほどの閑人といふ可く、餘計な世話燒にすぎない、と思ふ。

苟も人間として生れ、世間の人の眼につくほどの、働きを爲る以上、左樣した物に依つて、その名聲を、後世に殘す必要はあるまい。只だ後世の人が、其德を慕ひて爲るならば、それは、格別の事である。